
さくらヶ丘恋物語 2 藤

くまのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくらヶ丘恋物語 2 藤

【Nコード】

N2343J

【作者名】

くまのすけ

【あらすじ】

寅さんみたいな話を書こうというので、書いた話の第2弾。今回は、相変わらず、男たちに追い回されているつかさたちが、男たちを取り除けて、秋の夜に出会った青年と少女の恋を応援します。首尾よく二人は再会するのか？ 恋が成就するのか？

とびきり美少女・神宮寺つかさが、みんなの恋を応援します！

約束　↳プロローグ（前書き）

作者の創作意欲を維持するためにも、感想・レビュー・評価等いただけると、ありがたいです

約束　↳プロローグ

その夜、少女はひとりベンチに腰掛けていた。
学校の裏庭にある人気のないベンチ。

すこし離れた校舎の方では、いよいよ開幕が明日に迫った文化祭の準備が、まだあちこちで行われている。

「あれがデネブ・アルタイル・ベガ」

10月の星空を見上げ、星を適当に指差していく……

だれもいないはずの少女だけの空間。

だが……

突然、背後で人の気配が動いた。

「ちよつといいか？　あれは秋の四角形。ペガサスの大四辺形ともいうね」

少女は、その声に驚いて、振り返った。

背の高い青年が一人立っていた。

「それに、夏の大三角は、今、西の空のはずだが？」

少女が指していたのとは、まったく反対の上空を指差す。

「ついでに言うと、あっちの秋の四角形は、神様が天上から地上の様子をのぞくための窓として使われる場所だから、あの方向へ、なにかお願いすると、かなえてもらえるかもよ」

「そ、そうなの……」

このような人気のない場所に、見知らぬ男と二人きり。少女は立ち上がり、警戒心もあらわに、青年をにらむ。いつでも逃げ出せるように心の準備をしながら。

「ねえ、君、今ヒマ？」

「……」

「悪いけど、そのベンチ、そっち持つてくれない？　こないだ、剪定に来た業者さんたちの邪魔にならないように、移動しておいたん

だ。もう終わつたみたいだし、元へ戻すの手伝つてくれる？」

邪氣の感じられない笑顔で、少女に笑いかけてきた。
特に危険はなさそうだ。

少女は、しびしび自分がさっきまで座っていたベンチの端をつかんだ。

青年は反対側にまわり、

「せーの！」

ベンチは軽々と持ち上がった。そして、青年の誘導のもと、太いツル植物が巻きついた大きな植物棚の下に設置しなおされた。

「ありがとう。たすかったよ」

「い、いえ……」

月明かりに照らされて浮かび上がっている青年の顔は、さわやかな笑みであふれていた。

そのとき、人生で初めて、少女は、異性の笑顔を素敵だと思った。
自然と、少女の顔にも笑顔がこぼれた。

「ねえ、これ春になったら、すごく綺麗に咲くって知ってる？」

青年は、地面から生え、頭上の大きな植物棚に巻きついていっている太いツルを叩いた。

「今年の春、はじめて観たけど、花がいくつも垂れ下がって、紫色が鮮やかで、そこはかとなく甘い香りがして、すごく綺麗なんだよなあ」

「そ、そうなんですか？」

「ああ、来年は、だれか素敵な人と一緒に見れたらいいな、なんて……君も、彼氏がいたら、一緒に観に来るといいよ。きつと幸せな気分になれるから」

「え？ あ、わ、私、彼氏なんていません！」

思ったより、つよい声。

「ええ？ そうなの？ 俺も、彼女いないし…… そうだ、もし来年の春、コイツが満開になったときに、俺も君も恋人ができなかったら、一緒に観にこない？」

「えっ？」

ヘンなナンパだ。でも、全然いやな感じはしない。

少女は恥ずかしげに目を伏せながら、小さくうなづく。

「おっ！ ホント！ やった！ じゃ、約束だよ！ 来年の春、ここで、この場所で」

少女は青年の誘いにコクリとうなずいた。

その端正な顔を真っ赤に染めながら……

約束　↳プロローグ（後書き）

もともとブログで掲載している作品です。

加筆・訂正の上で、こちらへ移植します。

くまのすけの小説ブログ『恋とか、愛とか、その他もろもろ・・・』
： <http://loveetc.seesaa.net/>

作品ページ『さくらヶ丘恋物語2　藤　目次』：<http://loveetc.seesaa.net/article/13>

5908243.html

似ている！？ 1

私、私立神宮寺高校1年、神宮寺つかさ。

自分で言うのもなんだけど、美少女！ それも、とびつきり！

今朝も、私が出ようとする、家の前の通りに、花束を持った男たちが……

私に恋する男たち。

ホント、しつこいんだから。

毎日、毎日、毎日、毎日……

登校前、家を出た途端、『好きだ！』とか、『愛してます！』なんて、ありふれた言葉とともに、バラの花束をくれる。

バラって、綺麗だし、すごく素敵な香りがするから、嫌いではないのだけど、毎朝、両手に抱えきれないぐらいもらってもねえ。

それに、バラにはトゲなんてものもあって、気をつけないと、指引っ掻いちゃって、痛いんだよねえ。

そういうところまで気を配らないで、バラの花束を渡しさえすれば、喜ぶだろうって期待するの、あさはかな考えだと思わないのかなあ？

まったく！ ホント男ってバカばっかし！

というわけで、今朝も、すこし痛い思いをしながら、男たちからバラの花束を受け取って、玄関先の水をはったバケツに放り込んでいく。

私が学校へ行った後、ママがそのバラ、近所におすそ分けするのだ。くれた人たちには悪いけど、私の手元には一本も残らない。

私、どちらかって言うと、バラよりタンポポみたいでありふれた花の方が好き。

だって、美の女神つかさちゃんと一緒にだと、美しくはあっても、私ほどではないバラの花がかわいそうすぎるでしょう？

どんな花よりも美しい花の女王バラ。ところが、そのバラよりもはるかに美しい私。

私のそばにあったのでは、バラなんて、ただの雑草にしかみえない。

ふふ。ホント、私って罪な女！

このなにもをも寄せ付けない、すべてに超越した美貌、怖いぐらいだわ。うふふ。

こないだの観桜会で捻挫してしまった私。

とつくにギプスや包帯も取れ、杖なしでも普通に歩けるようになってる。

だから、今までみたいに、毎朝家を出て、歩いて学校へ向かってもいいのだけど……

観桜会以来、我が家の前には、何人も男たちが待ち構えているんだよねえ。

さすがに、こんな状態では、人の何倍もかわいい一人娘の私を、歩いて学校へ行かせるのは危険だとパパもママも判断したみたい。

こないだだって、二階の私の部屋をのぞこうだなんて考えたバカな男が、家の前の電柱に登っちゃって、警察に連れて行かれちゃったし。

私の家の前の通り、昼も夜も異様な男たちがウロウロするようになって、ご近所の人たちに、気味悪がられてる。

警察に相談してみたりもしたのだけど、一向に改善されない。

パトロールしてくれるなんていつていたけど、日に何度か、パトカーが家の前を通り過ぎていくだけ。そんな程度じゃ、全然、効果なんてないよ。まったく、もう！

こんな状態で私がのんきに一人歩きなんかしちゃったら、男たちが、どんなバカなことを考えたりしちゃうか。

そういうバカな考えの犠牲に私だってなりたくないもん！

だから、このところ毎朝、パパの車に送ってもらって学校へ通っ

ている。

今日も、パパと一緒にガレージへ向かって、助手席へ。

シートベルトをしめて、玄関の外へ出てきたママに行ってきたまー
すって手を振った。

出発進行！

さあさあ、男ども！ 道をあけえい！ つかさ様のお通りだい！

どかねえと、轆いていっっちゃうぞ！

似ている！？ 2

神宮寺高校第二キャンパス（旧さくらヶ丘女子高校）の裏門脇の駐車で車をおり、会社へ向かうパパにバイバイって手を振って、玄関へ。

今日も、私の下駄箱、ラブレターだとか愛の呼び出し状だとか二、三通入っていた。

観桜会明けの月曜日ほどではないので、ちょっと安心。

例のお昼休みの愛の生徒会連絡でお断りの放送を流してもらっているおかげかな？

でも、あの放送、おかげで、私、さくらヶ丘だけでなく、神宮寺の方でも、すっかり有名人になっちゃった。

神宮寺高校ナンバーワン美少女・神宮寺つかさを知らない生徒や教師なんてだれもない。それどころか、写真部が観桜会の間に隠れて撮影した私の写真、神宮寺の男子生徒の4分の3が購入したのだとか。

おかげで、写真部、その売り上げだけで、すべての機材を新しいのに買い換えることができたそう。

ったく！ 私にだって、プライベートだとか、肖像権だとか、あるのだから、そういう写真を撮ったり、売ったりするの、予め私の承を取り付けておくべきなのじゃないのかしら？

すくなくとも、何がしかのロイヤルティがあってもいいのでは？

なんか、間違っているように思うのだけどなあ？

今度、さく女生徒会（さくらヶ丘歴史伝統研究会）で熊坂会長に相談してみようかな？

公式身分である生徒会副会長として、なにか適切な対応を考え、手をつつてくれると思うのだけど。

私、そんなことをあれこれ考えながら、1-Aの教室へ歩いていった。

もちろん、どこのクラスの男子も女子も私を知っているから、あちこちから『おはよう』『おはよう』なんて、声がかかってくる。それに対して、私も機械的に返事をしながら、いつものエンジェルスマイルを浮かべて、手を振ってあげたりして。

あらあら、そのE組の男の子、私に見とれてないで、キチンと前を向いて歩かないと、柱にぶつかっちゃわよ！

って、あらら、そら、ごらんさい！ぶつかっちゃったじゃない。痛そうねえ！可哀想。

でも、そんな柱にぶつかっちゃったのは、私が悪いわけじゃないのよ。不注意にも、あなたが私に見とれちゃって、前を見ていなかったのが、悪いのよ！

まあ、私に見とれちゃうのは仕方ないから、今度から、私と出会ったら、女王様を迎えるみたいに、その場で直立不動の姿勢をとる方が、あなたにとって、一番いいことかもよ。

私が教室に入り、自分の席に座ると、

「よっ！ おはよう、つかさ」

「つかさ、おはよう！」

学君とありさちゃんが並んで入ってきた。

本当なら、ありさちゃんといつも一緒に登校する一番の親友が私だったはずなのに。家の前の男たちのせいで……

これで、私たちの小学校以来の友情にヒビが入ったりしたら、どうしてくれるのよ！

まったく、もう！

ちよつとやさぐれた気分で、席に座っていると、視界の端にこつちへ突進してくる女が……

「おはよう！ つかさちゃん！」

すかさず、学君が間に入って、ひかりん（D組の熊坂光）の突進を止めた。

「な、なによ！ 邪魔しないでよ、このストーカー野郎！」

「うるさい！ 毎朝毎朝、つかさに付きまといやがって、この変態女が！」

「な、なんですってえ！ だれが変態よ！ ヘンな言いがかりつけないで！」

「変態だから、変態っていつてんだよ！ 毎朝、つかさに飛びつこうとして、そういうのが、ヘン・タ・イっていうんだよ！」

周りの同級生たち、『またかよ』って顔で肩をすくめるばかり。このところ、毎朝のことだし、みんな既に慣れっこ。

私も、小さく息を吐いて、一時間目の数学の教科書やノートをカバンから机の上へ移す作業に取り掛かった。ふっと視線を上げると、部屋の隅で、同じようにしている学級委員長と目が合って、笑顔をかわしたりして。

さて、今日も準備OKつと。

今のうちに、お手洗いに行っておけば完璧。まだ、言い争いを続けている学君とひかりんをほっておいて、私、ありさちゃんに合図を送り、つれだってお手洗いへ。

途中で、中川君と並んで歩いてくる佐野君にすれ違って、

「おはよう！」「おはよう！」

「おう！ 神宮寺、斉藤！」

「おす！ つかさちゃん、ありさちゃん！」

私たちがお手洗いから教室へもどって、自分たちの席へつき、朝のホームルームにやってくる担任を待っていると、チャイムのギリギリにいつも飛び込んでくるのが、島崎君。サッカー部の朝練で遅くなるだけなので、荷物はすでに机の横。手ぶらで、自分の席へ。

そして、そのすぐ後に、担任がいつもの野太い声を上げながら入ってきた。

「オス！ みんなおはよう！」

今日もいつもの一日が始まった。

神宮寺高校に合格した生徒たちに合わせた授業しかしていない。こ
んなのじゃ、勉強にならないよ！

なんとかしなきゃ！

この学校の勉強だけじゃ、大学合格なんて、夢のまた夢！

私が、これからも輝かしい人生を送るためには、自分自身でなん
とかしなくちゃ！

って、よく見たら、委員長、教科書を見ているフリして、参考書
出して、一人で勝手に勉強しているし……
ずるーい！

でも、そうか、そういう方法があつたんだね。

よし、私も、明日から！

私たちの担任は、体育の教師。

今日みたいに6時間が体育の授業だと、ラクなんだよねえ。

数学教師のB組みたいに、一々、着替えて、教室に集まりなおさ
なくても、体育の授業の延長で、帰りのホームルームできちゃうし。
今日も、グラウンドで、A組の男子と女子、朝礼台の横に集まっ
て、担任からの連絡事項を聞いた。

いわく、買い食いせずに、まっすぐ帰れだの！

いわく、カップルは校内でいつまでもいちゃいちゃしておらず、
とつと別れて家に帰れだの！

いわく、色気ムンムンの音楽の先生とこれから仕事帰りにデート
だから、面倒を起さず、さっさと帰れだの！

そして、解散、男子も女子も、てんでバラバラに散っていった。

このままジャージ姿で、部活動へ向かうもの、一旦着替えに更衣
室へもどるもの。

中には、この格好のまま帰宅しようという剛の者もいたりして
……

私は、もちろん、着替えに更衣室組。

だって、こんなダサダサ、ジャージ姿じゃ、美の女神つかさ様の

名折れになっちゃうよ！

もちろん、一部のマニアには、こういう体操服姿、ジャージ姿で、受けがいいみたいだけど……

そんな一部の人のために、みっともない格好をガマンしなきゃいけない義理はない！

私、委員長と一緒に、女子更衣室へ向かって歩いていった。

「ねえ、つかさちゃん、手、洗いにいこ？」

そういえば、今日の授業は、男子が短距離走、女子は走り幅跳びだった。

おかげで、私のジャージ砂だらけ……

手もちろん砂でジャリジャリ。

「うん」

というわけで、私たちは、更衣室へ向かう途中にあるグラウンド脇の水場へ。

既に、何人が先客いて、それぞれに水を飲んだり、手足を洗っていたり。

「神宮寺さん、ここどうぞ！」

私が近寄った途端、男子の一人が、慌てて蛇口のひとつを譲ってくれた。

その男の子に、感謝のスマイル。あらら、その子、たちまち真っ赤になっちゃった。

うふ、かわいい。

「ありがとう」

ふつと見ると、一緒に水場へ来ていたはずの委員長、手も洗わずに、水場の脇で、タオルで汗をぬぐっている男子と、談笑しているし……

「あれから島崎も、結構うまくやってるな」

私の隣で男子の声が出た。ハッとそつちを振りむくと、視線が合った。

佐野君……

「なあ、最初、お前って、男のこと全然信用してないくせに、やたらと媚を売りまくる、困ったやつだと思っただけだ」

「ちよ、ちよ、ちよっと！ なによ、それ！」

突然のことで、口をパクパクさせるばかり。反論できない。

「案外、いいところもあるんだなあ〜 こないだ、感心したよ」
え？

佐野君、口元は、皮肉そうにしているけど、目が笑ってる。

これって、私、褒められたの？

「もっと素直になれば、もっと魅力的になるのにな、お前って」

.....

な、なんなのよ！ まったく、もう！

私は、今でも十分魅力的なの！ いいえ、むしろ、魅力的すぎて困っているの！

なにが、もっと素直になれば、もっと魅力的になるよ！

へんなこと言わないで！

アンタになんか、私のなにが分かるっていうのよ！

これ以上、美少女戦士つかさちゃんを怒らせたら、どうなっても知らないわよ！

私、目に怒りを込め、佐野君をにらんでやった。

でも.....

「ほれ、これ使え、お前、タオルもってきてないみたいだし」

佐野君はというと、私の呪詛のこもった視線を意にも介さず、自分が使っていたタオルを押し付けてくる。

「まったく！ もう！」

こんなタオルなんて、足元へ叩きつけやろうかしら！

でも、このタオル、男臭ッ！

よくこんな臭うタオルで、顔拭いたり、手をぬぐったりできるわね？

あつ、そうか！ あなたには、きつと、嗅覚なんていう高尚な感覚器がないのね。この鈍感下等生物め！

似ている！？ 4

私、それでも、素直に手を洗い佐野君のタオルで手を拭いた。確かにタオルをもってきていなくて、拭くものがなかったし。拭き終わって、隣に立っている佐野君に、乱暴に投げ返す。

「ありがとう」

怒りのこもった強い声。

「どういたしまして」

穏やかな返事。

なんか、腹立つ！

と、なにか思いついたような表情を浮かべ、

「なあ、神宮寺って、やっぱり神宮寺のいとこなんだな？」

えっと？ 最初の神宮寺が私のことで、じゃ、次の神宮寺は・・・

・・・

「さっき、100メートル走のとき、アイツと一緒に組になって、走ってたけど、アイツが一生懸命歯を食いしばって走ってた姿、今、お前がタオル投げてきた姿とそっくりだよ」

な、なに！ なんだよ、それ！

佐野君、突然、自分のジャージの上を脱ぎ、私に羽織らせた。

そして、私の背後に回り、さっきの男臭いタオル、私の髪を隠すように、頭の上にかぶせる。

「な、なに？」

「うん、やっぱりそうだ。すげえ、似てる！」

前に回った佐野君、感心して私を見ていた。

と、私たちの目の前を名もなき女子4人組が通りかかった。

「まなピーー！」

私に向かって手を振りながら。

え？ 学君、さっき着替えもせずに、空手部の部室へ行ったはずだけど・・・

戸惑っている私を佐野君、肘でついてくる。

「ほら、呼んでるぞ、手ぐらいふってやれ！」

名もなき女子たちに、軽く手を振ってみせると、キヤーだなんて、楽しいな黄色い声を上げながら、走っていつちやったし……

お、おい！ 私、学君じゃなくて、つかさなんですけど。

つい、佐野君の方に目がいった。

「ほら、な？」

どうやら、私と学君、似ているというのは、本当のことみたいだった。

な、なんか、すごく残念な気分……

そのまま、しばらく呆然と、名もなき女子たちが去っていった方角を見つめていると、すぐ隣で、自転車のブレーキの音がした。

いつのまにか、反対方向から、自転車近づいていたみたい。

そして、自転車に乗った男性が私に声をかけた。

「よっ、学！ 相変わらず、女にもてるな。うらやましいぜ、ちくしょー！」

こ、この声は……

き、清貴さん！

私、その場で固まってしまって、返事もできない。

「ありさちゃんも、いつのまにか、お前と仲良しになってるし、いい加減にしないと、お前のあのかわいいいなづけの女の子、つかさちゃんだったけ？ 彼女に愛想尽かされちゃうぞ！」

え！？ ええっ！！

わ、私、学君のいいなづけなんかじゃ！

ビックリして、清貴さんを見つめてしまった。

「なんだよ、そんな怖い顔すんなよ！ はいはい、お前の大事なつかさちゃんには、お前が女の子にキヤーキヤー言われて、鼻の下伸ばしていたなんて、言わないから、安心しろよな。じゃ、また、後で、道場でな！」

それだけ言うと、軽く手を振り、自転車をこいで、いってしまっ
た………

「そ、そんな………」

よりにもよって、清貴さんに、私が学君といいなづけだなんて、
思われていたなんて………

あ、悪夢だ！！

私、頭を抱え込んでしまった。

「お、おい、大丈夫か？ 顔色悪いぞ！ しっかりしろ！」

佐野君の心配そうな声に返事ができないでいた。

似ている！？ 5

それから、私、ショックで記憶がない……

次に気がついたら、ちゃんと着替えも済ませていて、呆然と、生徒会室の席に座り込んでいた。

隣で、ひかりん、心配そうに私を見ている。

黒板の前では、熊坂会長がなにか話していた。

「で、あるから、我々は、現状に危機感を持たねばならない！このままでは、栄光あるさく女組が、神宮寺のバカどもにひきづられて、まともな勉強ができなくなってしまいかねない！」

やっぱり、会長も今の授業レベルには、不満がいつぱいって感じだね。

「しかし、前から、バカだバカだとは思っていたが、あいつらがあそこまでバカだったとは……」

うん、まったくだ！

よりもよって、私と学君をいいなづけだなんて、思われていたなんて……

なんとか、清貴さんの誤解を解いておかななくちゃ！

「で、だ、これから我々、さく女生徒会として、対策を講じなければいけない！そこで、明日から、ここで自習会・勉強会を行うものとする。各自、放課後、勉強道具を持って、集まるように！」

とにかく、次、清貴さんに会ったら、私と学君はただのいとこ同士なだけで、全然いいなづけとか、そういう関係ではないって伝えておかななくちゃ！

「それから、さく女系の同級生や知り合いで、我々の勉強会に参加したいものがいれば、積極的に声をかけてもらいたい。みんないいね」

部屋の中の女生徒たち、一斉にうなづく。

とにかく、清貴さんが各部活動の指導にくるのは、一日おきで、

週3回。今日来ていたってことは、次は、あさつて。

あさつては、何が何でも私たちのこと、しっかりと伝えなくちゃ。テーブルの下で、ぎゅっとこぶしを握ってみたりして……。「こらそこ！ さつきから、なにブツブツつぶやいてるんだ！ ちゃんと私の話を聞いてたのか？」

ポコッ！

熊坂会長に、丸めた紙で殴られてしまった。

今日の生徒会はお開きになり、私たちの周りでは、女生徒たちがそれぞれに帰り支度をはじめたり、友達とおしゃべりをしたりしている。

「ねえ？ つかさちゃん、大丈夫？」

ひかりん、心配そうに私を見ている。

「え？ あ、うん、大丈夫……」

「そう、そう？ でも、その……」

なにか言いにくそうに、私のブラウスの襟元を見ているし。ん？ なんだろう？ なにか私の襟についているのかな？

「ねえ、つかさちゃん、それ、裏返し」

一瞬、ひかりんが何を言ったのか、分からなかった。

でも、私の頬に徐々に血が上っていくのが自分でも分かる。

「え？ ええ!？」

「つかさちゃん、本当に大丈夫？ なにかあったの？」

「う、ごめん！」

私、慌てて、部屋を飛び出して、近くのトイレに飛び込んだ。

個室に入って、私の着ているものを確認すると、ブラウスは裏返し、スカートは後ろ前だ。

し、しかし、まだ衣替え前で、制服の上着を羽織っている時期で本当によかった。もし、これが夏場、上半身が半袖ブラウスだけの姿だったら。

ぞ、ぞぞぞ……

超絶美少女つかさちゃんが、ブラウスを裏返しに着て、ボタンを留めることもせず、前をはだけさせて、学校内を歩いているなんて
図。

男の子たちにしたら、夢のような光景なのかもしれないけど、そんなの絶対やだ！

なんだか、なんだか、すごく情けない！

私、どうしちゃったのだろう？

やだ！ やだ！ やだ！

ブラウスをひっくり返し、急いでスカートを元に戻して、改めて、全身を確認。今度こそ、完全に身なりが整ったはず。私、ひとつ深呼吸して、トイレのドアのノブに手をかけようとした。

と、そのとき、ふいに目に熱いものがこみ上げてくるのを感じた。え？ うそ！ なんて？

慌てて伏せた視線の先を、足元めがけて水滴が落ちていくのが見える。

ど、どうしよう……

私、ごそごそとスカートのポケットの中を探り、お気に入りのハンカチを取り出す。

それを目の下に当てた。それから、私の意志とは関係なく、唇が動き、私の声が個室の中にあふれるのを耳にした。

清貴さんのバカ！

佐野君のバカ！

学君の大バカ！！

清貴さんなんて、嫌い！

佐野君なんて、大っ嫌い！

学君なんて、大大大っ嫌い！！

男の子なんて、みんな、みんな、大っ嫌い！！！！

なにが、いいなづけよ！

なにが、もつと素直になれよ！

なになが、まなピーよ！

バツカじゃない！

くだらないわよ！

最低ッ！

みんな、みんな大っ嫌いなんだから！

みんな、みんな・・・・・・・・

私、両手で顔を覆い、しゃがみこんでいた。

嗚咽がとまらなかった。

ようやく、落ち着き、私がトイレのドアを開けて外に出ると、窓の外の風景は、夕日に赤く染まっていた。

明日は、きつと晴れるわね、なんてぼんやり思いながら、生徒会室へもどつてみると、ひかりんがひとり、夕映えの中、ぽつんと椅子に座り読書している。

そういえば、初めてひかりんにあったときも、彼女、読書していたっけ。

「あれ？ みんな、もう帰っちゃたの？」

「うん」

「そう、さつきはありがとうね」

私、ひかりんの方を見ずにお礼をいった。ブラウスが裏返っていることを教えてくれたお礼。

「うっん。もう、気分は落ち着いた？」

「え？」

「さつき、トイレで泣いていたみたいだったから・・・・・・・・」

ひかりん、やわらかく微笑んだ。

「う、うん・・・・・・・・」

さつき私がつぶやいていたこと、聞かれちゃったのかしら？

「声をかけようか、迷ったけど、かけずに待っていることにしたの」

「そ、ありがとう」

「うづん。いいの。なにか困ったことがあったら、いつでも私に相談してね。いつでも、私、つかさちゃんの意味方なんだから」

私、慌てて後ろを向き、顔を上げた。目の端にまた涙が浮かびそうになったから。私の涙をひかりんに見られないように……

似ている！？ 6

私たちは、並んで、校門を出た。

校門の前では、正装した何人かの男たちが、また花束を持って立っている。

今朝の我が家の前と一緒。

そういえば、今、校門前に立っている男たちのうち何人か、朝にも家の前で見かけたような……

校門を出た私を見つけて、男たち、わっと近寄ってきた。

『愛してます！』とか、『あなたに夢中です！』とか、『結婚してください！』だとか、口々に齒の浮くようなことをいいながら、私たちに迫ってくる。

いつもなら、学君がありさちゃんと一緒なのに、今日はさすがに学君と一緒に帰る気にはなれなかった。かといって、ありさちゃんも、用事があるとかで既に帰宅した後だったし。

ともかく、日中陽があるうちなら、このおバカな男たちでも、馬鹿な真似をしないだろうという希望的観測で、帰ることにしたのだ。でも、でも、やっぱり、こんな風に迫られちゃうと、すごく不安になってくる。

本当に、なんとか無事に、家に帰りつくことができるのかしら？ と、ともかく、ここでおびえていたのじゃ話にならないわ！

私のかたわらには、頼りになるか、ならないか分からないけど、ひかりんだっているのだし。

ファイトよ！ つかさ！

私、男たちから花束を受け取り、お礼にひとりひとりに笑顔をプレゼント。

途端に、脳裏に声が聞こえてきた。

お前って、男のこと全然信用してないくせに、やたらと媚を売

りまくる、困ったやつだと思っていた。

な、なんですって！

佐野君の言葉を思い出した途端、胸の中にムカムカした気分が広がる。

でも、表面は、優しい笑顔の美少女戦士つかさちゃん。

男たちは、私の愛らしい笑顔に夢中になって、盛んに話しかけてくる。

「ねえ、これからどこかへ食事に行かない？」

「映画にいこうよ！ 映画！ いますごくいいのやってるからさ！」

「俺のベンツでドライブいこうぜ！ これから海とか気持ちいいぜ！」

「！」

はあゝ 全部間に合ってます！ できれば、私の笑顔だけで満足して、私の前から消えてくれない？

「ごめんなさい。私、これから彼女の買い物に付き合つのでうふ。」

なんて、ぶりっ子仮面。自分でも気持ちわる〜！

「そう、じゃ、店まで送って行ってやるよ！」

「俺、荷物もちしてあげるよ！」

「ついでに、ボクもなにかシヨッピングしようかな？」

「たく！ しつこいんだから……」

ひかりんも見かねたみたいで、

「ねえ、つかさちゃん、そろそろ急がないと、お店しまっちゃよう！」

「え、ホント。みなさん、ごめんなさい。私たち、急ぎますので」

私、ひかりんの手をとって、葉桜の坂道を駆け下り始めた。

「あ、待って！ 俺もいっしょに！」

「急ぐんだったら、僕の車に！」

「送っていつてあげるよ！」

なんて声を振り切って、一生懸命駆けていく。

大量の花束を抱えた美少女たちが、葉桜並木の坂道を、手をつな

いで走りぬけ、その後ろを正装した男たちが追いかけるなんて・・・
．．．
すぐくシユールな光景かも。
悪夢にでそう。

私たちがようやく歩道橋までたどり着いた時には、男たちは既に、
私たちに追いついていた。

「ねえ、待ってよ、逃げることはないじゃん！」

って、見知らぬ男たちに追いかけられたりしたら、普通の女子高
生は、逃げるってえの！

男たち、私の肩をつかんで、グイツと押しとどめようとす。

「ちよ、ちよっと、放してよ！」

私、抵抗して、腕を振り回した。もちろん、その腕の中には、大
量の花束。

その大量の花束が、私の肩をつかんだ男の顔を打った。もちろん、
こういう花束、中に多くのバラが含まれているのがお約束。トゲの
ある綺麗なバラ。

ぐえ！！！！

何人かの男たち、思わぬ痛さにのけぞって、しゃがみこんでやん
の！

いいきみだわ！

なんとか、男たちがひるんで、自由をとりもどした隙に、歩道橋
を上り、渡った。

でも、歩道橋の上では、また新たな男が、花束を抱えて待ってい
るし。

「あ、じん・・・お嬢さん、ひさしぶり。こんなところで
お会いできるなんて、奇遇ですね」

ん・・・

頭痛くなってきたそう！

今度は、観桜会のために小芝居打ってきた男だ！

今日は、ハエと一緒にじゃないみたい。

「あ、お久しぶりです。こないだは、危ないところを助けていただき、ありがとうございます」

「いやいや、別に、当然のことをしたまですよ。気になさらないでもいいですよ」

はい、そうですか、もちろん、全然気にしていませんよ！

「そういえば、すごく喧嘩がお強かったですよね？ 私がヘンな男に絡まれていたときに、助けていただきましたし」

「え？ ええ……」

顔が引きつっているよ。

「私たち、今、ヘンな男たちに追われているんです。助けてください！」

私、そういうと、ひかりんの手を引きながら、その男の横を通り抜けていった。

ついでに、腕の中の花束を全部、その男に押し付けたりして。
「え？ えっと……」

私、それから一切後ろを振り返らずに、家まで駆けていった。

なんだか、背後の方から、ぐえ！ だの、げえ！ だの、ひでぶ！ だの悲鳴が聞こえていたような気もするけど、聞こえなかったことにしよう。

まあ、これで、二度とあの人に会うこともないでしょうしね。

南無阿弥陀仏……

ん？ もしかしたら、南無妙法蓮華経？

あの人の宗教、キリスト教だったりして、アーメン！

似ている！？ 7

私たち、なんとか無事に家までたどり着くことができた。

我が家が、こんなにも神々しく見えたのって、はじめてかも。

困難を乗り越え、試練に打ち勝ち、ついに私、ゴールにたどり着いたのよ！

学君やありさちゃん、私の大切な友達たちの世話になることなく、観桜会以来、初めて一人で（ひかりんが一緒だけど……）我が家に帰り着いたの！

私、玄関に飛び込んで、感動していた。

そして、自然と、口の中から笑い声があふれてきた。

あはははは。

すごく楽しかった。愉快的気分だった。

こんなに愉快的気分って、いつ以来だろう？

きっと、さく女の合格発表をありさちゃんと見にいって、二人の名前が掲示されているのを確認したときに、二人してピョンピョン飛び跳ね、喜び合って以来かも……

よかった、本当に、よかった。

「ねえ、つかさちゃん、もう大丈夫みたいだね？」

私の隣で、ひかりん、ドアに持たれかけながら、荒い息を吐いて、笑いかけてくる。

「え？ うん、なんとか逃げ切ったみたい」

「ううん、そうじゃなくて……」

ふふふ。

私も、満面で微笑みかけていた。

「うん、よかった」

そうつぶやいたのは、私だったのだろうか、彼女だったのだろうか？

ひかりんと私、それから2時間ほど、一緒に過ごした。

なんか、私の部屋の中に初めて入ったひかりんの目が、妖しく光っていたのが、怖かったのですけど……

おやつをかじったり、お茶を飲んだり、おしゃべりしあったり。

私の中学時代のアルバムを引っ張り出してきて、あれこれ思い出を話すのなんて、すごくたのしかった。

でも、私と学君と一緒に写っている写真をみて、露骨に顔をしかめられちゃうと、ちよつと複雑な気分になるのだけど。

なにも、そこまで学君のこと、嫌わなくても……

日もとつぷりと暮れ、外が真っ暗になり、ひかりんが帰り支度をはじめたころ、その当の学君が、我が家を訪ねてきた。

「つかさ、大丈夫だったか？　なんで先さつさと帰っちゃうんだよ！　怪我とかしなかった？　ヘンなことされなかった？」

それが、私の部屋に入ってきたときの第一声だった。

「うん、大丈夫だった。ちよつと危ない目にあいかけたけど。平気だったよ」

部屋の中に一歩足を踏み入れた途端、何かにいる人物を見て、目を丸くしてる。

「って、おい！　なんで、その変態女がつかさの部屋にいるんだ！」

「な、なんですって！　ストーリーカー男のくせに！」

あらら、また、はじまつたよ。

「ちよ、ちよつとストップ！　学君もひかりんも落ち着いて」

ガルル

グルル

って、あんたらどこぞの野良犬か！

「今日はひかりんに送ってもらったの」

「そいつが一緒の方がもつとずっと心配になる！　つかさ、本当に大丈夫だったのか？」

心配してくれるのは、うれしいのだけど、そんな風に断言しなくても。

「それより、学君、もうこんな時間だから、ひかりんを送っていつてあげて？」

この一言のあとの二人の様子、ちよつとした見ものだったかも、学君もひかりんも、一瞬のうちに石化しちゃったよ。

「こんなヤツに送ってもらうくらいなら、通り魔にでも襲われて、死んだ方がマシだわ！」

「ふん！ 俺だって、お前なんか送っていきたくないわい！」

「ねえ、そんなこといわず、お願い、ね？」

「う、うう………つかさがそう言うのだったら………」

「フン！ だれがアンタなんかに！」

「こら、ひかりん！ ひかりんも魅力的な女の子なんだから、夜道を一人で歩くなんて、危険なことしちゃいけないよ！ だから、学君に送ってもらいなさい！」

「え〜！ ヤだ！ 絶対ヤだ！」

はあ〜 この娘ときたら………

じゃ、いいわ、現実を見せてあげれば、考えが変わるでしょう。

私、ひかりんを窓際へ連れて行った。そして、カーテンと窓を開け、下の通りを見せた。

「………」

外は真つ暗だというのに、私の家の前、何人かの男たちが立ち止まり、熱心に私の部屋の窓を見上げている。

窓からの光に照らされて、浮かぶ青白い顔、顔………

私が顔をのぞかせたので、下の男たち、一斉に声を上げはじめた。

『好きだ！』『愛してる！』『I love you！』etc

「で、あの中を一人で帰って行く？」

ひかりん、かわいそうにガクガク震え始めちゃったし………窓を閉め、カーテンを閉じて、学君に目配せ、今度はひかりん何も言わず大人しくしている。

「じゃ、送ってくるわ」

「うん、お願い」

「ああ、また、もどってくるから」

そう学君告げて、ひかりんを連れて外へ出て行った。

一瞬、通りの男たちがどよめいたのは、ひかりんを私と見間違えたからだろうな。

すぐに、失望のため息が聞こえてきた。

「ったく！ いい加減、近所迷惑なんだから！」

学君がもどってきたのは、それから1時間ほどしてから。

「ただいま」

「あ、おかえりなさい」

「アイツ、ちゃんと駅まで届けてきたぞ」

「ご苦労様」

「なあ？　なんで、今日は先に帰ったんだ？　アイツが言ってたけど、結構危なかったみたいじゃん？」

「え？　う、うん……」

私、ちよつと躊躇した。でも、ちゃんと、今日あったことを話すことにした。

佐野君に私と学君がそっくりだと指摘されたこと、実際、名もなき女子4人組も、清貴さんも、男子のジャージを被って、髪形を隠している私を見て、学君と間違えたこと。それから、清貴さんが、私と学君の関係をいいなづけだと思っていること。

そこまで話した途端、学君、なにか思い当たったことがあるみたいで。

「ああ、だから、今日、部活帰りに寄った道場で、清貴さん、ヘンな目配せしてきたんだ」

ひとり納得の様子。

「でも、俺とつかさつて、そんなに似てる？」

私のことを改めてまじまじと見つめてくれる。

どうみても、私と似ているように見えないのだけどなあ？　私的には……

なんで、みんな間違っただろう？

ともかく、いいこと思いついた。

「ねえ、ちよつと待ってて」

私、学君を部屋に待たせといて、ママの部屋へ。

クローゼットの中からストレートロングのウィッグを失敬して、もどった。

「ねえ？ ちょっとこれ被ってみてくれる？」

「え？ ああ、カツラか、どれどれ、こっう？」

「って、それ前後逆」

顔の前に長い髪を垂らして、顔が見えなくなった女が目の前に・

・

「さ、貞子・・・・・・・・？」

こ、こわー！

ありさちゃんが、この姿見たら、どうなるのだろう？

ちよっと見ものかも。

学君、ごそごそウィッグを直して、髪を掻き分けて顔を出した。

う、うゝん・・・・・・・・

なんか、すごく身近で見覚えのある少女になっちゃったぞ！

こ、これは・・・・・・・・

私、タンスをゴソゴソして、ゆったりめのカーディガンとスカートを引っ張り出し、学君に押し付けた。

「ちよっと、コレに着替えてみて？」

それから、私は、あまり目立たない地味めの髪留めでアップにして、キャスケットを目深にかぶってつと・・・・・・・・

「学君？ 見て・・・・・・・・」

振り返った途端・・・・・・・・

キャッー！！

へ、変態！

ついに、この変態男、ありさちゃんだけでなく、私にまでヘンな気を起こすようになったの！

「な、な、な、なんで、アンタ、そんなところでズボン脱いで、パンツ一丁になってるのよ！」

私、手近にあったクッションを投げつけた！

「わ！ な、なにすんだ！ やめろ！」

あらら、避けようとした学君、脱ぎかけのスボンの裾に足とられて、ひっくり返っちゃった。

構わず、近くにあったものをどんどん投げつける。

「でてって!!」

「わ、や、やめる! やめろって!!」

「変態! ヘンタイ! ヘンターい!!」

「ったく! 痛えなあ」

「ご、ごめん!」

「お前が、そもそも着替えろって言ったんだらうが?」

「ご、ごめん、なさい」

学君、コシをさすりながら、非難の視線。

でも、ウィッグを被って、カーディガンを羽織り、スカートをはいた学君って……

「なんか、髪が長いけど、私が目の前にいる……」

「ああ、それから、俺の目の前には、女言葉しゃべる帽子被った俺がいるんだけどな……」

お互いに、お互いを見詰め合ってしまった。

「た、たしかに、似てるのかもな、俺たち」

「み、みたいね、残念な気持ちでいっぱいだけど」

「ああ、って、何でやねん!」

ペシッて肩を殴られてしまった。関西弁つきで。

とはいえ、よく似ているのは確か。でも、でも、なんか、どこかが違う。なんなのだろう? なにが違うのだろう?

「あとは、つかさ、晒しを巻いて、胸隠したら、だれもお前だって気がつかないかもな」

そ、そうか、学君、胸がペタンコなんだ。

「俺の方は、これで十分みただけだな!」

こ、こらー!

私にだって、ちゃんとこんもりとあるのだぞ! 女の子らしい胸

が！

「何でやねん！」

グーで顔を殴ってあげた。

部屋に飾ってあった、小さなぬいぐるみたちを二つの巾着袋につめ、ヒモを結んで、肩に掛けてあげれば、即席胸パッドの出来上がり。

私の見立てでは、ぬいぐるみが4つ必要だと思っただけで、学君2つで十分って。

な、なんか、くやしい！！

ともあれ、私は学君の着ていた上着を着込み、下は、部屋着のデニムのまま。

部屋の中だけど、帽子を被った姿。

二セの学君と二セのつかさちゃんが誕生。

早速、あれこれ実験してみなきゃね。

まずは、学君の姿で、郵便受けと新聞受けをのぞいてこよっと。

私、玄関に立って、ひとつ深呼吸。

そして、一気に玄関のドアを開いた。

うおお！　なんて、声が一瞬上がりかけたけど、すぐに、っちえ

！　野郎か！　だなんて、声がチラホラ……

郵便受けをのぞいて、新聞受けから、夕刊を引っ張り出しても、だれも、私だとは気がつかなかったみたい。

美少女つかさちゃんには、すごく興味があっても、しょっちゅう出入りしている親戚の少年の方には、男たち、興味なんてないのだねえ。

それどころか、なんとなく、羨望というか、妬みというか、悪意のこもった視線が痛い……

俺たちのつかさちゃんに、親戚だからって、気安く近づきやがって！　ってな感じなのかな？

きっと、中には、そういう悪意を行動につつすヘンなヤからもいるだろうし、もしかして学君、私と付き合うだけで、結構大変な迷

惑をかけているのかしら？

いつも変わらず優しい態度で接していてくれるけど、私、学君にとっても感謝しなくちゃいけないのかもね。

学君、ありがとう！

でも、こんなこと、とても本人の前では言えないや。調子に乗りかねないしね。

無事、私が夕刊をもって、玄関に帰還すると、学君、ホツとした様子を見せた。

やっぱり、学君も心配だったみたい。

もちろん、今が私の変装だと見破られやしなやかだけでなく、へんな因縁をつけられたりしないか。

ドアの影で、いつでも飛び出せるように準備して、待っていてくれた。

「ただいま」

「おかえり」

私たち、にっこり微笑みあった。

うっん………

この目の前の天使みたいな心を蕩けさせるような笑顔。これが、私がいつもまわりに振りまいているエンジェルスマイルなのね。

なんで、男子たちが、この笑顔で目をハートにしてしまうのか、よく分かるような気がした。

私って、ほんとすごい！

いいえ、私の美人度って、とてつもなくすごい！

それから、私たち、部屋へもどるため、玄関からすぐの階段を上ろうとしたのだけど、一階奥の台所の方から、ママの声が。

「つかさ、ちよっとこっち来て、お料理手伝ってちょうだい！」

はい、なんて返事をしたのだけど、なんかやだな、面倒くさい！

私、食べるのは好きだけど、料理するのって、いまいち好きじ

やない。

「ね、つかさちゃん？ ママが呼んでるよ」

なんて、私の後ろから階段を上るうとして、ニセつかさちゃんに言ったりして。

「ああ！？ いくらなんでも、バレるだろ？」

「どうだろう？ ためしてみてもいいんじゃない？」

「ああ………」

って、単に手伝うのが面倒くさかっただけなんておくびにも出さずに、学君の背中を押して、台所へ。

「手を洗って、菜っ葉刻んでくれる？」

「はい」

って、返事をしたのは私だけど、台所の中へ入っていったのは、学君。

包丁を取り、シンクのまな板の上に菜っ葉を並べて……トントントントントン……

は、はやーい！ むちゃくちゃ上手！

「え？ つかさ、どうしちゃったの？ 急に上手になって」

ママも驚いちゃってるよ。

「熱でもあるの？ 大丈夫、お医者さん行こうか？」

って、私どれだけ下手くそだと思われてたのよ！ もう！

「え、えっと、その………」

学君、どう返事をしていいかわからないみたい。でも、今、学君、声だしちゃったから、いくらなんでもママ気がつくでしょうに！

もう！ 考えなしなんだから！

「それになに？ 私のウィッグ被っちゃって！ 毛が入るから、料理のときは脱いでおきなさい」

って、声の違いはスルーかよ！

「料理をするときは、髪をくくっておくべきなのよ。分かった？」

つかさ！ あんたもお嫁にいったら、ご飯の仕度とかするんだから、これからは気をつけなさい！」

「は、はい………」

ママ、学君の返事に満足した表情で、お鍋の火加減を覗き込んでる。

ふふふ。

お嫁に行ったらって、その子の場合は、お嫁をもらったらなんだけぞ。

でも、ママ、本当に全然気がつかないみたい。

うう………

それは、それで、傷ついちゃうなあ。

結局、学君、晩ご飯の仕度全部手伝ってくれた。

いつもと違って、手際よく手伝う私に、ママすごく満足そう！

「うんうん、あんたもやればできるじゃない！ さすが、ママの娘よね」

ううん………

なんか、複雑。

パパは今日も遅くなるって電話があったので、学君も晩ご飯を食べていくことに。

いくらなんでも、家の前を不審者よろしく、男たちがウロウロしている状況で、女二人きりなんて、学君もほっておけない。

そういうところは、頼りがいのあるいい男なんだよねえ。

ホント、学君が私のいとこで幼馴染みで、よかった。

でも、ママは、結局、私たちがずっと入れ替わっていたの、全然気がついていなかったみたい。

「つかさんちのおばさん、結構、抜けてるところあるよなあ」

なんて、学君、それはちょっと失礼な言い草じゃないの？ まがいなりにも、学君のおばさんでもあるのだし。とはいえ、それは的外れではないと私も思うのだけど………

勉強しましょう！ 1

次の日も、パパに学校まで送ってもらった。

運転手付きの車に毎朝送ってもらって、登校するなんて、どこぞのお嬢様にでもなった気分。

学校の裏門脇の駐車場に車を止め、ドアを開けて、元気よく飛び出したのはいいのだけど……

「パパ、気をつけてね」

「ああ、明日から、お前も気をつけるんだぞ」

「うん、分かってる」

「声掛けられても、絶対、ヘンな男についていくんじゃないぞ！」

「うん、分かったよ」

「絶対だぞ！ 忘れるなよ！ なにしる、お前はあの母さんの子供なんだからな」

って、それどういう意味よ！ まったく！

「大学時代、俺が見初めて、声かけたら、ほいほいついてきて、そのまま嫁に来た女の血を引いているんだから……」

「まったく、自分の奥さんのことを、野良犬かなにかみたいに言っちゃって。パパだって、ママに声かけられて、興味がないのに、大学の文芸サークルに入会しちゃったくせに！」

「はいはい、分かってますよ」

「俺みたいなイケメンがナンパしてきても、ポーとなって、ついていたりしちゃダメだぞ！ いいな？」

「はい、はい」

「本当に、分かっているのか？」

「もう、分かったから、そろそろ行かないと、飛行機乗り遅れちゃうわよ！」

私、乱暴に車のドアを閉めた。

バイバイって軽く手を振って、足早に校舎の方へ歩いていく。

パパ、しばらくあきらめ切れないうちに、私の方を見ていたみたいだけど、やがて、家へ引き返して行った。

パパがやたらと私のことを気にしていたのにはわけがある。

昨日の夜遅く、パパが帰ってきて言うには、『明日から、しばらくアメリカへ出張することになった』のだそう。

急な出張話。

会社の庶務部に勤めているパパにアメリカ出張だなんて……

へんなの？

たとえば、会社の営業だとか、研究・開発部門とか、そういうところの人が海外出張なら、なんとなくありえるように思うのだけど庶務。会社の備品を管理したり、株主総会の手配をしたりするのが主な仕事。

一体、アメリカへ行って、なにをするのだろう？

なんでも、アメリカの取引先の直々の招聘でパパが行くことになったそうなのだけど……

でも、パパ自身、その取引先の人と会ったこともないし、ましてや、相手の社長さんから指名を受けて呼ばれる覚えなんてない。

一体、なんなのだろう？

考えれば、考えるほど、分からなくなっちゃった。

で、その影響で、明日からは、パパに車で送ってもらえなくなっちゃった。

今日だけは、午後からの飛行機の予約が取れたので、送ってもらえたけど、明日からは、パパはアメリカ。

私、学校へ行くのに、前のように自分で歩いて通わなくちゃ。

はあ〜 毎朝、男どもを掻き分けて、振り切って、学校へ行かなくちゃいけないのね。

最悪、パパが帰国するまで休学してもいいとか、パパもママも言

っていたけど、いつパパが帰ってくるのか自体、分からないし。

なんか、ヤダなあ。

そんな憂鬱な気分で、グラウンド脇を歩いているときに限って、不幸は頼んでもいないのに、やってくるもので。

「あぶない！」

そう誰かが叫ぶ声が聞こえたのは、サッカーボールが私の頭を直撃した後だった。

「おい、大丈夫かあ」

遠くから、慌てて走ってくる島崎君の姿が見えたような気がするけど、そのまま私、気絶してしまった。

勉強しましょう！ 2

次に気がついたときには、保健室のベッドの上。

最近、こんなのはっかりの気がする。

観桜会の準備のときも、だれかに太い枝をぶつけられたし。

気がついて、ベッドの上でモゾモゾしていると。

ベッドのかたわらには、学級委員長がいて、心配そうに私を覗き込んでいた。

「え？　ここは？」

「あ、気がついた？　保健室よ」

「つつ、いったあゝい！」

いまさらながら頭がズキズキする。

「大丈夫？　まだちよつと寝てた方がいいわよ」

「う、うん」

「つかさちゃん、祐一が蹴ったボールで、頭打ったの」

そ、そうなのか……

確か、あのとき、裏門から玄関へ向かって歩いている最中で、グラウンド脇を通り抜けようとしていたのだっけ。そういえば、グラウンドでは、サッカー部の練習が行われていたような。

ん？　それはそうと、祐一？　祐一ってだれ？

「サッカー部が午後の練習試合に備えて、試合形式で練習してたのだけど、祐一がシュートしたボールがゴールポストに弾かれて、たまたま、そのすぐ後ろを歩いていたつかさちゃんに当たっちゃったの」

ああ、なるほど。単に、私、運が悪かったのね。

ん？　でも、私が歩いていたところから、ゴールのあった場所まで、結構離れていたような気がするのだけど？　たぶん、30メートルぐらい。

「ええ！？　危ないから、気をつけて、ゴールからかなり離れたと

「こ、私、歩いていたはずだけど……?」

「うん、普通の男子が蹴ったシュートだったら、いくらなんでも気絶するなんてことはないのだろうけど、蹴ったの祐一だったから」

委員長、目元までポツと赤くなっちゃって。

ちよつと自慢げな感じがそこはかとなく……

なんとなく、祐一がだれなのか、見当がついていたけど、一応、

質問しておこうかな?

「ねえ、委員長がさっきから言ってる祐一君って、だれ?」

「ええ!」

途端に、委員長、非難がましい目で私を見る。

「忘れちゃったの! ひつどーい!」

「え」と、ええっと……?」

委員長、ベッドの上に身を乗り出すようにして、私の耳元で、そつとつぶやいた。その名前が触れれば壊れてしまいそうなガラスでもできているかのように。そつと。

「島崎祐一君」

あはは、やっぱり。

そつといえば、観桜会するとき、島崎君のお母さんがやってきて、息子の祐一がどうとか言っていたっけ。

それはそつと。

「ねえ? 委員長は何でここにいるの?」

「え?」

委員長、さらにもつと顔中を血の色に染めた。

「だ、だって、つかさちゃんに倒れたあと、サッカー部の男子たちが、救急車呼べ! だとか、心臓マッサージだ! だとか、いや、ここは人工呼吸だ! とか騒いでて、果ては、だれから順番に人工呼吸するかで殴り合いの喧嘩になっちゃったりしたから」

私、慌てて、唇を押さえた。

つて、ことは、私のファーストキス、サッカー部の誰かに……

・・・？

い、いや！ そんなの絶対いや！

私、ファーストキスは、清貴さんにささげるって、決めてたんだもん！

あんな汗臭い、泥臭い男どもに、奪われたなんて、絶対にイヤ！
まして、私が気を失っている間にだなんて、イヤすぎ！

私、おびえた目をして、委員長を見つめたのだと思う。

委員長、やさしく、私に微笑みかけた。

大丈夫よ、ってやさしく。

「私が割って入っていかなかったら、つかさちゃん、いまでも、グラウンドの隅で伸びていたままじゃなかったのかしら。みんな相手を押しのけるのに、夢中になっていたし」

「そ、そうなの・・・」

「ともかく、あのままじゃラチが開かないので、祐一と私で保健室へ運び込んで、ベッドに寝かせてあげたの。だから、だれもつかさちゃんの唇は触ってないわよ」

「あ、ありがとう！」

最後の言葉をきいて、私、猛烈に感激した。感謝した。

そして、思わず熱烈に委員長を抱きしめていた。

ありがとう！ ありがとう、委員長！

でも、それはそれとして、やっぱり、

「で、なんで、委員長があそこにいたの？」

委員長、途端に追い詰められた獣みたいになっちゃって・・・

眼鏡の奥で、目が泳いじやってるよ。

うふ。かわいい。

なんとなく、どんな答えが返ってくるのか、分かっちゃった。

「ああ、そうか、島崎君の応援をするために、早めに学校へきてたんだ」

途端に、委員長、真っ赤な顔のまま、小さくなっちゃっし。
凶星だったのね。

「そっか、もしかして、毎日、早めに学校へ来てるの？」

「うん」

「ひょっとして、同伴？」

ぶしゅー！

なんて、頭から湯気出してるよ。

はいはい、それはお幸せなことって。

はあ~~~~

勉強しましょう！ 3

しばらくして、痛みが引いたので、私たち教室へもどった。今日から、私は授業中、教科書を開くだけでなく、参考書も机の上。

さすがに、その授業とは違う教科の参考書を開くのはまずいので、英語の授業なら、英語の参考書。数学なら数学。古文なら古文の参考書を用意してある。

でも、教科書・ノートだけでなく、各教科の参考書まで持っていないなんて、私のカバンだけじゃとても足りないよ。

中学のときみたいに、ザックを背負って、毎日学校へ来なくちゃ。みっともない！ 格好ワルい！ ダサダサ！

けど、いちいち家と学校の間を分厚くて、重たい参考書を毎日運ぶなんて、面倒くさいなあ。それに、この学校、中学のときみたいに、平地にあるのじゃなくて、長い坂道の丘の上。荷物を運び上げるだけで、相当疲れちゃうよ。

今日はパパに車で送ってもらえたからよかったけど、毎日歩いて、重たい荷物を担いで往復するなんて……

こういうときに、どこか個人用の荷物を保管して置けるロッカーみたいなものが、学校にあると便利なのにな。

残念ながら、神宮寺高校も、旧さくらヶ丘女子高校も、そういう個人ロッカー制をとっていないなかったみたい。

やっぱり、机の中に置きっぱなしにするしかないのかなあ？

かといって、学校におきっぱなしにしちゃうと、家で復習ができなくなっちゃうし……

委員長はどうやってるのだろう？

今度、訊いてみようかな？

なんて、授業中に考えていたら、今授業がどのあたりを進んでいるのか、わからなくなってしまうた。

そういつとときに限って、先生というのは、勘がさえるみたいで。

「次、神宮寺さん、読んで」

「え？」

慌てて、隣の子に、『どこ？』って小声で訊く羽目になってしまった。

ようやく、午前の授業も終わり、お昼ご飯。

今日も私、ありさちゃん、委員長、ひかりん、それに、名もなき女子4人組の大所帯でお弁当。

いつものように、委員長のお弁当箱を覗き込んで、『カラフル！』とか、『おいしそう！』なんて、やっている女子たち。

どういうわけか、委員長とひかりんに感化されちゃって、彼女たちも自分でお弁当を作ってくるようになっていた。

「みてみて、このタコさんウィンナー、お母さんに上手ねって褒められたの！」

「ほら、私、シャケの焼き加減がうまいって、パパがいうの！」

「お兄ちゃんが、こっそりつまみ食いしようとするから、朝から大変だったのよ」

「おばあちゃんに、ご飯の炊き方おそわったら、ご飯ツヤツヤ」

はいはい、それは、それは……………

ようございましたわね、オホホホ。

うーん……………

なんか、このパターンってヤな感じ。

まるで、私だけが料理もできないダメ女。

でも、まだまだ、私負けない！ 私には、同志がいるのだから！

我が同志は、この女！

「ぐふ。今日も卵焼きおいし」

などとのたまいつつ、大口開けて、今二つ目の卵焼きをほおばったありさちゃん。

ありさちゃんなら、どう見ても、自分でお料理するようなタイプ

じゃないし、絶対、朝、早起きして、自分でお弁当を作ってくるなんてありえない！

私たちは、目に見えないけど、何者も断ち切るこのできない、固い絆で結ばれているのだよ。なあ、我が同志ありさ姫よ！

そうして、ありさちゃんとの固い友情をかみしめつつ、おにぎりをほおばる私。

うへえ〜

梅干だった。

「ねえ？ 委員長？ 参考書をいつも学校へ持ってきているみたいだけど、あれって、毎日家から運んできているの？」

「え？ ああ、あれ？」

委員長、意味深に、にこりと笑う。

「え？ 参考書？ 参考書なんて、学校へもってきてるの？」

「ええ？ 参考書って学校へ持ってくるものだったの！？」

「ええええ！？ 参考書なんてなくても、教科書開くだけで、ぐっすり眠れるじゃない！」

「サンコーチョコってナニ？ おいしいの？」

などなど、名もなき女子たちは騒いでいるけど、ここは思い切つて無視。

ありさちゃんもひかりんも黙って委員長の答えを待っている。それぞれに、ハンバーグやコロツケを刺したフォークを口に咥えながら。

「ううん。私の使っている参考書は、生徒会室の備品のだから、毎朝、その日使う分だけ借りてきて、使っているんだよ」

「えええ！？ 生徒会室の備品って、そんなのあった？」

私たちが放課後、毎日顔を出す生徒会室。

黒板と長机がいくつつか、何世代か前の型のPCが3台、それに椅子が何脚がある以外、なにもない空間。

「ど、どこに？」

「ほら？ 生徒会室の奥にドアがあるでしょ？ あそこが資料室になつてて、参考書とかいっぱいあるんだよ」

「し、知らなかった」

「ええ！？ ほんとに!？」

私とひかりん、同時に声を上げてしまう。

なんでも、歴代の生徒会役員たちが、受験を済ませ、要らなくなつた参考書のたぐいを後輩のために残していくのが、さく女生徒会の伝統であつたらしい。

参考書だとか、教科書のたぐいは、新品ほど値打ちがあると思つても知れないけど、実は逆。

ボロボロになり手垢がついて黒ずんでいるものほど、価値がある。ボロくなつていているつてことは、それだけ、前の持ち主がその参考書なり教科書なりを熟読したつてこと。そういう人に限つて、本文中の重要箇所には赤や青やいろいろな色で下線を引き、一目でどこがどれくらい重要なのが分かりやすくしてあるもの。そして、その余白部分に気づいたこと、派生的な知識などなど、メモが書き加えられ、分かりやすく要点がまとめられていたりするのだ。

もし、参考書を選ぶ必要があつたのなら、書店で売られている新品のまっさらな参考書ではなく、町の古本屋で売られているような参考書のたぐいを買つた方が、はるかに勉強になる。

勉強しましょう！ 4

お弁当を食べ終わり、私たちは早速、生徒会室をのぞいてみることにした。

名もなき女子たちは、興味なさそうだったので、私とありさちゃん、それに、委員長とひかりんのさく女4人組。

私と委員長、ひかりんの3人は、毎日、放課後通いなれた場所なのだけど、ありさちゃんは、あの時以来。

なんとなく、青ざめた感じが艶っぽいかも。

こんな姿のありさちゃんを見かけたら、学君でなくても、ほれちゃうかもね。

但し、私と一緒に行動していないときにね。

だって、ありさちゃんがどんなに美人だっていっても、私が近くにいたのじゃ、まったく説得力なくなっちゃうし。

うふ。

太陽と一緒に月が出ていても、月が輝いて見えないのと一緒に。

私のような美の女神が、こんなに近くにいたのじゃ、モデル体型のスレンダー美少女・ありさちゃんといえども、たちまちその輝きを失っちゃうから。

ほんと、私って、罪な女だわ。

まずは用務員室へ行って、カギを借り出す。

それから、旧館二階奥の生徒会室の前まで来ると、カギをガチャガチャいわせながら差し込もうとすると……

「あら？ 開いてるわ？」

「え？ おかしいなあ？ 朝、参考書借りに来たときは、キッチンとカギ掛けていったはずなのに……」

委員長、眉根を寄せて戸惑っているし。

「ドンマイ、ドンマイ！ だれにだって、うっかりすることあるよ」

って、ひかりん、それってフォローになってない気がするのですけど。

「おっかしいなあ〜？」

委員長しきりに首をひねっている。

ともあれ、ドアを開けると……

開いたドアから風がブワーと吹き付けてきた。

部屋の奥の窓が開けられており、その窓の近くには、私服の少女が。

窓から入ってくる風に髪をそよがせながら、学校の裏手をボーッと眺めている。どこかさびしげ。

「え？ だれ？」

先頭の委員長、私たちより年上らしき少女を見つめて、立ちつくしている。

んん、ん。

あれえ？ 委員長だって、一度会ったことがあるはずなのだけど。委員長だけでなく、ひかりんも、私も、会ったことのある人。

「あ、梅田先輩。こんにちは」

私、進み出て、声をかけた。

梅田先輩、振り返って、やわらかく微笑む。すぐに、やってきたのが私だって、気がついたみたい。

「あら！ 神宮寺さん。久しぶりね。そっちは、確か……瞳の妹さんだったよね。それと……」

ま、無理もないか、委員長とは、観桜会の受付でちらりと見かけただけで、覚えているはずないだろうしね。その上、ありさちゃんとは、完全に初対面のはず。

梅田先輩。

さくらヶ丘女子高等学校を今年卒業したばかりの大学一年生。

在学中は、今の熊坂会長を従え、さく女生徒会を取り仕切っていた生徒会長。ということは、さく女最後の公認生徒会長ってことになる。

今の熊坂会長は、非公認の生徒会長。先の金融危機で、さく女が神宮寺高校に吸収合併されなければ、生徒会長を勤めていたはずなのだけど、合併したので、今は公式には、神宮寺高校生徒会の副会長として役職になっている。

熊坂会長は、今の神宮寺高校生徒会の副会長という肩書きが気に入らないみたいで、いつか、正式に生徒会の会長になってやろうという野望を今でも抱いているみたい。

そのためにも、さく女の生徒会組織を温存する目的で、さくらヶ丘歴史伝統研究会という同好会を主催し、ここ旧さく女生徒会室を根城にしているってわけだ。

私たちは、お互いの紹介が済んだ。

「梅田先輩、今日は？」

「ああ、こないだ家の中を片付けていたら、コレが出てきたから、みんなに寄付しようと思ってね」

そういつて、足元の紙袋を指した。

ひかりん、しゃがみこんで、さっそく紙袋の中をのぞいてるし。

「わあ〜 参考書だよ 数学と英語と物理もあるよお」

つて、おいおい、すこしは遠慮とかいう高尚なものを身につけてはどうなのかね、君は……

「そう、私が1年と2年のときに使っていたモノね」

「わあ〜 見てみて、いっぱい書き込みがある！ 私、これがいい」

ひかりん、すでに数学の参考書を開いて、中を確認しているし。

「ふふふ。私のでよかったら、自由に使ってね。あなたたちの勉強の役に少しでも立てばいいのだけど」

「はい！ ありがとうございます！」

立ち上がったひかりん、ぺこりとお辞儀をした。

「ふふ、かわいいわね」

「会長、これに記入おねがいしま……」

「あ、こんにちは！」

ちようどそこへ、奥の部屋から、書類片手に出てきたのは、熊坂会長。

「ああ、おす！ 来てたのか」

その熊坂会長を見かけた途端、ありさちゃん、私の後ろでしゃがみこんじやった。梅田先輩、なんだか不思議そうに私の方を見ている。

「お姉ちゃん、これ借りていってもいい？」

「ん？ いいけど、それ、まだ手続き終わってないから、後でいいか？」

「うん」

熊坂会長は私たちに近づいて、梅田先輩に手続きの紙を渡すと、いたずらっぽ目つきで、『女の肩に手が、手が、手があゝ！！！！』なんて、怖い声で、つぶやいてくれるし。

なんか、私の背後から、震え声が聞こえてくるのですけど……

・

「お化けなんかいない！ 幽霊なんて存在しない！」
はあゝ

勉強しましょう！ 5

熊坂会長が相手をして、梅田先輩が手続き用紙にいろいろと記入している間に、私たちおびえるありさちゃんを引っ張って、奥の部屋へ移動した。

奥の部屋、資料室の壁には大きなスチール棚が何台か設置されていて、歴代の生徒会の活動記録やら、議事録、その他もろもろが所狭しと、並んでいた。

古い書籍が保管されている場所。ちよっぴりカビ臭いような、一種独特の匂いがこもっている。

でも、私にとっては不快な匂いではない。むしろ、心地いいぐらいの匂い。まだ接したこともない、すばらしい知識の世界が、私を呼んでいる。

未知の世界への扉の前に、今、私は立っているの！

後は、その扉を押し開くだけ！

ギイイイ~~~~~！！

で、私たちが探していたものも、もちろん、その他もろもろの中に含まれるわけで。

「あつた、これこれ」

「すっごーい！ いっぱいあるねえ〜！」

「そう、どれでも手にとって見てみるといいわよ」

「す、すごいわね。本屋さんが開けちゃいそう」

なんて、4人でワイワイいいながら、参考書をいろいろ見てまわった。

各出版社から発行されている様々な参考書。すべての教科がそろっており、なおかつ、ほとんどすべての版がそろえられている。

「この中から、気に入ったのを選んで、あつちの机の上のノートに、日付と借り出した本の認証番号とクラスと名前を書けば、借り出せるのよ」

「はい。じゃ、私、次の生物のために、コレ借りていこうと」

「私も、私も！」

「って、あんたは別のクラスでしょうが？」

「えええ〜 私もつかさちゃんとお揃いがイイ！」

「はいはい、ひかりん、そんなところで拗ねないの。ひかりんは梅田先輩の参考書を借りるのでしょ？」

「あ、そうだった」

ぺこつと頭をたたく少女が一人。

カビ臭い資料室の中に春風が吹いたみたい。

「あ、ついでに参考書を選ぶヒントなんだけど」

委員長、手近な一冊を取り出して、私たちを見回した。

「教科によって違うけど、なるべく5年から10年ぐらい前の版の参考書を選ぶ方がいいわよ」

委員長が言うには、さくらヶ丘女子は、県内有数の進学校だっただけあって、卒業生たちのレベルが高く、参考書へのマーキングや書き込みなどは、的確で、見やすく要領よく行われている。

なので、そういう卒業生たちが何代も何代もマーキングし、書き込んだ参考書の方が、つまり古いものほど、勉強になるのは確かなのだけど、今の学問世界、次から次へ進歩し、新しい知識・考え方が登場して、どんどん古いものと置き換わっている。

その結果、10年前よりも古い版になると、そこに掲載されている知識があまりにも古すぎて、役に立たない場面が多くなるのだとか。

もちろん、一年生で習うことであれば、基礎的なことが主なので、多少古くても、勉強に影響するなんてことは、ほとんどないのだけど……

たとえば地理なんて、10年前の産業構造だとか、国際貿易体制とか見ても、はつきりいって、全然役に立たないんだよねえ。

大体、10年前、中国経済が今みたいに日本のGDPに追いつき

追い越すなんて、だれが想像していただろう？

「だから、勉強したいのなら、古いものを選んだ方がいいけど、あまり古すぎてもだめだから。適度に古いものを選ぶようにしてね。それと、うちに帰って復習する都合もあるから、家にある参考書と同じタイプのものを選んでおくと、後で便利よ」
「だそうな。」

なるほど、なるほど……

古本の参考書選びにしても、奥が深いものがある。勉強になった。

私たちそれぞれ、午後の授業用に借り出す参考書を選び、奥の机の上のノートに、日付と本の扉にスタンプされている認証番号とクラス・名前をそれぞれ書き込んで、そろそろと資料室を出た。

生徒会室では、熊坂会長、梅田先輩が持ち込んだ参考書の一冊一冊の表紙をめくって、扉部分にどんどんスタンプを打ち込んでいく作業をしている。

「ほら、光たち、コレ資料室へ運ぶの手伝って」

「はい」

というわけで、スタンプ打ちが終わったものから、順番に資料室へ。

ありさちゃんの手伝おうとすると、熊坂会長、

「あつ！ その本、表紙が血でベトベトに……」

「ひいひい」

って、やっぱり性格悪いな、この人！

そんな会長にあきれた声で、梅田先輩、

「こらこら、かわいい後輩をからかうんじゃないの！」

ペこりと、会長の頭を叩いたのはいいのだけど。急に真剣な表情になって、だれもない部屋の隅を指差して、

「あつ、ねえ、あそこに立っている女の子はだれ？ こんにちは」
って手を振ってみせるし。

「え？ だれかいますか？」

「ええ？ あんた、見えないの、あそこ！ ほら、足が透けて見える昔のさく女のセーラー服着た女の子」

「ええ！？ あ、本当だ、だれだろう、こんにちは」

つて熊坂会長まで……………

はあ

ホント、さく女の生徒会長つて、こういう人たちばかりなのかしら？

まったく、もう！

どうでもいいけど、ありさちゃん、あの人たち、単に冗談を言っているだけなのだから、そんなに本気でおびえないですよ。

「お化けなんていない！ 幽霊なんて存在しない！」

ハア~~~~

頭痛くなってきた。

勉強しましょう！ 6

午後の授業もまったりとした時の流れの中で終了し、帰りのホームルームも終わった。

今日もまた、生徒会室へ。

って、今日は二度目だけど………

今日から、熊坂会長発案の勉強会スタート！

勉強会、ありさちゃんも誘ったけど、もう絶対いかない！ って涙眼で断られてしまった。

ともかく、ありさちゃんが借り出していた分も、参考書を資料室に戻し、私たち1年生がかたまっている一角に自分の席を確保。

筆箱・ノートを取り出し、あらたに借り出してきた参考書を広げ、黙々と勉強開始！

ホント、この先輩たちの参考書、すごく役に立つ。すごく勉強になる。

どこが重要項目で、それぞれがどういう関係になっているのか、要領よくまとめられているし、教師たちが説明しているのよりも、はるかに分かりやすい。

とくに、私が読んでいて、疑問に思ったこと、引っかけた部分には、余白に簡単な解説が添えられていて、大抵、的確な疑問点への回答が添えられている。

うーん………

勉強になるなあ

あ、でも、私も卒業すれば、こんな風に参考書を後輩へ贈るかもしれないけど、これぐらいキチンとした解説が書き込んでいるのかしら？

なんだか、すごく不安になってきた。

あの神宮寺先輩、顔はいいのだけど、勉強の方はからっきしね。

なんて、後輩たちに言われたりしないのだろうか………

き、気合を入れねば。

同程度の頭脳レベルの女生徒たちで集まって、勉強会をするって
いうのは、結構よいアイデアだったかも。

大体、同じようなペースで勉強が進み、誰かがわからないところ
があっても、周りの誰かに質問すれば、丁寧に教えてもらえる。

ある人がつまづく場所は、他の人にとっても、理解が難しい場所
その部分を理解できている人にとっては、どのあたりが理解の妨げ
になるのか、大体の感覚でつかめていることになる。だから、仲間
に教えるときも、どうして理解できていないのか、ある程度、予想
できるし、それを乗り越えるコツを的確に指摘することができる。

これが頭脳のレベルに大きく違いがある人たちでの勉強会になる
と……

たとえば、神宮寺系の偏差値40台前半の生徒と、私たちさく女
系の生徒たちで勉強会を開いたとしても、神宮寺の生徒たちが、分
からないって言っていることは、私たちには、完全に理解不能なん
だよねえ。

なぜ、こんな当たり前のことを理解できないのだろう？ ってこ
とになるのがオチ。それでも、めげずに、懇切丁寧に、これはこう、
あれはそう、っていう風に教えたとしても、彼らには、チンプンカ
ンプン。私たちの説明自体が、理解不能の異星人言語とみなされて
しまう。

ホント、勉強ひとつとっても、神宮寺とさく女の合併って、ムチ
ヤな話だよねえ。

で、私も、なんどかつまずき、そのたびに委員長に教えてもらっ
ていた。

委員長の説明は的確だし、実に分かりやすい。

私が、これどういうこと？ なんて質問すると、二言三言ヒント
をくれるだけでも、すっと参考書の説明が頭の中に入ってくる。

まるで魔法みたい。

って、委員長のまわりに、いつの間にか人だかりができているよ
うな………

一年生たちが、こぞって自分が分からないところを教えてもらおうと、集まってきた。

ん？ あれ？ 一年生ばかりじゃないぞ！

上級生たちも、チラホラ委員長まわりにいるし。

おーい、そのこの3年生、微分・積分の本をもって、一体、一年生になにを質問しようっていうの？ いくらなんでもまだムリでしょうに！

って、委員長、不定数Cがどうこうって！ 微分・積分まで理解できてるのかい！

恐るべし、委員長！

一年生にして、三年生の教科ですら、人に教えられるほど、理解しているとは………

しばらく、私たち、生徒会室にこもって勉強会を開いていたのだが、1時間もすると、集中力が途切れてきて、しだいに仲のよいもの同士でおしゃべりをしはじめた。

「ふう、結構、進んだねえ」

「うん、こうやって、みんなで勉強すると、教えあったりできるから、すごくはかどるよねえ」

「そうだねえ。家で勉強していると、分からないところは、一人で悩んで、じっくり考えて、それでも分からなくて、勉強がそこでストップしちゃうもんねえ」

「うんうん、そうそう」

「みんなで勉強していると、分からないところは、分かっている人に訊けば、分かりやすく教えてもらえるし、勉強がストップせずに、どんどん進めていけて、いいよねえ」

「うん、でも、ちょっと進みすぎちゃった。今日だけで、私、数学

の参考書四分の一ぐらい済んじやった」

「わあ！　すごい。私、やっと40ページ消化したかどうかってぐらい」

「それも、結構すごいんじゃない？」

「ええ！？　そうかなあ？」

「うん、すごいよ！　でも、ちょっと疲れちゃったねえ？」

「うん、こんなに勉強したの受験のとき以来かも」

「うんうん、ほんとそうだねえ　あ、そうだ、帰りクレープでも食べにいかない？」

「うん、いくー！　クレープ食べたーい！」

なんていうような会話が、部屋のあちこちから聞こえてくるように……

まあ、私も疲れちゃったし、そういうような会話を委員長やひかりんとしていたのだけど。

でも、なんか委員長、そわそわしだしてきた。

「ん？　委員長、お手洗い一緒にいこうか？」

「え？　あ、ううん、ありがとう、そうじゃないの……」
トイレじゃないなら、なんだろう？

しきりに、携帯を開いては、時間表示を確認している。

「なにか、用事でもあるの？」

「え？　あ、その……」

委員長、耳まで赤くなっちゃって。

は、はあーん！　委員長が真っ赤になるといったら……

「さては、デートだな？」

「ええ！　ち、違う！　デートなんかじゃ……」

「ぐふふ。口ごもるところが可愛い！」

委員長、もじもじしちゃって、かわいい。

「まあ、デートかどうかはともかく、用事があるのだったら、そう会長に言えば、いいと思うよ。まさか、あの会長だって、用事のあるって言っている人を引き止めたり、しないだろうし」

「え、えーと、たぶん、そうだろうと、思うのだけど……」

「なんだか、いまひとつ思い切れないって感じ。」

「そんなことを言い合っていると、ちょうど目の前を、その会長自身が通りかかったりして。」

「お？ 神宮寺？ なにか用事でもあるのか？」

「え？ 私？ あ、いいえ、用事があるのは、私じゃなくて」

「委員長を指差す。」

「ああ、用事があるのだったら、ムリに引き止めたりしないぞ。今日は、特に差し迫って処理しなければいけない案件があるわけでもないしな」

「委員長の表情がパツと明るくなった。」

「委員長、よかったね」

「うん、じゃ、私、これで帰りますね？」

「ああ、帰り、気をつけてな？」

「はい」

「島崎君によろしくね」

「って、委員長、私の一言に頭から湯気をあげちゃったりして。」

勉強しましょう！ 7

私は、それからも30分ほど、生徒会室で、ひかりん相手におしやべりしていた。

もう、そのころには、まじめに勉強している生徒なんていなかったし、生徒会室は、隣の人の声が聞き取りにくくなるほど、ワイワイガヤガヤうるさくなってきていた。

さすがに、これ以上勉強会続けていてもムダだと感じたかして、熊坂会長、終了を宣言した。

まあ、最後はグダグダになっちゃったけど、それなりに有意義な時間をすごせたのじゃないかな？

私的には、勉強会、成功だったとおもう。

それから、私、借り出していた参考書を返却し、荷物をまとめ、ひかりんとしやべりあいながら、玄関へと歩いていった。

いつものように下駄箱で靴を履き替え、グラウンド脇まで移動。いつもなら、このあと、図書館で読書しながら、ありさちゃんや学君の部活が終わるのを待つんだけど。

「ほらー！ そこー！ いけえー！」

なんか、グラウンドの方から、だれか大声で叫んでいる。

「あつ！ おしいー！ それ！ シュートだ！」

ん？ サッカーの応援かな？ そういえば、今日はサッカー部がどこかの高校と練習試合をするとか、張り紙がしてあったっけ。

まあ、私は、特にサッカーなんて、興味ないのだけどね。

あんなボールをコロコロ転がして、追いかけるだけのスポーツ、どこが面白いのだろう？

キライじゃないけど、特に見たいとか、やってみたいとかはないな。

「いいぞー！ 祐一、いけー！」

………まただよ。今日は、なんか島崎君に縁がある一日。

って、あれ？ この声って、もしかして？

私、慌てて、グラウンドを見回した。
いた！

サッカーのピッチ脇で、メガホン片手に、騒いでいる巨乳めがね
が………

「い、委員長………」

なんか、頭が痛くなりそう。委員長、用事があるからって、さきに帰ったのじゃ？

私たちの目の前をドリブルしながら島崎君が走っていった。

って、そうか、デートのためじゃなくて、島崎君が出場する練習試合の応援のためだったのね。

はあ〜

島崎君、相手の選手とぶつかって、こけた。

「こらー！ 審判、なに見てるんだ！ 今のは、相手のイエローだろうが！ スルーすんじゃねえ！」

って、委員長、性格変わってない？

いつもは、学級委員長ってイメージ通りのおしとやかな女の子なのに………

「こらー！ それは、相手のシミュレーションだろうが！ こっちのファウルじゃねえぞ！ 審判眠ってるのか！」

おい、おい！

彼女は、私たちの友達なんかじゃありません。まったくの他人です！

なんて、心の中で一人ごちながら、見つかったりしないように祈りつつ、こそこそと図書館へグラウンドの脇を通り抜けようとした私たちだったのだけど………

「ああ！ つかさちゃん、ひかりん！ オース！」

み、見つかつちゃった。

タダでさえみんなの注目の的になっていた委員長、私たちを見つ

「こらー！ 審判、どこ見てる！ 祐一がゴール決めただろうが！」
委員長が激しく抗議しているのだけど、審判たちは、それにも気づいていないみたい。

これは、やっぱり、まずい状況だよな？
と、とにかく、私も、島崎君の得点をアシストしてあげた方がいいのかな？

というわけで、私、顔の前で、両手をパンパン叩きながら、ピヨ
ンピヨン飛び跳ねてあげた。

「わあ、ゴール決まったあ。すごーい！」
すんごくわざとらしい。ぶりっ子つかさちゃん。

でも、こんなくさい演技でも、審判に自分の仕事を思い出させる
だけの効果はあったみたいで………

ピイ~~~~~！！

島崎君の高校初のゴールが認定された。

よかったよかった。もし、これ認定されずにスルーされたりなん
かしたら、きつと、委員長に恨まれてたかもねえ。

今の委員長、相当、頭に血が上って、見境いがなさそうだし。危
険かも。

勉強しましょう！ 8

ともかく、その後の試合は、相手チームにとって、散々な内容になった。

相手チームの選手たちは、ゲームに集中するなんてことがもう不可能なっちゃってて、しきりに、私の方を見ている。

たまに、そういう選手たちの一人と目が合ってしまったと、棒立ちになり、その場で足が止まる。

たちまちボールが神宮寺の選手たちに奪われて、そのまま相手のゴール前までつながれ、シュート！

見ている間に、2点、3点とどんどん点が入っていった。

うーん………

こうなるとなんか、相手のチームに申し訳ないような気になってくるね。

私がピッチ脇にいるせいで、ゲームに集中できず、実力を全然出せなくなっているのだから。

ごめんなさいね。

でも、神宮寺の選手たちも、私の方をチラチラ見てはいるのだけど、普段から見慣れているせいか、相手チームほどの影響はないみたい。

だから、どんどん点が入るのだねえ。

美人は、三日で飽きるとかなんとか、失礼な言い回しがあるけど、どうやら本当みたい。

なんか、ちょっと悔しいな。

そんなことを思いながら、グラウンドを見回していると、相手チームのゴール裏に、カメラマンの姿が。

神宮寺の制服を着てカメラを構えているのだから、当然、神宮寺の写真部だよな？

写真部といえば、観桜会のために、勝手に私の写真をとって、商

売をしたところ。

文句のひとつも言っておかなくちゃ！

私、相手チームのゴール裏へ歩いていった。

私の動きに合わせて、相手チームの1対1の視線も、動いたのは言うまでもないかな。

「おっ！ 神宮寺つかさだ！」

なんて、写真部の生徒たち、カメラ小僧よろしく、私にレンズを向け、パシャパシャ撮りまくってくれてるし。

あ、あのねえ。あんたたち、サッカーの試合を撮りにきたんじゃないの？

なんで、私を撮影してるのよ！

「ちよ、ちよつと、やめてください！ 私を撮らないでください！」私の抗議の声を無視して、写真部の部員ども、何枚も何枚もシャッターを切っている。

「こら！ 写真部、なにつかさちゃん撮ってるんだ！ サッカーの試合を撮りに来たんだろうが！ しつかり仕事しろ！」

なんて、喚きながら、委員長、こちらへ猛然と突進してきた。そして、写真部の部員たちに鉄拳制裁！

ちよ、ちよつと、委員長！ やりすぎ！

写真部の部員の頭を両脇に抱え込んで、ゴツンゴツンあたりに音を響かせて、ぶつけ合ってるし。

抱えられてる部員さんたち、なんか白目剥いてない？

だ、大丈夫？

ともかく、委員長の乱入のおかげで、写真部たちの即席神宮寺つかさ撮影会、終了となった。

負傷者2名を残して……

「ねえ？ みなさん、写真部の方たちですよね？」

「ええ」

「ゴール前に陣取っている写真部の中で、一番威厳のあるいかにも部長つて感じの女生徒が代表して答える。

「観桜会するとき、私の写真を撮ったでしょう?」

「ええ。どれも素敵な写真になりましたよ」

「そんなことは、当たり前だっていうの! 私が写っていれば、どのような写真だって、たとえ、ピンボケ写真だって、すばらしい写真になっちゃうのだから!」

「だって、だって、私は、美の女神、つかさまなのだから!」

「そう、でも、勝手に、私の写真を売ったりしないで、ほしいのですけど」

「え? というと?」

「だって、私にだって、肖像権みたいなものがあるわけでしょ?」

「公の場で、正式な身分のもとに行動しているときならともかく、あなた方の撮った写真のほとんどは、私たちがプライベートで観桜会を楽しんでいたときの写真ばかりでしょ?」

「ま、まあ、確かに……」

「なら、私の許可もなく、勝手に撮影して、商売をするなんて、おかしいことじゃありません?」

「ああ、こないだの写真撮影で不快な思いをおかけしたのでしたら、申し訳なかったですね。でも、許可と販売の件ですけど、たしか、さく女生徒会から、許可をもらっているはずなんだけど?」

「……」

「びっくりして、目がまん丸になった。どういうこと、さく女生徒会から許可ももらっているって?」

「え? 瞳に話つけてあったのだけどねえ? 聞いてない?」

「ええ!? そんなこと、全然聞いてませんよ」

「おつかしいなあ」 写真の販売で、さくらヶ丘歴史伝統研究会へ収益の一部を支払っているのだけど……」

「……か、会長。」

「いつのまに、そんな裏取引を。」

会長の裏の姿を垣間見た気がした。

ともかく、締まらない練習試合、一方的に、神宮寺高校チームが攻め立て、大量得点を挙げて、終了した。

27 - 0

一体、何の試合をしたのだから……

もちろん、島崎君は、デビュー戦でいきなり、ハットトリック3回分。

つまり、ハットトリックのハットトリック。9得点。

うーん……

相手チームは確か、前回大会で県予選ベスト8だったはず。うちのチームって、もしかして強いのかな？

なんて、はずもなく……

試合終了後、神宮寺のコーチが私のところへ真っ先に来た。

「君、神宮寺つかささんでしたよね？」

「え？ はい、そうですけど？」

サッカー部のコーチが私になんの用なのだろう？

まさか、まさか、この人も、私に一目ぼれしたとか言うのじゃ？

こ、困っちゃうなあ……。どこも、かしこも、私に夢中になる男ばかりで。

でも、コーチが話しかけてきた理由は、まったく違うものだった。

「君、よかつたら、試合のときだけでいいから、マネージャーをやってくれないか？」

「え？」

「君がいてくれるだけで、どんな相手も見とれちゃって、腑抜けになっちゃうからね」

そういつて、スコアボードを指差す。

27 - 0

つて、なんじゃ、そら！

自分たちの実力で勝ち抜こうと努力するのじゃなくて、私の魅力

を使って、勝ちを目指すのかい！

ん~~~~!!!!

頭痛くなりそう。

結局、その翌年の成人の日、とある地方の無名私立校が、国立競技場で、史上初めて地方大会からの全試合、二桁得点して優勝したという。

選手個々の能力やチーム力が圧倒していたからではなく、ベンチに陣取るマネージャーの微笑みによって。

その練習試合が終わり、ようやく、図書館へたどり着いたのだけ
ど。

すぐに、ありさちゃんと学君がやってきた。

「おっす！ つかさ。それに熊坂も」

「つかさちゃん、ひかりん、お待たせ」

二人並んで、閲覧室の私たちに近づいてきた。

なんか、なんか、ふたり、絵になるといつか、お似合いのカップ
ル。

すれ違う男の子も、女の子も、二人を見て、うらやましげな様子。

うーん………

私もうらやましいかも。

「ううん、大丈夫、今来たところ」

「ありさちゃん、やあ！」

もちろん、ひかりんは学君、無視。

読んでいた本を書架の元の場所へ戻し、私たち、四人連れ立って、
帰宅することに。

校門前とか、下校途中、私を待ち伏せしていた男どもが今日もい
たけど、優れた格闘家の学君とありさちゃんの敵ではなかった。

「あつ、つかさちゃんだ！ つかさちゃん、ボクの気持ちを……

……おわっ！」

「好きです、この花束は………ひええええっ！」

学君も、ありさちゃんも容赦がない。

私を見つけ、殺到してきた男たち、みなまで言うことができず、
あつという間に、地面にはいつくばっていることに。

「い、ごめんなさいね。ごめんなさいね」

なんて、私、ぺこぺこ謝りながら、二人の後ろをついていった。

って、その地面に伸びている男、ドサクサにまぎれて、私のス

カートの中をのぞこうとするんじゃない！

「キヤツ！」って、私が悲鳴を上げて、スカートの裾を押さえた途端、その男を踏み潰して、ひかりんが歩いていく。

「あゝら？ 私、なにか虫でも踏んじゃったかしら？」

うゝん……いくらなんでも、顔の上を乱暴に歩いたら、怪我しちゃうわない？

まあ、別にいいのだけど……

これに懲りて、二度と私の前に現れてくれなければいいな。

とはいえ、そうは問屋がよろしてくれないのだよねえ。これが。

ホント、男って、しつこい！

そのまま、どこへも寄り道することなく、私たち四人は、私の家へたどり着いた。

いつもなら、玄関先まで送ってくれると、学君もありさちゃんも帰って行っちゃうのだけど、今日は私、話があった。

みんなを私の部屋へ招き入れる。

部屋の真ん中の小さなテーブルを囲んで、四人、思い思いに座り込んだ。

「で、つかさ、話ってナニ？」

「うん、えつとね。今朝、パパが急な出張で、アメリカへ行っちゃったの」

「え？ アメリカ？ それは、さびしいなあ」

「バカ！ さみしいなんて、問題じゃないでしょう。お父さん、もうアメリカへ行っちゃったの？」

「うん。午後の便で」

「ってことは、今晚、お母さんとこの家で二人だけ？」

私、ちいさくうなづいた。

「……」

四人分の沈黙。

「って、それ、メチャクチャあぶねえじゃん！」

「た、大変じゃない！ どうするの！」

「えっと、えっと、えーと……」

三人とも、身を乗り出して、私を心配してくれる。

当然だよな。セキュリティサーブスに加入していて、侵入者とかいれば、ホームセキュリティの人が駆けつけてくれるとはいえ、前を見知らぬ男たちがウロウロしている家に、母と娘（それもとびっきりの美少女）、二人っきりで生活するのだ。

まだ、パパという男性がいたので、それなりに抑止力となってはいたけど、今晚からは、男っけのない家。あ、危なすぎる……

「とにかく、今日は、私、お泊りしようか？」

「え？ いいの？」

「うん、いいよ、大丈夫、大丈夫。後で、一旦、家に帰って、着替えを持ってくるね」

「ありがとう！」

私、ありさちゃんに感謝の視線を投げた。

「ええ〜！？ じゃ、私もお泊りする〜！」

「なに言ってるんだ！ お前の家、ここから結構遠いだろうが？ 着替え取ってもどつてくるだけで、真夜中になっちゃうぞ！」

「でもお、つかさちゃんの家で、私もお泊りしたいー！」

「ダメだ！ 着替えを取りに行ったとして、大体、お前をだれが駅まで迎えに行くんだ？」

「大丈夫だもん！ 私、一人でもここまでこれるもん！」

「ああ、これるだろうな。お前でもな。そして、家の前にたむろしている男どもを掻き分けて、つかさの家に入ろうとするわけだ」

学君、窓の外を指差す。とたんに、うへえ〜と表情をゆがめ、青くなるひかりん。昨日の夜、学君に駅まで送ってもらったこと、思い出したのだねえ、きつと。

「学君、今日も帰り、ひかりんを駅まで送って行ってあげてね」

「ああ」

「ひかりんも、お泊りするの、また今度にしよう？ 夜、ひとりで来るのって、すごく危ないし、ね？」

「う、うん………ウん」

ひかりん、しびしびって感じ。

「でも、親父さん、いつ日本へ帰ってくるの？ すぐ？」

「うん。分からない。急に出張が決まって、いつ帰ってこられるか、分からないだって」

「そ、そうか……… それは、大変だ。じゃ、朝、もう親父さんに車で送ってもらえないんだな？」

「うん」

「となると、明日から、この家まで迎えに来た方がいいのかな？」

「うん、できれば………」

「オツケエー！ 明日から、来るよ」

学君、軽くウィンク。でも、ホントやさしくて頼りになる。

いとこで、小さな頃から知っていて、幼馴染。兄弟みたいに思っていないければ、ここまで尽くされちゃうと、絶対、恋しちゃっているのにな。

「で、それでね。ちよつとみんなに頼みがあるの………」

というわけで、私、三人に、今日一日考えてきたことを説明した。

「ええ〜！？ うつそー！ 絶対、そんなのうまくいきっこないよ」

「ちよ、ちよつと待てえ！ そ、それは………」

「あはは！ おもしろーい！ それ、絶対、おもしろいよ！ マジ

つける！ あはは

次の日、いつもの登校時間よりも1時間早く学君が訪ねてきた。

「おはよ。つかさ、ありさ！」

「おはよー、ふわあああ〜」

「おはよ、早いね。ふあああ」

「ふああ〜」

結局、私のあくび、ありさちゃんにも、学君にも伝染しちゃった。さすがに、起き抜けの私とありさちゃん、髪もボサボサだし、着ているものはパジャマ。こんな姿を学君とはいえ、男子に晒すなんて、はずかしい。

けれど、学君、私の姿には興味なんてまるでないみたいで、もっぱら、ありさちゃんのパジャマ姿をうっとりとながめてやんの。

なんか、ちよっと、悔しい！

ん、ん………

でも、学君、ありさちゃんのパジャマ姿をながめているのは、いのだけど、胸元にはっきり、視線がいつている気がするの、私だけ？

やらしいなあ、ホント、ヘンタイ男なんだから！

これだから、さかりのついた男って、やくねえ。

今日は、学君が主役。

私の計画では、学君に奮闘してもらわなくちゃ！

というわけで、学君のやる気を引き出すために、ちよっとした仕掛けを用意してある。

ありさちゃんが、着替えを済ませ、洗面所で顔を洗っている隙に、私、学君を部屋に誘った。

「絶対、うまくいきっこないって！ 止めにしようぜ」

「ダメ！ うまくいくかどうかなんて、やってみなきゃ、わからない

いわ。とにかく、今日実行してみて、うまくいかなければ、また考
えるの」

「うまくいかなかったらって、それで恥をかくのは俺なんだぜ？
なんか、俺ばっかり、リスクをとってねえか？ この計画……」

ホント、ぶちぶち文句の多い男！

ヘンタイで、ストーカー男のくせに、マイナス思考で文句ばっか
りなんて、最低なヤツ！

でも、いいわ、これをみせれば、絶対、やる気になるの間違いな
しなんだから！

「ねえ？ 学君、これ、なあ〜んだ？」

私、かねてから用意しておいた物をポケットから取り出した。

「ん？ ……パ、パンツ？」

学君、ビツクリして、息をするのも忘れてる。でも、すぐに、ハ
ア〜と息を吐き出した。

視線を水色のパンツから引き剥がし、わざとらしく眉の付け根を
揉んで見せてくれる。

「パンツなんか、見せるなよ！ 気持ち悪いやつだなあ」

はあ〜？ なに、言ってるかなあ、このヘンタイ男は！

「あら？ 学君って、女の子のパンツって大好きじゃなかったのか
なあ？」

「ああ！ 好きだよ！ スカートのめくられて、チラチラ見えるや
つがな。でもな。そんな風にこれ見よがしに見せられても、面白く
もなんともねえ！ ただの布キレじゃねえか！」

へえ〜 ヘンタイ男にも、ヘンタイ男なりのポリシーみたいなも
のがあったのね。ちよつとびっくりした。

「それに、つかさのパンツなんぞ、いまさら見たところで、なんと
も思わねえよ」

ふふふ。ようやく、想定内の反応が返ってきたぞ。

含み笑いをしつつ、いたずらっぽく学君を見つめてあげる。小悪

魔フェイス

「あらら？ 私、いつコレを私のだって、言ったかしら……」

「
両手で学君の鼻先に突きつけるように掲げたりして。」

「え？」

「ほら、水色でしょう？ どこかで、見覚えないかしら？」

「え〜っと、えーと……」

しばらく考えていた学君、しだいに瞳が輝いてきた。

くふふ、かかった！

そう、昨日、ありさちゃんが、端がほつれているからというので、捨てたのを、わざわざゴミ箱を漁って拾ってきたもの。この私、美の女神つかさちゃん自らが、ゴミ箱を漁るなんていう浅ましい真似をしてまで、確保してきてあげたのよ。感謝しなさい、学君！

「どうする？ やっぱり、この計画止める？」

「うっ……」

「計画がうまくいったら、誰かさんに上げようかと思ってはいたけど、止めちゃうのだったら、これ捨てちゃわないとね。もったいないわねえ。でも、いいわ。使い古しで、もともと捨てるつもりだったみたいだし」

なぶるように、学君の鼻先で水色の布切れをヒラヒラ。

とうとう、学君、観念したみたい。

「や、やる！ いや、やらせていただきます」

ホント、これだから、さかりのついた男というヤツは……

「なあ〜？ほんとに計画実行するのか？ やっぱり、止めにしない？」

などと、ここへ来て、今日の主役が最後の悪あがきをする。それを無視して、

「ありさちゃん、準備OK？」

「うん、一応、準備は整ったけど……つかさ、本当に、」

この計画でうまくいくと思ってるの？」

「うん、大丈夫、大丈夫！」

「うーん、でもなあ〜 かなり無謀な計画だと思っただけど」

「ううん、そんなことないよ。実際にやってみればわかるよ」

「そうかなあ……」

「大丈夫、大丈夫！」

ありさちゃんは、この計画にいまいち確信を持ってないみたいで。

私だって、必ず成功するって、自信なんてないのだけど、でも、かなりの確率で、うまくいくだろうとは、信じている。あとは、今日の主役がどこまでがんばれるかだしだい。

「ただ、……」

「こら！ 今日の主役が、なんて顔してるのよ！」

今日の主役・学君、実に情けなさそうな顔して立っている。

「もっとシヤキツとしなさい！ あんた男でしょ！」

「で、でもなあ〜」

学君、うかない顔。

で、一方私は……

「うへ！ なんか、臭い！ それに、たぶたぶ……」

「うるへい！ 文句があるんだったら、今からでも、中止にしてもいいんだぞ！ その方が俺も助かるし！」

「あはは。じ、冗談よ！ ほ、本気にしないでよ！」

なんて、学君の機嫌をとりつつ、着替えを済ませて、今日は大きな帽子をかぶった。

私の方も準備万端整った。

さあ、いよいよ、突撃だあ！！

つかさ1/2 2

今日もいつもの登校時間。

いつもなら、家のガレージに直行して、パパの車の助手席に飛び乗るところだけど、今日はパパがいない。車があつて、ママも家にいるけど、残念なことに免許をもっていないし。

今日から、私は、歩いて学校へ行かなくちゃいけない。

そして、その私の行く手に待ち構えているのは、私に想いを寄せる男たち。恋人候補に立候補する男たち。私を妻に迎えたい求婚者たち。つて、まだ私、高校一年生15歳なんですけど……

結婚なんて、まだまだ先！

そんな私に結婚してくださいって、申し込むなんて、どんな神経しているのかしら？

しかも、明らかに私、迷惑顔しているのに、毎朝毎朝、しつこく付きまとうなんて。

男つて、ヤな生物！

パパや清貴さんや学君みたいな人たちと、同じ種族だとは全然思えないわ！

こいつらのことを考えるだけで、気が重くなるし、虫唾が走っちゃうー！

ヤダなあ！

とにかく、今日からは、学校へ行くために、この人たちを掻き分け蹴散らし、していかななくちゃね。

面倒くさいんだから！

神宮寺つかさは、「いつてきまーす！」なんて、明るく言いながら、玄関を飛び出していった。

その姿を見かけ、たちまち家の前に集まっていた男どもが、神宮寺家の門に殺到する。

「つかさちゃん、好きです！ 俺と結婚してください！」

「愛してます！ 俺の妻に！」

「あなたに夢中です！ 昨日、妻と別れてきました。ぜひ、私と再婚を！」

そんな男たちの中へ、門を出た可憐な美少女、神宮寺つかさは飛び込んでいくことになる。

でも、

「おお！ いとしの君、俺の胸に！ げほっ！」

最前列の大学生風の男が膝から崩れ折れたのを皮切りに、

「好きです！ 好きです！ 大す……どわっ！」

投げ飛ばされて、その場で気を失うもの。

「君のような女神に、ずっとそばにいてほ…… あべし！」
秘孔を突かれて、倒れふすもの。

惨憺たる惨状がものの5分ほどの間に現れた。

その5分が経過した後、神宮寺家の門前に立っていたのは、神宮寺つかさただ一人であった。

もちろん、このような状況を生み出したのは、神宮寺つかさその人。

「あらあ？ もう終わりなのかしら？ みなさん、私を愛してらっしゃるなんて、おっしゃられてるけど、この程度で、伸びてしまうような愛情しかもっていらっしやらないのですわね？ 残念ですわ」

なんて、ちよつと低い小馬鹿にした声をもらして、神宮寺つかさは、歩み去っていくのだった。

それから、10分。

再び、神宮寺家のドアが開いた。

帽子をかぶった少年とスレンダーモデル体型の少女が連れ立って出てきた。

そのとき、家の前の道路では、ひとりの少女に散々叩きのめされただけの男たちが、みな一様に涙にくれていた。

「あの子、ちょっとやりすぎじゃない？」

「ううん、これぐらいでないと、この人たち、目が覚めないわよ」
などと、少年と少女がささやき交わす。

やがて、少女がつかつかと進み出ると。

「ちょっと、あんたたち、そこどいてくれない？ 通行の邪魔なんですけど！」

軽蔑しきった冷たい声。さらに、

「それと、ああ見えて、あの子、相当強いから、これ以上付きまわっていると、どうなってもしらないわよ。それでもかなり手加減してくれた方なんだから」

男たちは、目をしばたいたいている。ようやく、自分たちが、どんな女の子に恋をしてしまったのか、気がついたみたい。

「いいこと、あの子を本気で怒らせたら、命がいくつあっても足りないわよ！ ほら、あそこの鉄の柵みてよ。ひん曲がってるでしょ？ あれ、こないだ、あの子を背後から襲おうとして、逆に、投げ飛ばされた人がぶつかって、曲がっちゃたの」

随分前に、パパの車が接触して、曲がった部分を指している。

「う、うそだあ！」

「うそじゃないわ！ あの子の本性を、あなたたち、自分自身で、今体験したばかりでしょ？」

「うっ……」

「そ、そんなあゝ 俺の女神さまがあゝ！」

「あ、あんな暴力女がボクの運命の人でなんかあるはずない！」

だ、だれが暴力女よ！

「つかさちゃんが、つかさちゃんが、壊れた！」

な、なんだと！ だれが壊れたって！

「とほほ、また、ヘンな女にひっかかっちゃったよ！ ママあゝ」
だれが、ヘンな女よ！ それに、ママあゝってなによ！

まったくもう！ 額に血管がピキピキ浮かび上がりまくりよ！
散々な言われようだわね！

ありさちゃん、やっちゃってよ！ こいつらに分からせてあげて、口の利き方には、もっと注意しなさいって！

少年が、強い目で、少女を見た。

それだけで、少女には、通じたみたいで。ひとつうなずくと、

「ほら、どけて言ってるんだろ！ ぶっ殺すぞ！」

なんて、ドスの利いた声を響かせながら飛び出して行く。さっきの神宮寺つかさと違って、手加減なんてしない。次から次へ投げ飛ばして、道路の隅へ男どもを片していく。

「う、うわあ~~~~！！ 男おんなだあ~~~~！！」

その姿を見て、逃げていった大学生風の男。また、余計なことを。

たちまち、少女に追いつかれて、バックドロップ。

うん……… 口から泡吹いて伸びちゃったよ。

首の骨、ぐにやりと曲がってない？

と、ともかく、これ以上、この日二回目の惨劇の様子を描写したら、食欲がなくなるので、もう終わり。

ただコレだけは言える。

このあと、町の中でも、どこでも、少女の姿を見ただけで、男たちが慌てて逃げていくようになったそう。

伝説の凶暴男おんな、斉藤ありさ。

そんな噂が町中に広まるのには、それほど時間がかからなかった。

私たち、いつもの交差点で合流した。

道すがら、何人か、失神している男たちや、『う、うそだー！俺の女神様が、ただの暴力女だったなんて！』って絶望に打ちひしがれていた男たちがいたけど、そんなのは無視、無視！

家の前の通りでは、日課の掃除をしている近所の本多のおばあちゃん、目が合ったので、いつものように『おはようございます』なんて、挨拶は忘れない。でも、おばあちゃん目を白黒させてビツクリしている様子。

まあ、無理もないわ。私、こんな格好だし。

私と学君とありさちゃん、無事合流した後、三人連れ立って、葉桜並木の坂を上っていく。

こんな風に歩いてこの坂を上っていくのって、すごく久しぶり。風が爽やかで気持ちいい。雲も穏やかに流れて、うらかな陽射しが、私たちにやわらかくふりそそぐ。

ホント、春のいい陽気。

このところの懸案だった、わずらわしい朝の男たちから自由になったし、すがすがしい解放感を満喫できて、私、しあわせ！

自分の両足をつかって、この坂道を上るなんて、なんて心地いい気分なのかしら！ これって、最高！

つつい、華のような微笑を浮かべて、まわりに明るい笑顔を振りまいて。

たまたま目が合った男の子、「よお！」なんて、片手を上げて、挨拶してくれる。

うふって、お返しにエンジェルスマイル！

でも、その子、いつものように、目をハートにすることなく、ちよっと居心地悪そうに、どっどん坂道を上っていった。

うーん………

ねえ。

わかる、わかるよ！ 学君！

「ほら、ひかりん、学君をいじめないの！ 学君は、今日の主役なんだから」

「ええ！ でもお」

ひかりん、唇をとんがらがして、すねちゃって。あんたは子供か！ まったく！

「ほら、学校いくよ！」

私、ひかりんの肩に手を回して、学校への坂道をどンドン上っていった。

途中、何人かの女の子たちが、私のことを、涙を浮かべて見送っていたような気がするのだけど。それに、なぜだか、彼女たちのひかりんを見る目に殺意を感じる……

ひかりんと分かれ、私たちは、教室へ入った。

いつものように、友達におはようって、挨拶しながら自分の席へ。でも、今日はなぜだか、挨拶された友達、はにかんじやってるよ。ともかく、私の席についた途端、まわりの席の子が驚いている。

そして、隣の席の子が話しかけてきた。

「ねえ？ まなピー、そこ、つかさちゃんの席だよ」

ふっと見ると、学君の席でも、

「つかさちゃん、そこまなピーの席」

なんて、親切に教えている男子がいるし。

「うん、そうだよ」

なんて、うなずきながら、帽子を取り、アップにしている髪留めを外すと、肩までの私の髪がパラリ。

「え？」

またまた、まわりの席の子たち、目をまん丸にして、私を見つめてるし。

学君の席の方でも、ウィッグをとった学君に周囲の子らはのけぞ

って、一斉に椅子からずり落ちた。

そう、みんな気づいていたとは思うけど、私たち、入れ替わっていたのだ。

家を出たときから、ずっと、私が学君の制服を着て、髪を帽子で隠し、学君に化け、学君が私の制服をつけて、ウィッグを被り、暴力女・神宮寺つかさを演じていた。

発端は、あの佐野君の一言。

私と学君が似ているって言葉がヒントになったのは確か。

あの後、学君と本当に似ているのか実験してみて、どうやら似ているらしいので、替え玉計画を立ててみたのだけど………うん、いままでの感触からすると、この計画成功みたい。

でも、ちょっと、私は暴力女であるって噂が立つことになりそうなのは、不本意ではあるのだけど。

まあいいわ！ 朝からうっとうしい男どもに追いかけられるよりは、はるかにマシだから、我慢することにしてあげるわ。

その日は結局、昼休みまで私と学君、制服を入れ替えたまま授業を受けた。

私が男子の制服を着て、ウロウロしていても、あんまり奇異の目でみられることはなかったのだけど。学君の場合は………休みごとに別の教室からも、生徒たちが女装少年を見物に集まり、入り口に鈴なりになっちゃって。

大変だったのが、トイレ。

まさか、そんな格好で、男子トイレで用を足すわけにもいかないし、かといって、女子トイレってわけにも。

学君、午前中ずっと、ウィッグ被って、遠く離れた体育館横のトイレに通っていたみたい。

男子トイレを使っていたのか、女子トイレだったのかは、ナゾだけど。

でも、ただちょっとムカついたのが、体育館のトイレからもどっ

てくるたびに、胸元の様子がどんどん変化していくこと。

最初、学校に来たときは、例のぬいぐるみ巾着だったはずなのに、2時間目に現れたときは、ソフトボール二つ。

3時間目には、サッカーボール。4時間目にはバスケットボール
って！

「ちよつと、胸元がさびしかったから、大サービス！」

なんて、言いやがって！

ったく！ ちくしょう！ そんなサービスなんて、いらんわ！

こら、その男子、学君が、授業の終わりごとに、胸に手を突っ込んで、ボールを取り出すたびに、興奮するんじゃない！ 鼻血噴き出して、倒れるんじゃない！

まったく、もう！

お昼に制服の交換を済ませて、午後からの授業はいつもの格好。やっぱり、男くさい男子用の制服なんかより、断然おちつくわあ。で、午後の授業も淡々と終わった。

放課後、私はいつものように生徒会室。

熊坂会長の演説を聞き流しつつ、この後、どう話を切り出そうか、考えていた。

やがて、会長の話も終わり。

私、会長の前へ。

「会長、ちょっとお聞きしたいことがあるんですけど?」

「ん? なんだ?」

熊坂会長、手元の書類に視線を落としたまま。

「観桜会でのことですけど、会長、写真部となにか約束をしましたか?」

「写真部? え〜と、なんの話?」

ようやく、書類から目を上げて、私を見上げる。

「観桜会するとき、写真部が女子の写真を撮って、生徒たちに販売してたの知ってますか?」

女子っていつても、そのほとんどは私の写真だったのだけど・・・

・・・

「ああ、観桜会の写真か」

なあんだともいうかのように、急に興味をなくしたのか、再び書類に視線を落とした。

「大崎、これでいいと思うよ」

そういいながら、会長の判子を押す。

「昨日、写真部の人に訊いたんですけど、あの写真販売で、会長マジンを受け取っていたって話じゃないですか? それは本当なんですか?」

「ん？ ああ、そうだよ。ただし、私個人で受け取ったんじゃないくて、さく女生徒会の名義でな。今年は、なかなかいい収入になったよ。今年のメンバーには感謝しているぞ」

さも当然って態度。

ムカムカムカ……！！！！

「なんで、そんなことするんですか？ 人の許可も得ずに、勝手に写真を売るなんて、ひどいじゃないですか！」

つついきつい口調になっちゃう。

でも、熊坂会長、え？ って感じで、意外そうな表情して私を見上げた。そして、冷静な口調で。

「神宮寺、お前なに怒ってるんだ？」

な、な、なんですってえ〜！ 私が、なんで腹を立ててるか、分からないとでも言うつもり！？

「なんで、私の許可も得ずに、勝手に私の写真で商売なんかするんですか！？」

でも、熊坂会長の口調は、相変わらず、意外そうな感じ。しれ〜と、

「ん？ 勝手にって、私の方で写真部に許可出しておいたはずだが？」

「な、なんの権限があつて、会長がそんな許可を写真部に出すんですか？」

「なんの権限って……」

熊坂会長、私たちの話にそれとなく耳を傾けていた大崎先輩の方を見て、アレもってこいって命令した。

大崎先輩、それだけで分かったみたいで、さっそく、奥の部屋へ行って、なにかの箱を持ってすぐにもどってくる。

その箱を受け取り、熊坂会長、中から書類の束を取りだした。

「ほら、今年の1年生たちの入部届けのコピー、えっと、神宮寺、神宮寺、あった、これだ」

私の提出した分を取り出して、渡してくる。

「ほれ、書いてある文章をよく読んでみな」

私、改めて、その書類にしっかりと目を通した。

そして、中ほどに書いてある一文に目が釘付けになった。

『部活動中における各種権利（肖像権、著作権、その他）は、当部活・同好会に帰属するものとします』

つまり、部活動中の写真撮影は、本人に直接許可を得なくても、部・同好会の判断しだいで、行われるってわけだ。

そうか、私が、このさくらヶ丘歴史伝統研究会（さく女生徒会）に入部したとき、この書類をキチンと読まずにサインしたのだけ……

だ、だまされた……！！

「うっ……こんな条文がどうして、こんなところに……」

「ああ、昔、さくらヶ丘の水泳部が全国大会に出場したことがあって、そのときに、水泳部のエースが水着姿を写真に撮られるのが恥ずかしいから、撮らないでくれって、もめたことがあったらしい。

それで、以後、同じようなトラブルが起きないように、そういう条文をいれることになったらしいぞ」

「な、なるほど……」

「で、気が済んだか？」

「……はい」

く、くやし……！！

釈然としない。たぶん、弁護士を立てて、裁判に訴えれば、こんな条文など無効になっちゃうようなものなのだろうけど。

でも、こんなとんでもないことを書いていたのに、よく読みもせず、サインしてしまった私も悪い。不注意以前の愚かな行動だった。

これからは、こんな風にだまされたりしないように、書類とかはよく読んでサインするようにしなければ……！！

「それはそうと、6月からプール開きになるから、神宮寺、水着の準備、しっかりしておけよ」

「え？」

意表をつかれるってこういうことをいうのだろうな。

今まで、写真の話をしていたのに、いきなりプールの話なんて。

でも、会長の話、実は今までの話と密接につながっていた。

「プール開きにあわせて、水着姿の写真撮影をして、写真集を販売する契約になってるから、あんまり食べ過ぎて太ったりするなよ！」

「……………」

会長、にこやかに私を見つめている。

えくと、今、熊坂会長なに言った？

ニコニコニコニコ……………」

「……………」

ニコニコニコニコ……………」

「……………」

ニコニコニコニコ……………」

思わず、大声が出ってしまった。

「はぁ！？ なんですとお！……！」

今日も生徒会活動が終了し、その後開かれている勉強会を抜け出し、裏庭へと出た。

なんなのだ、あの会長は！

勝手に、私の写真を写真部に撮らせるだけじゃなく、水着写真集まで出そうとするなんて！

なにを考えているのよ！

まったく、もう！

私、会長の命令があるうと、なにがあるうと、絶対、そんな写真集の撮影になんか、付き合ったりしないんだから！

断固、拒否するんだから！

私、プリプリしながら、クマのように校舎中をウロウロ歩き回っていた。

でも、全然、私の怒り収まらなかった。しかたなく、風にでも当たって頭を冷やそうと、裏庭へ出てきたのだけど。

夕日に空が染まり、真っ赤になっていた。

裏山の影が長く伸び、旧館の下半分が暗く沈んでいる。

一瞬、生徒会室のガラスがキラリと光ったように見えたけど、窓の近くにだれもいないようだ。

と、ふいにどこからともなく、かすかにあまい花の匂いが漂ってきた。

私、鼻をヒクヒクさせながら、匂いのする方へ歩いてく。

大きな長い植物棚の天井から何本もの花房がのび、紫色の花をチラホラ咲かせている。でも、まだ、満開というほどではなく、まだ蕾の状態の方が多そうだ。

「.....!？」

植物棚の下、薄暗く陰が濃くわだかまっている場所に、私に背を向けている人がいた。

「……だれ？」

その人影、私の声で、ハッと振り返った。

「……!!!」

ビ、ビツクリした。

「き、清貴さん……」

清貴さん、振り返った瞬間、眼がキラキラと輝いていたように見えただけ、私の姿を認めた途端、その光は鈍いものになった。

もしかして、清貴さん、こんな人気のない場所で誰かを待っているのかしら？

「うん？ やあ、君は、確か……学のい……」

「学君の い・と・こ の神宮寺つかさです！」

清貴さんに全部言わせないうちに、いとこ部分を強調しておく。決して、私は学君のいいはずけなのではないのだから！

「あ、そうだったね」

「私、学君のいとこだけど、いいはずじゃありませんから」

「え？ そうなの？」

清貴さん、びっくりしているみたい。

「清貴さん、こんなところで、なにしているんですか？」

「ああ、ちょっとね」

なんだか、曖昧な口調。言いくそくに口ごもる。

「もしかして、誰かを待っているんですか？」

「ん？ わかる？」

「ええ、なんとなく……」

「そっか……」

沈黙。

「だれを待ってるんですか？」

「ん？……」

なんか、はにかんだような曖昧な表情を浮かべている。

「きつとベガの人だね」

「えつと？」

ベガ？ ベガってどこ？ 外国？ いや、そういえば、星の名前にも……… っことは、清貴さん、宇宙人が来るのを待っているのかしら？

ん〜、冗談だよな？

でも、こんな冗談じゃ、笑えないよ。

ハハハ………

でも、清貴さん、さびしそうに笑った。

「たぶん、来ないとは思っただけだね。でも、来てくれないかなって」

えーと、えーと………

ま、まさか宇宙人を本気で？

「去年の秋からずっと、神様の窓へ向かって、お願いしていたんだけどね」

眼が点になっているのが、自分でも分かる。

清貴さんって、こんなにオカルト好きだったのかしら？

それとも、ヘンな宗教にかぶれちゃったの？

私の恋心、ちょっと冷めちゃいそう。

「あ、それはそうと、つかさちゃんは、どうしてこんなところに？
今日は学もありさちゃんと一緒にじゃないの？」

清貴さん、私に向き直った。

「あ、ちよっと、部活で不愉快なことがあったので……
それに、まだ、学君たちと合流する時間じゃないから」

「そっか、なにがあったのかは知らないけど、高校って、勉強の内容が高度になったり、いろんな中学出身の生徒が集まってくるから、価値観の相違とかで、衝突したりすることも最初のうちはあるだろうけど、結構、たのしいこともいろいろあるから、たくさん友達を作って、いろんなことに挑戦して、たっぷり高校生活を楽しむといよ」

「ええ、そうします……」

「10代の後半の時期は、一度きりなんだし、後で後悔しないように、今しかできないことを、思いっきり楽しんだものの勝ちだと思っよ」

なぜか、清貴さん、フフフと笑った。

自分の高校時代の思い出を振り返ってでもいるのかな？

「清貴さんが高校生の頃って、どんなことをしていたんですか？」

「ん？ 俺？ どんなことしていたかなあ」

楽しげな様子で、いろいろ思い出そうとしているみたい。

なんか、今の状況、他の人が見たら、恋人同士が仲良く会話しているように見えちゃうかも。

そんなことを考えたら、ほおが自然と熱くなってきた。

「俺、高校時代、天文部に入ってたさ。よく学校にとまりこんで、望遠鏡で星をながめてたなあ」

へえ、清貴さんが星に興味があったなんて話、初耳。

って、だから、宇宙人に会いたいなんて、言っていたのかしら？

「高1のとき、2つ上の先輩に素敵な人がいてさ。その人に憧れて天文部に入ったんだ」

「んん!？ 清貴さん、高校時代の恋話、聞けちゃうの？」

「俺、その当時は全然、星とか、星座とかに興味がなかったのだけど、その先輩に、いろいろと教えてもらって、夢中になって話しているのを聞いているうちに、しだいに星の魅力のとりこになってさ。気がついたら、先輩への憧れなんて、もうどうでもよくなって、ただ、星空を眺めているのに夢中になってたんだよな」

「清貴さん、高校時代の思い出がよみがえってきたのか、生き生きとしてきた。」

「結局、高校時代の3年間、母さんの道場で、体を鍛える以外のほとんどの時間、星のことを考えて、星を眺めてばかりだった」

「え〜と、ってことは、清貴さん、高校時代、天文部に入るきっかけの憧れ以外、恋とかしなかったのかな？ 健全な高校生。ちよつと清貴さんらしいかも。」

「清貴さんって、高校時代、人を好きになつたりしなかったんですか？」

「そういえば、私が初めて会ったとき、清貴さんは高校生だったわけ。高校3年生の清貴さんに危ないところを助けられて、私、恋をしちゃったのだった。」

「私、耳まで赤くなっちゃったかも。」

「ああ、もちろん、好きな人がいたさ」

「ええ！ だれ？ どんな人が好きだったのだろう？」

「高校生のころに、私とも出会っていたのだから、もしかして、もしかするのかな？」

「ちよつと期待しちゃう！」

「でも……………」

「同級生でさ、笑うとえくぼができて、すごくチャーミングな子だったよなあ」

「う〜ん……………」

ちよつと、落胆。

まあ、そんなに都合のいい話なんて、ないよね。

大体、私、その当時は小学4年生で、清貴さんは高校3年生だったのだし、恋愛がどうとかって関係になるなんて、ないよね。

それに、10代の多感な頃、好きな人がひとりや二人いるのが当然なんだし、こんなに素敵な人を、女たちがほうっておくなんて、ありえない！

「何度かデートをしたけど、結局、高校卒業して、彼女、東京の大学に進学したから、それっきりになっちゃったな」

「そ、そうなんですか……」

つつい、相づちの口調に喜びが混じっていたのは仕方がないか。「大学時代も何人か女の子と付き合ったけど、結局、あんまり続かなかったなあ。だから、今もひとりなんだよねえ」

つてことは、今、清貴さん、彼女募集中？

あ、ああん！こ、これは！

今が、告白のチャンス！

心臓がドキドキしてきた。頬がさらにさらに、赤くなる。

瞬きの回数が途端に多くなった。

勇気を振り絞って、大きく息を吸い込んで……

「あ、あの……」

「あ、いた、いた！つかさちゃん！おーい！」

お約束のように、間の悪いときに、間の悪い登場の仕方をするのは、当然、間の悪いマイペース娘。

「つかさちゃん、こんなところにいたんだ。探してたんだよ」

「友達がよんでるよ」

「ええ、すみません」

「いってあげなよ」

「はい」

折角のチャンスを、折角のチャンスを！

ちよつぷり涙目になっちゃった。

「ね、ねえ〜？　つかさちゃん、さ、さつき一緒にいた人は？」

私たち並んで生徒会室へもどるところだった。

ひかりん、なんか動揺しているみたい。

「ん？　ああ、えーと、選択の時間の武道教えている三木先生って、知ってる？」

「え？　えっと、うん。たぶん」

さくらヶ丘女子高校時代からの伝統で、1年生は、週一で選択科目を受けることになっている。選択できるのは、華道・茶道などの文化科目と剣道・柔道などの武道科目のどちらか。

私とひかりんはもちろん、文化科目だけど、学君とありさちゃん
は武道科目。驚いたことに、委員長も武道の方を選択していた。

「その三木先生の息子さんの清貴さん」

「・・・・・・？」

なんでそんな人にとって目だね、その目は。

「清貴さんって、結構優秀で、今、大学院に通っているんだよ」

「そ、そうなんだあ〜」

「それに、大学院に通いながら、毎週、月曜日と水曜日と金曜日の放課後、三木先生の手伝いをして、柔道部とか、合気道部とかのコーチもしているんだあ」

えっへん！　私、ちよっと自慢げ。

「へえ〜」

「それに、三木先生の自宅にも、道場があつて、柔道や合気道、空手なんかを、子供たちに教えたりもしてるの。学君やありさちゃんも、そこで、教わってたんだよ」

私、自分のことのように、鼻高々。

清貴さんがどんなに格好がいいかとか、強いとか、まだまだいろいろ伝えたいことがあつたけど、話をする前に、生徒会室までもどってきてしまった。

ちよっと残念！　ううん、とっても、残念！！

そういえば、さっきこの部屋を出たときは、プリプリして、抜け出ていったのだけど、今はご機嫌な私。

いまなら、水着での撮影会、これから始めるって熊坂会長が言い出しても、はいはいってうなずいて着替えちゃうかも。

告白のチャンスをいかせなかったのは、残念だけど、でも、学校で、清貴さんと二人っきりで話をしたなんて、初めてのことで、最高に幸せ。

思わず、口笛がとびだしちゃう！

「お、神宮寺、ご機嫌だな？」

私かもどってきたのを見て、熊坂会長すかさず、声をかけてくる。勉強会、今日もユルユルに終わっちゃったみたい。みんな好き勝手にだべっている。

「さつき、裏庭で話していた人だね？　かなり親密だったみたいだけど？」

ニヤリと、窓の外を指す。

私はというと、ポツと頬を赤らめたりして。

「あの様子だと、教員ってわけじゃなさそうだし……………」

「武道の三木先生の息子さんで清貴さんです」

「ああ、あの人が」

「ん？　会長、清貴さんのこと知っていますか？」

「ああ、そりゃね。去年から、うちの学校で武道系の部活のコーチとかしていたからね。私は、興味がなかったけど、結構、同級生とかキヤーキヤー騒いでいたしな」

「へ、へえ〜　そうだったんですか……………」

なんか、ちよつとヤだな。

清貴さんは私のもの。他の女たちがキヤーキヤー騒いでよいものではない！

「でも、なんで、あの人が、あんなところに？ 武道場なら、体育館の脇だろうに？」

「うん……」

清貴さんから、さっき聞いた話をした方がいいのかなあ？

宇宙人を待っているって？

でも、ヘンな危ない人だと思われたらやだし……

「会長、星とか詳しいですか？」

「ん？ 星？ いきなりなに？」

「清貴さんが、さっきベガの話をしていたので……私、

星とかあんまり詳しくないし」

「ってことは、星がでるのを待っていたのかな？ ベガって、夏の星だから、今の時期なら日が沈んだ頃に、地面の近くで見えはじめているかもな」

「そうなんですか？」

「ああ、でも、こんな時期からベガを見たいなんて、変わってるな」

「え？ どうして？」

「だって、ベガって七夕の織姫様のことだろう？」

「あ……」

ベガの人を待っているって言っていた清貴さん。

織姫様。

七夕の飾り。天の川に隔てられた恋人たち……

七夕の日に、一年で一度しか会うことができない。

そ、そういう意味で言っていたのかしら？

む、胸騒ぎが……

「ん？ 神宮寺どうした？ 顔が真っ青だぞ？」

結局、そのあとどうなったのかよく覚えていない。

委員長がどうしたの？ って心配そうに声をかけてきてくれたりしたのは、なんとなく覚えていているけど。

次に、気がついたときには、私、図書館の机に両肘をつき、頭を抱え込んだ姿勢で、いろいろ考えていた。

ベガの人って宇宙人？

織姫様って、だれだろう？

七夕みたいに、一年に一度しか会えない人なのかな？

そして、一番重要なことは、清貴さんが、その織姫様に、今、恋しているのか？ それとも、していないのか？

あの様子だったら・・・

「なあ、つかさどうした？ 大丈夫か？」

突然、頭の上から学君の声が。

そういえば、学君は三木先生の道場に今でも通っているし、その縁で、清貴さんのことについても詳しい。

私、顔を上げ、飛びつくようにして、学君に迫った。

「わっ！？ な、なんだよ、いったい！」

私、声押し殺し、学君の胸ぐらをつかんで、人気のない方へ押ししていく。

ありさちゃんとかひかりん、おどろいて、私たちの後を追いかけてよ
うと腰を上げかけたのだけど。

「こないで！」

私の一言で、戸惑いながらも座りなおした。

声押し殺して、学君にだけ聞こえるように・・・

「ねえ？ 学君、清貴さんのことだけど、ベガとか、ベガの人とか
いう話、聞いている？」

学君、一瞬、え？ って不思議そうな表情を浮かべ、なにか関連

することを覚えていないかどうか思い出そうとはしたみたい。
やがて、

「いや、特に、聞いてないと思う」

「ホント？」

「うん、ホント」

学君、嘘をついているわけじゃなさそう。

学君も知らないみたい。

「で、ベガってなんだよ？」

私、かいつまんで、今日裏庭であったことを話した。そして、熊
坂会長が言った一言も。

「ああ、なるほど。清貴さん、あんまりオカルトとかに興味がない
みたいだし、もしかしたら、もしかするかもな。じゃ、今日も後で
道場へ顔出すから、そのときにでも、訊いといてやるよ」

「うん、お願い」

「おう！ 任せとけ！」

私たち、4人は、いつものように学校をまとまって出た。

ありさちゃんも学君も油断なく校門のまわりを警戒の目で見てい
ただけど……

「あ、あれ？」

「い、いない……」

「えーと…… どうしちゃったんだろう？」

「なんか、珍しいねえ」

そう、校門前でいつも私の帰りを待っていた男ども、今日はだれ
もいなかった。

私たち、拍子抜けしつつ、坂道を下っていった。国道をまたぐ歩
道橋を渡っていても、私の家の前の通りに入っても、だれ一人、男
の姿を見かけない。

「うん…… これって、やっぱり、今朝のあれのせい？」

「だ、だよなあ？」

「あんな一回だけのことで、こんな風になっちゃうなんて、学君、どんな暴れ方したの？」

「え？ そんな大したことしてないんだけど、いくら気持ち悪い野郎どもだっていっても、怪我させるわけにも行かないから、だいぶ手加減してたわけだし」

「うーん、なんか不思議ねえ」

「ああ、そうだな」

で、4人で家上がりこんで、私の部屋。

「この様子だと、明日は大丈夫かもな？」

「ううん、まだ分からないわ。男の人って、結構しつこいから」

「そうそう、特にヘンタイ・ストーカー野郎は、しつこいよねえ」

ひかりん、うちに来てまで、学君に喧嘩をうらないの！

「ねえ、つかさ？ 今晚どうする？ やっぱ泊まっていこうか？」

「えっと、どうしよう？ 今日の様子だと・・・」

「そうだ、私、ほら、お泊りセット。今日は、私も泊まっていくなって、ひかりん、用意のよろしいことで。」

というわけで、結局、ありさちゃんも泊まっていくなった。

だって、学君じゃないけど、外の男たちよりも、私とひかりんの二人きりになる方が、はるかに心配だったのだから！

ごめんね、ひかりん！

「わーい！ つかさちゃんちにお泊りだあ」

その晩も、何事もなく過ぎていき、無事に朝を迎えた。

ただ、今朝は眠たい。

だって、よく眠れなかつたのだもん。

夜中、ハッと気がついたら、私のベッドの中に、床に布団を敷いて寝ていたはずのひかりんがもぐりこんでいて、私の左腕を抱えるようにして眠っていた。

おかげで寝返りも打てないし、左の耳元では、他人がスーッスー寝息を立てているのを、一晩中間かされる羽目に。

ホント、安眠妨害なんだから。でも、いつか清貴さんみたいな素敵な旦那さまができて、ふたりっきりの新婚生活を始めたら、こんな風に二人でベッドをともにして眠るのだけわ。なんて、うっとりと考えだしたら、もう、眠れなくなっちゃった。

結局、カーテン越しに見える窓の外が白々と明けるまで、そのまま将来のことを考えちゃった。

絶対、絶対、幸せになるんだから！

今朝、我が家で一番早く起きたしたのはママ。

箒を出して、家の前の掃除をし、庭の草花に水をやるのが日課。

今朝も、家の前を掃く、シャーシャーというリズムカルな音が通りから聞こえていた。

でも、はじまって5分ぐらいした頃だろうか、その音が途切れた。代わりに、前の通りから聞こえてきたのは……

「あら、神宮寺さん、今朝もお早いのね？」

「あ、本多のおばあちゃん、おはようございます」

「まあまあ、精が出るねえ。でも、最近、このあたりも物騒になってきたから、ほんとヤになっちゃっやうね」

「え、ええ、そうですね」

「昨日なんて、うちの前の通りで何人が若い衆が倒れてたから、介抱してあげたら、なんでも、お宅のお嬢様にやられたっていうじゃない？」

「……そ、そうなんですか」

「私、びつくりしちゃってねえ。あんなかわいらしいお嬢さんが、大の男を何人も投げ飛ばしたりするなんて。そしたら、そのあと、帽子かぶって男の格好した当のお嬢さんが通りかかったものだから、腰を抜かさんばかりに驚いちゃいましたよ」

「は、はあ」

「お宅のお嬢さん、格闘技かなにかなさってらっしゃるの？」

「い、いえ、そういうのは全然」

「そうなの。でも、強いらしいわね？」

「いえ、そんなことは……」

「じゃ、昨日は、男の格好してらしたから、男の格好をすると、強くなったりするのかしら？」

「さ、さあ、そんなことはないと思うんですけど……」

「神宮寺さんは、中国旅行とかしたことがある？」

「え？ あ、はい、1度だけ」

「そう、昔、死んだ亭主が言っていたことなんだけど、中国の奥地に、泉がたくさん湧き出る場所があつて、その泉の水を飲むと、呪いがかかってしまい、その人とは正反対の性質になるとかいう伝説があるんだつて。きつと、中国に旅行されたときにでも、お嬢さん、そのお水を口にしちゃつたのかもしれないわね？」

「おほほほ、まさか」

「ふふふふ、まあ、そんなお話の中だけの話よね」

「ええ、もちろん。でも、もしかしたら、前の旅行のときに、道に迷つて、呪泉郷の泉に落ちちゃつたのかも知れませんか？」

「ほお、それはそれは」

「きつと、つかさが落ちたのは、男溺泉ね」

「……？」

二人して、朝っぱらなんの話してるんだか。

大体、前の旅行のときって、ナニ？

パパやママが中国旅行したのって、私が生まれる前、20年以上前の話でしように！

それに、本多のおじいちゃん、今もピンピンしてるでしょ？

昨日も、ウォーキング中のおじいちゃんとすれ違ったし。

ったく、しょうもない冗談を言い合うのだから、二人とも！

留学！？ 2

登校時間よりも1時間早く学君が我が家にやってきたのは、昨日と同じ。

私、なんどもあくびをして、目をしばしばさせつつ、学君の男くさい制服に着替えた。

学君も、廊下で私の服に着替え、とつくに着替え終わったありさちやんが、偵察ついでに、朝刊を取りに玄関へ出て、家の前の様子を報告してくれた。

んん………

今日も家の前には、男が何人か。

昨日よりはるいぶん減ったとはいえ、今日も男たちが待っていた。ただ、昨日と違うのは………

家の前の男たち、みんなプロテクターをつけている。

野球のキャッチャーがつけるようなものや、アメフトの選手用のもの。中には、西洋の甲冑を身につけている人まで。

うん。

学君、今日は大丈夫なのかなあ？

こんなのを相手にして、学君自身が怪我しちゃうかないか、すごく心配。

学君、ムリしないでね？

ひかりんはというと、いつの間にか、台所でママと一緒にいて、みんなの朝食とお弁当を作っていた。

すっかり、ママと仲良しになっちゃって。

「まあ、包丁使い上手！　つかさも光ちゃんのためのお垢でも飲めばいいのに」だとか、「そう、そこで隠し味にゴマ油を一滴たらすのだとか、いろいろとママから教わっているみたい。」

「光ちゃん、きっと将来いいお嫁さんになるわね。つかさみたいな子より、光ちゃんがうちの子だったらよかったのにね」

って、ちよつと、ママ！ 言っていることと、悪いことがあるでしょう！

少し傷ついたぞ！

「いえいえ、私もまだまだです。つかさちゃんの代わりなんて、とんでもないです」

って、ひかりん、あんた、私の代わりになるうとしてない？

「ホント、お嫁さんにほしいくらいだわ」

「えへ、照れちゃうなあ〜 でも、私、喜んで、つかさちゃんのお嫁さんになりますわ、お母様」

「ああ、なんて、いい子なんでしょう。絶対、お嫁に来てあげてね」

「はい、お母様」

二人して、手を取り合って、あさつての方を見上げたりして。

みんなで朝食をとり終わり、身支度を整えた。

順番にトイレを済ませ、準備万端整った。

あとは家を出るだけ。

そんなときに、廊下ですれ違った学君、私に素早く耳打ち。

「昨日のベガの話だけど、清貴さんに訊いてきたぞ」

「え？」

思わず、振り返った私。その視線の先で、無表情な学君がいた。

な、なんだったのだろう？

清貴さんの言っていた、ベガの人って、どういう意味だったのだろう？

やっぱり、七夕のような話だったのだろうか？

学君の顔からは、結局なにも読み取ることはできなかった。

「それじゃ、今日も一丁暴れてくるわ」

「うん、いつてらっしゃい。気をつけてね」

「学、今日はいいつらプロテクターつけてるけど、大丈夫？」

「ああ、まあ、何とかなるっしょ。危なくなったら、ありがた助け

たけど、今日は手加減抜きで、思いつきりいつでも大丈夫だしね」

「へ、へえ……」

素人とはいえ、プロテクターつけている相手でも失神させられるって、どんな実力なのか。

小学校のときから、私を守ってくれていた学君、前々から結構強いとは思っていたけど、想像以上なのかもね。

私たち3人は、やがてゾロゾロとドアを開け、学校へ歩き始めた。そのころには、家の前で失神していた男たち、気がついて、よろよろと帰っていく。

しょんぼりとしちゃって、ちょっとかわいそうな気もしないではないけど、もう、コレに懲りて、二度と私の前に現れてくれないといいな。

でも、でも、ちょっとその電柱に抱きついている男、なに恍惚とした表情浮かべてるのよ！

まるで、ありさちゃんに投げ飛ばされた学君みたいな表情を浮かべちゃって……

『う、うう……最高！』って、アンタ！

『つかさ様、もっともつと俺をいじめてえ〜！』なんて、寝言を……

ヘンなの！

で、今日も本多のおばあちゃんとすれ違ったので、挨拶。

「いつもいつも、あんたも大変だね〜」

だなんて、言われてしまった。

途中、やっぱり何人か道端で伸びていた男たちがいたけど、昨日よりは断然少ない。

膝を抱えて、さめざめと泣きながら、『あんな暴力女、二度とごめんだ！』なんて、つぶやいている男もいたので、ちよっぴり喜んじやった。

そうそう、あなたたちでは、私とは釣り合わないのよ。

もっと、あなたたちにお似合いの女たちを捜しなさい！

そう忠告してやりたいのだけど、声を出したりしたら、変装してらって、ばれちゃいそうな気がして、私、黙って、通り過ぎてきた。

いつもの交差点で、私たち、学君に追いついた。
散々暴れたはずなのに、どこも傷めた様子がない学君。
いつものように、爽やかな笑顔で、

「お、来たな！」

って手を振ったりして。

うん………

私の顔で、男っぽく笑顔を浮かべて、手を振られちゃうと、つくづく魅入っちゃうよ。

これは、危険だわ。

って、ひかりん、なにポツと頬を染めてるのよ！ あれは、私じやなくて、学君なのよ！ あんたの言うところの変態ストーカー男なのよ！

ありさちゃん？ 大丈夫？ なんか失神寸前って、感じだけど？

こら！ その男子、学君は、アンタに手をふってるんじゃないの、耳まで赤くなって、手を振り返したりするんじゃない！

はあ〜 まったく、もう！

両側が葉桜並木の坂道。

ひかりん、家を出てから、ずっと私の腕をつかんで離れなかったのに、学君が強引に間に割って入ってきたら、なぜか大人しく私の腕を放して、ありさちゃんと並んで歩き始めた。

いつもなら、『なにするのよ！』とか、『近くに來ないで、ヘンタイ！』とか、学君に暴言の数々を浴びせるのに、今日はなし、ヘンなの！

で、学君、私の隣を歩きながら、小声で話し始めた。

「昨日、あれから道場へ顔出したら、清貴さんがいたんです。つかさが聞いたベガの人とかいうのどついう意味が訊いてみたんだけど………」

最初のころは、清貴さん、話をはぐらかして、なかなか話してくれなかった。

昨日は、学君と清貴さん、二人一組で組稽古をしていたのだが、ふつと学君が、ベガってというのは、もしかして、清貴さんの大事な人かなにかかって、モノのついでのように口にした途端、清貴さんガードを忘れて棒立ちになっちゃったらしい。

ちようど学君が拳を撃とうとした瞬間だったので、もろに顔面にヒット。

そのまま、倒れてしまった。慌てて、清貴さんの部屋に連れて行って、介抱してあげると、ようやくいろいろと学君に話してくれる気になったらしい。

なんでも、去年の秋10月、清貴さん、学校の裏庭の植物棚の剪定に園芸業者の人が来たとき、ベンチの移動を手伝っていた。だけど、剪定作業が終わり、ベンチを元に戻そうとしたら、そのベンチには、星を見ていたさく女の制服を着た少女がいた。

清貴さん、一目ぼれだった。

笑顔が素敵で、まるで花がこぼれるみたい。

清貴さん、思わずその少女に、来年の春、つまり、今年の春、植物棚にまきついている花が満開になったところ、また会おうって、約束したそうなの。

で、二人はその一度きりの出会いだけで分かれたわけだけど、清貴さん、肝心のことを尋ね忘れていた。その少女はだれなのか？

慌てて、あちこち学校中を探し回ってはみたのだが、二度と、少女に再会することはなかった。

だから、あのとときの約束を思い出し、再び会えることを願って、もうすぐ満開になる植物棚の下で、その少女を待っていたらいい。清貴さん、濡れタオルで、顔を冷やししながら、さびしそうに笑っていたそうなの。

「.....」

私、言葉を失っていた。

清貴さんが、私の大好きな清貴さんが、想いを寄せる人だなんて。

ずっとその面影を追い求める人がいたなんて……
私、鼻をすすり、目をぎゅゅとつぶる。
泣きたい気分。

隣で、学君、そつと心配そうに私の顔をのぞきこんでいる。
ここで泣いてしまえば、すごく楽だろうな。

でも、まだ校門の前、こんなところで、泣いてしまったのでは、
女の子のように涙をこぼしてしまえば、私と学君が入れ替わって
いること、バレてしまいかねない。

どこで、どんな風に、私たちのことを男たちが見ているか。

それに学校では、常に注目の的の私。そんな私が、泣きながら登
校すれば、何事か！？ って学校中が大騒ぎになっちゃう。

とにかく、今は泣いちゃダメ！

私、泣いたりしないで、笑わなくちゃ。

笑え！ 笑え、私！ そう、いつものように、だれをも魅了して
しまふ天使の笑顔・エンジェルスマイル！

「よっ！ まなぴー」

「つかさちゃん、おはよう！」

いつものように、友達たちと朝の挨拶を交わす。

「おはよう！」

満面の笑顔で。私のトレードマークの笑顔で。

今日も朝から上機嫌なつかさちゃん。

でも、私の隣で、学君、そんな私を痛々しそうに見守っていた。

私、下駄箱で上履きに履き替えた。

一緒に1-Aの下駄箱コーナーで履き替えているありさちゃんに、『先行ってるね』って一声かけて、廊下を足早に歩き出す。

教室へ向かう同級生たちを掻き分けて進む。おはよふの挨拶を交わしながら。

でも、教室の前までやってきても、私の歩調は緩まない。教室の前を素通りし、さらに、廊下の奥へ。

すれ違う人も断然少なくなった。

ほとんど、だれからも見られていない。自然と、瞳がうるむ。

両下まぶたの上に水滴が浮かび、膨れ、あふれ、しずくとなって頬を伝う。

キラキラと朝の光を反射しながら、床へ落ちていった。

そのまま、私、トイレへ飛び込んだ。

開いている個室にこもって、入り口にカギをかける。

ポケットをまさぐり、男くさいハンカチで、慌てて目元を押さえた。

そして、

「う、ううう、うう、ううう……」

声を殺して、私、涙をこぼし続けた。ハンカチをぬらし続けた。

私の初恋の人の心には、私ではない他の誰かが住み着いている。

その人とは、たった一度きりの出会いだったというのに。

その面影を半年以上も、追い求めてしまうほどに、熱く、熱烈に・

……

しばらくして、落ち着いたので、トイレの個室を出て、入り口の洗面台の前へ。

帽子を脱ぎ、髪を下ろし、トイレの鏡でチェックしながら、いつ

ものつかさちゃんにもどっていく。

まだ、目元が赤いけど。でも、大丈夫。だれも気がつかないわ、きつと。

私の美貌にみんな見とれて、そんな些細なことにだれも注意しない。

みんなは私の表層的なモノだけをみている。だから、本当の姿を、だれも見通してたりなんかしないもの。

がんばれ、つかさ！　がんばれ！

私、教室の入り口の前で、大きく深呼吸して、チャイムとともに、教室の中へ入っていった。

いつものように、みんなに挨拶。

エンジェルスマイルつきで。

私、自分の席へついた。

1時間目が終わった。

授業の内容なんて、ちっとも頭の中に入っていない。

ただ、1時間、清貴さんのことを、清貴さんが追い求める人のことを考えていた。

去年の10月に初めて会って以来、一度もあつたことのない女人。

私たちは、今年入学したのだから、当然同級生たちではない。

上級生たち。

2年生か、3年生か、今年卒業した誰か……

秋以来、清貴さんが探し回っていたのに、見つけることのできなかった少女。

一体、だれなのだろう？　どうして、見つけることができなかったのだろう？

そして、もし清貴さんが、その少女に再び出会うことがあったら、どうなるのだろうか？

そのまま、二人は恋人同士になるのだろうか？

あ、でも、清貴さんが一生懸命に探し回ったというのに、見つめることができなかつたということは、その少女、清貴さんのことを避けていたってことだよな？

さくらヶ丘女子高校は、とても大きい学校というわけではなかつたのだが、清貴さんは学校の職員ではなく、男性でもあつたので、そうそう校舎内に入りできるってわけでもなかつた。だから、特定の生徒を見つけるといふのは、意外と難しいのかも。だとしても、10月から半年以上探しつづけても見つからないなんて、ちよつと考えにくい。

やっぱり、その少女、清貴さんのことを避けていたのよね？

その子、一度会つたきりの清貴さんのことを警戒して、もしかしたら、嫌っていたのかも。

そうであるなら、たとえ再会することがあつたとしても、二人が恋に落ちるなんてことはないだろう。

もしかしたら、まだまだ私にだって、チャンスがあるのかもかもしれない。

清貴さんがすっぱりあきらめさえすれば、私にだってまだまだ。

とにかく、その少女がだれなのか、調べて、清貴さんへの気持ちをはつきりさせなくては。

すべては、そこからしか進まない。

そんなことを考えながら、ひとりで旧館にある生徒会室へ向かった。

学校に着いてから、1時間目が終わるまで、自分の気持ちを整理するだけで精一杯で、参考書を借り出していなかった。

朝のホームルーム前には、生徒会室へ行って、今日使う分を借り出さなきゃいけないのに。

私、足早に、旧館の廊下を歩いていく。

生徒会室の前、用務員室から借り出してきたカギを鍵穴へ差し込む………

でも、

「あれ？」

今日もドアは開いていた。

だれか、他にも来ているのかしら？

私みたいに、朝のホームルーム前に参考書を借り出し忘れた人？

ん？ でも、用務員さん、そんな人が私より先にカギを借りに来たなんて言っただけじゃあな。

そもそも、誰かが先にカギを借りているのなら、私がカギをもっていること自体おかしい。

誰か他に、この部屋のカギを持っていて、自由に出入りできる人といえば………

熊坂会長？

でも、こんなに朝早くの授業の合間に、麓から上ってくるなんてヘン！

じゃ、だれなのだろう？

私、深呼吸して、ドアに手を伸ばした。

そして、大きく開けた。

「失礼します」

部屋の中へ一歩踏み出した私の視界に、奥の窓際に立つ私服の女性
性が、ゆっくりと振り返るのが入った。

「だれだか、すぐに分かった。」

「あ、梅田先輩」

「あら、神宮寺さん？」

梅田先輩、一昨日と同じように窓のそばに立っている。

「どうしたの神宮寺さん、忘れ物？」

「あ、はい、いえ。ちよつと参考書借りようと……」

「そう、一生懸命勉強しているのね。えらいわ」

「いいえ、そんなことは……」

「ふふふ」

軽く笑って、梅田先輩、裏庭に面した窓の方に向きなあった。

開いた窓から、風が通り抜けて、彼女の長い髪の毛を揺らす。朝
日を浴びて、髪の毛の一本一本が光の粒をまとったようで、思わず
見とれちゃうほど綺麗。

でも、すぐに私、この部屋に何の用事で来たのか思い出した。

目を二、三度しばたたき、ぺこりとお辞儀をひとつして、奥の部
屋へ入っていった。

奥の部屋。2時間目以降に使う参考書をいろいろ物色し、借り出
しの手続きを済ませて、教室へもどるためドアのノブに手を伸ばそ
うとした。

そのとき、扉の向こうで、誰かが入ってきたみたい。

「梅田さん、お待ちせ。コレね。あっちから梅田さん宛へ届いた書
類」

「あ、先生、お手数をおかけします」

「ええ、いいのよ。なんてたつて、あっちの大学から直々にお呼び
がかかってくるような優秀な生徒を教えたのつて、私たちの誇りな
んだから。これはまたとないチャンスだし、私は行くべきだと思っ
けど、あなたにも、今の大学のこととか、いろいろと考えなきゃい

けないことがあるだろうから、おうちに帰って、じっくり考えて、ご両親とも相談して、決めなさいね」

「は、はい」

「まだ春なんだし、迷う時間はたっぷりあるわ。しっかり、あれこれ考えて、あなたがベストだと思う道を選択していきなさい」

「はい、ありがとうございます」

「あなたは、あなたの道をしっかりと歩んでいきなさい！」

「はい！」

え〜と……

あつちの大学ってことは、やっぱり外国の大学ってことだよな？
ってことは、梅田先輩、どっか外国へ留学しちゃうのかな？

今の話からすると、外国の大学からわざわざ指名されて、留学の誘いが来ているみたいだけど……

扉の向こうで、誰か、たぶん先生が出て行った後、私、おずおずと扉を開けた。

梅田先輩、分厚い書類を近くの長机の上に置いて、また、窓の外を見ている。

長いまつげの影を目に宿らせながら、静かに視線を窓の外へ。

とつても、さびしげ。

「先輩？」

私、なんとなくドギマギしながら、おずおずと声をかけた。

梅田先輩の視線が、部屋の中へもどった。私のいる方へ。

「先輩、留学されるのですか？」

「ええ、たぶん」

ぼつりと答える。

「へえ〜 すごいですね」

「ん？ そつ？」

「ええ、すごいですよ。それに、向こうの大学からお誘いが来たとか？」

「そう、今、先生と話していたとおりね」

軽くあごで、机の上の書類をしめた。

「すごいなあ 日本の高校に通っていても、あっちの大学からお誘いが来るなんて、そんなことあるんですねえ」

「ああ、私、去年の秋から半年ほど交換留学でアメリカの高校へ通っていたから、そのせいよ」

「え？」

びっくりして目が丸くなっちゃった。

「向こうの高校に通っていたときに、たまたま、小論文コンテストっていうのがあってね。それに応募したら、1位になっちゃったの。それで、大学から誘いが来たってわけ」

「す、すごい!」

アメリカでの小論文コンテストってことは、やっぱり英作文。私、高校にいる間に、英語で作文できるなんて自信はまったくない。それどころか、1位をとっちゃうぐらい、論理的文章、間違いのない文法をマスターするなんて、絶対ムリ!

梅田会長のこと、尊敬しちゃう!

私をだますようなこととして、写真部からお金を巻き上げているどこぞの会長なんかより、何倍も、すごい人!

圧倒されちゃう!

「最初は、向こうの通っていた高校へお誘いの書類が届いたらしいのだけど、私、日本に帰った後だったし、公式には、さく女の生徒だったので、こちらへ転送されて、今日、受け取りに来たのよ」

「そ、そうなんですか……」

ほんと、すごい人。

やっぱり、どこぞの会長さんとは、まったく違う。

梅田先輩、なにか、ふっと思いついたみたいな表情をした。

「それはそうと、神宮寺さん、もうすぐ休み時間終りになるけど、いいの、こんなところで、のんびりおしゃべりしてて?」

「あ! 遅刻しちゃう!」

私、慌てて、参考書を抱えなおし、入り口のドアへと向かった。
「この力ギは、私が閉めていくから、つまづいたりしないよう、
足元気をつけてね」

「はい、ありがとうございます。お先、失礼します」

入り口で振り返って、ペこりと頭を下げ、廊下をかけていった。

梅田先輩、ふふふと含み笑いを浮かべたまま、再び窓の方を向いた。

窓から吹き込む風に、髪をなびかせながら。

今日も無事に授業が終わった。

何度も清貴さんのことをふと考えてしまつて、先生たちの説明を聞き逃したりしたけど、でも、このレベルなら、別に授業をちゃんと聴かなくても、十分挽回できる。

そんなことより、今日も参考書に集中！ 集中！

自分自身に、そう言い聞かせ、清貴さんのことを考えないように、必死に参考書に取り組んだ。

今日は、いつもより、長い一日だった。

授業が終わわり、私たちは生徒会室へ、まずは連絡事項の伝達があつて、勉強会の開始。

お互いに分からないことや苦手な分野を教えあつて、そして、いつの間にかおしゃべりタイム。

今日もグダグダで勉強会は終わった。

そういえば、熊坂会長、梅田先輩のことを結構尊敬しているみたいだけど、先輩がアメリカの大学へ留学するつて、知っているのかしら？

「会長、梅田先輩のこと聞いていますか？」

「ん？ 梅田会長が、なんだつて？」

「あの、今度、アメリカの大学へ留学するつて……」

熊坂会長キョトンとしちゃつて、知らなかったみたい。

「今朝、参考書借り出しに来たら、梅田先輩が来ていて、なんでも向こうの大学から留学の誘いが来たんですつて」

熊坂会長、目をまん丸に見開いちゃつて、

「え？ そうなのか！」

「はい、向こうに留学しているときに書いた小論文が、コンテストで1位になったので、それでお呼びがかかったとか」

「ああ、それですか。まあ、当然だよな。なんてったって、小論文コンテスト優勝だもんな。すごいよなあ」

「ええ、すごいですよねえ」
私も心から感心しちゃう。

「生粋のアメリカ人たちを抑えて、交換留学でアメリカへ渡ったばかりの会長が、1位をとったんだもんなあ」

熊坂会長もなんだか自分が1位になったかのうように、うれしそうな表情している。

「あれは、確か今年の1月だったかな。快挙だっというので、うちの学校にもなにか取材が来てたっけ」

「へえ、そうだったんですか？」

「ああ、私も、会長が留学している間の生徒会長代理というので、インタビューを受けたし。あの時は、結構大きな騒ぎになっていたんだぞ！」

「そう、だったんだあ」

まあ、そうだろうなあ。ただの日本の高校三年生がアメリカの小論文コンテストで優勝したのだから。

ん？ 高校三年生？ 受験生。

「あ、じゃ、梅田先輩は、受験どうしてたんですか？ 高校三年生でアメリカへ留学していたなら、受験できなかったのでは？」

「ん？ ああ、受験か。梅田会長は、確か、留学前の去年の秋のはじめには、学校の方から推薦入学の内定が出ていたから、別に受験であくせくしなくてもよかつたんだよ」

旧さくらヶ丘女子高校は県下でも一、二を争う進学校。優秀な生徒が集まり、毎年、学校の推薦という形で何人かの生徒が、試験免除で大学へ進学できた。

その推薦枠に梅田会長も入っていたらしい。

「さく女の生徒会長になると、希望すれば、推薦もらえるんだけどな。今年は、どうなるか…… 神宮寺に推薦枠なんて、割り振ってもらえるのか、どうか……」

ちょっと心配そうな表情。

「あ、大丈夫ですよ。会長、優秀ですし。たとえば、推薦枠なんてなくても、どこの大学でも十分、受かっちゃいますよ」

ちよつとリップサービス。

「ん？ ああ、ありがとう。でも、推薦枠があると、留学しやすくなるのは確かだからな……」

「え？ じゃ、会長も留学されるつもりなのですか？」

「ああ、先生たちに教えてもらったけど、神宮寺になっても、交換留学の制度自体が廃止になったわけじゃないから、今年も秋に留学生が派遣されるらしいぞ」

「へえ、そうなんですか」

「去年は、私、会長代理を務めなきゃいけなかったんで、応募できなかったが、今年こそは留学するつもりだ」

「じゃ、梅田先輩の後を追いかけるんですね？」

「はは、かもな。できれば、そうしたいけど、あの人は別格だからな。私は、あの人の見た景色を見て、感じてくるだけしかできないさ」

すこし、遠い目をしてる。

「まあ、なんにせよ、10月の文化祭が終わってからの話なんだけどな」

不意に会長、私に向き直った。

「そつだ、神宮寺、お前も交換留学、応募してみないか？」

「え？」

「ルックスだけでなく、頭の中身の方も、かなり優秀って話じゃないか？ お前なら、応募すれば、選ばれると思うが……」

「そ、そつですか？」

考えてもいなかった。留学なんて。

でも、日本ではない国の学校。日本では味わえない空気。

怖いような気もするけど、なんだか、すごく魅力的。

「6月ぐらいに募集が始まって、8月までに交換留学生の選考が行われるから、募集が始まったら、改めて教えてやるよ」

「あ、はい、お願いします」

「ああ、分かった。ともかく、9月には、あつちの学校へ通うつもりで、今からしっかり英語だけは、勉強しておけよ」

「はい、そうします」

「それと、こちらから派遣される生徒は、みんな一人ずつ別々の高校へ派遣されるから、普段から、一人で何でもできるようになっていないと、かなりつらいぞ」

「え？ みんな同じ高校へ派遣されるのじゃないのですか？」

「はは、みんな同じ高校へ派遣されたら、かたまってグループになっちゃうから、異なる生活体験をし、文化を吸収するって、本来の目的の達成ができなくなっちゃうだろ？ そうなると、留学する意味がない！」

「は、はあ……」

一気に不安になってきた。

「だから、派遣される学校は、それぞれ別なんだ」

「そ、そんなあ」

「不安になつてきたか？」

私、小さくうなづく。

「だろうな。私も、最初聞いたときは、不安だった。でも、あつちでは、他の学校から来る日本人もいるし、ときどき同じ学校の生徒が集まって、パーティーとかもするみたいだから、それほど心細くはないって梅田会長がおっしゃってたぞ」

「そ、そうなんですか……」

「まあ、いい経験だと思って、楽しんでくるのが一番。もし交換留学生に選ばれるなら、いっぱいあちらの生活を満喫してこないとな」

「そ、そうですね……」

ど、どうしよう、私、交換留学に応募しようかしら？
それとも……

あ、そういえば、会長、今ちょっとへんなことを言ったような。私に対しては、9月から留学するつもりで、準備しておけて、言っていたのに、自分自身の留学は10月の文化祭以降とか、なんとか？

「あの、そういえば、さっき、会長、文化祭がどうとかって、なんなんですか？」

「え？ ああ、お前たちが留学するのは、9月の向こうで新学期が始まってからだけど、こっちの生徒会の主な仕事が文化祭で終わりになるから、それが終わってからしか、生徒会の幹部は向こうへ行けないんだ」

「ああ、なるほど・・・」

「すくなくとも、文化祭までは、キチンと生徒会の責任を果たさないと」

熊坂会長、ポンとひとつ自分の胸をたたいた。

今日も旧さく女生徒会の活動も解散。

私とひかりんは、並んで、学君とありさちゃんとの待ち合わせ場所の図書館へ向かった。

「あ、そういえば、会長、この秋、留学するつもりとか言っていたけど、ひかりん知ってた？」

「うん、知ってるよ。前から留学するって宣言してたから」

「女の子一人でアメリカへ行くんでしょ？ おうちの人とか、反対しないの？」

「ううん、去年最初に言い出したときから、ずっとお母さんは大反対なんだよ」

「そ、そうなんだ」

「だから、お母さんとお姉ちゃん、家ではずっと、口もきかないんだあ。朝、お母さん、お姉ちゃんのお弁当作ったりしないし。その巻き添えで、私の分もお弁当作ってもらえないんだよねえ。ホントやになっちゃう！」

まあ、そうだろうねえ。親なら反対するかもね。

かわいい娘が自分たちの目の届きにくいアメリカへ一人で留学するのだから。

「だからって、自分のお弁当を、私に作らせるなんて、お姉ちゃんもひどいよね？」

ああ、そういう事情で、ひかりん自分でお弁当作ってくるんだあん？ あれ？ たしか、会長、身の回りのことを何でも自分でできるようになっておいた方がいいなんて、忠告してなかったっけ？

お弁当ぐらい、自分でできないと、いけないのじゃ？

あ、そんなことより、もし私も留学するのだったら、お料理とかマスターしないと……

これは、お料理苦手とか、なんとか、のんきなことを言っている

場合ではないのかも。

ひかりんに見習って、お弁当作りぐらいできるようになっていないと、いけない！

うっ、なんか自信ないな。

確か、小学校で調理実習があつたときには、私のグループだけ、毎回、体調を崩して、翌日学校を休んでいたし。中学のときは、私のお鍋が大爆発おこしちゃったし……

クッキーを焼けば、歯が折れそうに硬かったり、魚は炭に、ご飯は芯が残っていたっけ。

これまでは、美の女神つかさまは、お料理なんてできなくても、この美貌があるだけで十分だっ！ みんなは、私の美しさをおかずに、ご飯が三杯はいけるとかいつていたけど、これからは、きちんとお料理できるようにならないとね。

がんばらなくっちゃ！ つかさ、ふあいとおく！

図書館では、ありさちゃんが一人で待っていた。

「あれ？ 学君は？」

「ああ、学、空手部の用事があるとかで、先に帰っててって」

「そう、じゃ、今日は女の子だけだね」

天敵の学君が来ないと聞いた途端、妙にテンションが上がっちゃうヤツが一匹……

「ぐふふ。神宮寺を代表する美少女トリオだぜ！」

「そ、そうね……」

「今日も、男子たちの視線が熱いぜ！」

って、ひかりん、周りの男の子たちに、Vサインするの、やめなさい！

そこの気の弱そうな男子、なに、顔赤くして地味にVサイン返してるの？

あ、ありさちゃん、置いていかないでよ、自分だけ他人のフリなんて、ひどいじゃない！

いい加減、ひかりん、私の腕をはなしてよ！

みんな、私は、このVサインだしているヘンな人とは、赤の他人ですから、腕とられているけど、同じ人種ではありませんから！

で、私たち、3人並んで、校門を出た。

校門を出るときは、それとなく警戒の目を光らせていたけど、昨日に引き続いて、今日も校門前、待っている男たちはいなかった。暴力女・神宮寺つかさに幻滅して、男たちようやく離れていったのね！

こんな可憐な美少女なのに、暴力女って噂されるのは、本当に不本意なだけで、ストーリーカーまがいの男たちに、毎日付きまとわれるよりは、ずっとマシ！

だから、不本意ではあっても、暴力女の称号、甘んじて受け入れるわ！

私たち、今日も学校で起きた出来事や、昨日見たドラマの話、友人たちの話をたわいもなく、おしゃべりしあって、学校前の坂道を下っていった。

しばらく葉桜並木の坂道を下ると、いつも待ち合わせに使っている交差点に出る。

異変が起きたのは、その交差点に差し掛かったときだった。

突然、交差点の左から、男が二人飛び出してきた。

そして、一番左側にいたありさちゃんに飛び掛った。

気がついたときには、ありさちゃんの首筋にナイフが押し付けられていた。

あつという間の出来事。

「動くな！ この女の命を助けてほしかったら、そこを動くな！」

つて、そんなことを言われなくても、私、足がすくんで動けない

！ ひかり人も呆然としている。

男たちは、サングラスにマスクに目だし帽、見るからに怪しい格好の二人組。

立ちすくんでいる私に、ありさちゃんを抑えていない方の男が近づいてきた。

「動くな！ 悲鳴を上げるな！ おとなしくしている！」

なんていいながら、私とひかりんの両手を縄で縛ろうとしてくる。

このまま、抵抗できないようにして、私たちを誘拐しようという魂胆みたい。

ちようどそこへ同じような格好した男が運転する車が、私たちの脇に止まったし。

もし誘拐されたりなんかしたら、どんな目にあうか、想像したくもない！

男たちにしたら、この誘拐、私が目当てで、ありさちゃんやひかりんは、私が暴力に訴えないようにするための人質ってつもりなのだろうけど。

だからかな？ 暴力女って評判の私が両手を縛られて、ジツとしているのを見て、男たち目に見えて、ホッとしている。

うーん………

でも、あの評判の暴力女は、私じゃないし、この3人の美少女の

中で、一番強いのも私じゃないのだけど……

一瞬の隙をつかれ、のど元へナイフを突きつけられた。だから、ありさちゃんも動くわけには行かなかった。でも、ありさちゃんを抑えていた男、私が縛られた後、キチンと縛ってあるか私の手元を確認しようとして、ありさちゃんから注意がそれたんだよねえ。

ありさちゃんには、それだけで十分だった。

次の瞬間、その男の体が宙を舞い、私たちの足元に叩きつけられる。

思わず、見惚れてしまいそうな一本背負い！

そういえば、つい最近まで、毎朝見られていた風景だ。

最近は見なくなったので、ちょっとさびしい気もしないではなかったけど。

私の両手を縛った男が、慌てて振り返った瞬間、ありさちゃんのしなやかな長い手足を利用した回し蹴りが炸裂、吹っ飛んでいってしまった。

その様子を見ていた車の中の三人目の男、慌てて、車を急発進させた。

あ、このままじゃ、逃げられちゃう！

「くらすッ！！」

直後、横手からサッカーボールが飛んでくるのが見えた。

矢のようなすばらしい弾道を描いて、一直線に車のフロントガラスに飛んでいく！

ガシャン！！

たちまち、フロントガラスにくもの巣状のひびが入り、車はそのまま道路わきの溝にタイヤを落として、動けなくなった。

ボールが飛んできた方向を見ると、少年が一人、シュート姿勢の延長で足を振り上げている。

島崎君だ！

その靴は夕日を浴びて、ピカピカ光っていた。

まるで、キック力増強シューズかなにかのように……

眼鏡や蝶ネクタイはつけていないけど。

ともあれ、ありさちゃんと島崎君の活躍で、三人組の誘拐犯、捕まえてしまった。

その後、警察が来て、犯人たちは逮捕され、連行されていった。

後日の調べでは、今朝、学君にコテンパンにやられた男たち、昨日の凶暴な私（学君）はなにかの間違いだと自分自身に言い聞かせていたのだけど、今朝の暴力で目が覚めた。私は、ただの暴力女だと。外見が天使みたいだけど、内面は悪魔か魔女そのものだと……

そう気がついた途端、男たち、胸の中に怒りがフツフツと湧き上がってきたらしい。

そして、かわいい顔で天使のフリして自分たちをだましていた“神宮寺つかさ”に復讐しなければいけないと考えるようになった。もちろん、ついでに捕らわれの身になった私で自分たちの欲望を満たそうとも。

そこで、協力し合って、私を誘拐する計画を立て、実行したらしい。

さいわい、その計画は失敗に終わったのでよかったけど、もし成功していたら、私、どんな目にあっていたことか……

ブルブルブルブル……

怖いし、気持ち悪い！！

でも、未遂に終わったとはいえ、とうとう本物の犯罪事件に巻き込まれてしまった。

観桜会のあと、男たちに、ストーカー同然に付きまとわれ、困り果てていたときに、一度、警察へ相談にいったのだけど……

まだ別に犯罪事件に巻き込まれたわけでもなく、重大な被害が発生しているわけでもない、まともに相手してくれなかった。でも、そのくせ、一旦、犯罪に巻き込まれて、被害者になった途端、警官の護衛つきで、家に帰ることに。

なんか、釈然としない！

最初から、警察がキチンと対処していてくれれば、学君やありさちゃんを巻き込む必要もなかったし、ありさちゃんやひかりんに怖い思いをさせることもなかっただろうに！

ホント、警察って、肝心なときに、たよりにならないんだから、もう！

でも、これからは家の前をパトロールする頻度を増やしてくれ、今まで二時間ごとにパトカーでおざなりに見回っていたただけだったのを、30分に一回程度、警察官が徒歩で見回ってくれるって、約束してくれた。

さらに、登下校時には、通学路に警察官を派遣してくれるのだから。

すごく、すごく安心！

これでやっと高校入学以前のような、平和な日常生活がおくれそう！

本当、みんなに感謝だね！

いままで、いろいろとありがとう、学君、ありさちゃん！

初恋の終わり 1

私の住んでいる町は、思っているより、ずっと小さいみたい。

次の日、会う人、会う人みんなに、『昨日は大変だったね！』だとか、『辛い目にあつたね、かわいそうに！』だとか声をかけられどおし。

仕舞いには、どういう噂になっているのか、『野良犬にでもかまれたと思って、すっぱり忘れてしまいなさい！』だとかいう人もいた。

うーん………

なんか、ヘンな噂が一人歩きしないといいな。

ともあれ、昨晩は、警察のパトロールがまじめに行われていたみたいで、一晩中、家の前の通りから、なんども職務質問を行っている声が聞こえてきた。

一応、ありさちゃんが泊まっていたってくれたし、今朝も学君と服装を入れ替えて登校したのだけど、いつもの男たち、今日は一人も現れなかった。

やっぱり、可憐な絶世美少女つかさちゃんってイメージを壊すよ
うな、暴力場面を眼前にして、多くの男たちが幻滅してしまったのがひとつの理由。

それから、犯罪行為に走ってでも、私を手に入れたい！ と極端な行動に出してしまうほど執心していた男たちが、実際に誘拐未遂事件を起こし、逮捕されてしまったことも大きな理由かも。

あの人たちは、朝から、家の前で待ち伏せしていた男たちのリーダー格。そんな人間がいなくなってしまったのは、仲間と固まっ
たないと何もできない、気の小さな彼らにとっては大きな痛手。

そして、一番大きな理由は、事件を受けて、警察が本気で取り締まるうってという姿勢を示したこと。

待ち伏せする男たちってというのは、本質的には、優柔不断な小心

者。警察がパトロールを強化し、頻繁に職務質問するようになれば、おびえて、退散してしまう。

だって、もし、芯の強い大胆な人間だったら、私が嫌がっているのを分かっている、待ち伏せたりしないし、好意を受け入れられる可能性がないなら、すっぱりとあきらめて、次の素敵な女の子を口説こうとするもの。

まあ、もつとも、彼らが、私ぐらい素敵な女の子に出会えるとは思えないけど……

可能性がないのに、いつまでも一人の女の子に執着するなんて、自分では、なにも決めることのできない小心者ではない。

とにかく、こんなに簡単に、問題が解決するのなら、私が最初に相談したとき、警察がしっかり動いて、取り締まってくれればよかったのに！

ほんと、警察って、肝心なときに頼りにならないんだから！

学校では、同級生たちや先生たちが、いつも以上に優しく接してくれて、ちょっとうれしかった。

それから、昨日の功労者のありさちゃんと島崎君、一時間目の途中に呼び出されて、お昼まで帰ってこなかった。

お昼休みにもどって来たありさちゃんに尋ねると、市役所へ行って、表彰状をもらい、市長さんと握手してきたんだって。

その後、地元の新聞記者さんたちに生まれて初めて取材されたなんて、興奮気味に話していたし。

うんうん、よかったね、ありさちゃん！

学君も委員長も、なんだか、自分たちのことのように、鼻高々にしている。

で、放課後、私たちは、いつものように旧館の生徒会室。

雑用をチャツチャと済ませて、今日も勉強会が始まった。

みんなは真剣に参考書に取り組み、ノートに力リ力リと書き込んでいるけど、私は、いまいち集中できない。

清貴さんが一目ぼれした相手はだれなのか？

この秋に予定されている交換留学に参加するかどうか？

私には、いろいろと考えるべきことがあった。

みんなと同じように、参考書を広げ、勉強しようとするのだけど、いまいち気分が乗らなかつた。

ついつい窓の方へ目が行き、空を流れる雲が、どんどん変形していくのを眺めていた。

最初は、ソフトクリームの形、それから、いびつなハート、ウサギがぴよんと跳ねる寸前の姿勢をしたかと思うと、馬がいななき、四分休符なのに、変形は中断されない。

もちろん、群れ飛ぶパンツなんて見えはしなかつたけど……

ふつと、視線を地面の方へさまよわせると、裏庭の植物棚のベンチに人影が見えた。

もうほとんど満開といってもいいような、見事な紫の花房が垂れ下がる植物棚の下、花房のひとつひとつを確認するかのようになり、見上げている男性の姿。

……清貴さん。

心臓がトクンと跳ねた。

私、静かに立ち上がり、部屋を出て、廊下へ。

私ではなく、他のだれかの面影を追い求めている男性のもとへ。

たぶん、傷ついてしまいかもしれない。

それでも、私の気持ちはとめられない。

私、何も考えず、考えようとせせず、ずっと憧れ続けた人のもとへいそいだ。

初恋の終わり 2

清貴さん、ベンチに座って、相変わらず頭上の花房を熱心に見つめている。

「清貴さん？」

視線が地上へ下りてきた。

「やあ、つかさちゃん」

いつもの柔和な笑顔。

「あの、学君に聞きました。どうして、ここに清貴さん、座ってるのかって」

「え？ ああ、ははは、俺って、ちょっと往生際の悪い、格好悪いヤツだよな？」

さびしそくに笑ってみせる。

「俺だって、分かってるんだけどな。半年も探していて、まだ見つからないってことは、あの子、俺のこと、避けてる、嫌ってるってことなんだろう」

私、急に妙なことを思った。

そういえば、清貴さんと同じような表情をしていた人、最近見たような気が。

だれだったろう？

「でも、みつともないって、分かっているけど、あきらめられないんだ！ あきらめきれないんだ！ ここで待っていたいんだよ。いつかそのうち、あの子が現れるかも知れないから。たとえば、この花が満開を過ぎて、散ってしまったとしても、そのあとも」

前かがみになって、両手を祈るように組み合わせた。

「うっん。清貴さん、全然、格好悪くないよ。むしろ、格好イイくらい！ 清貴さんって、すごく、すごく、素敵だと思うよ」

「ありがと、うれしいよ。君みたいな子に、そんな風に言ってもらえると、すごくうれしい」

口元をほころばせては見せたけど、目は笑っていない。それに、たぶん、私の姿を見てなんかいない。

今の言葉、私の偽らざる気持ちってヤツなのだけど、全然、清貴さんには届いていない。

やっぱり、私じゃダメなのね……

私、目の縁が熱くなっていくのに気づいた。

熱いものが目の端から湧き上がってくる。

清貴さんの姿が、にじんで見えてきた。

ダメ！ 私、自分を抑えられなくなっちゃいそう！

慌てて、清貴さんに背を向け、こぼれ落ちないように、顔を上げた。そして、祈るように、つぶやく。最後の望みを賭けて……

「私、清貴さんのこと、好きでした。ずっとずっと、小学生のときから……」

でも、間髪いれず、いつもの清貴さんの柔らかな声音で返事が来た。

「ああ、俺も、君の事、好きだよ。妹みたいで、可愛くて、明るくて。こんな子が兄妹にいたら、どんなに幸せだろうなって、いつも思ってた」

胸が痛かった。

不意に、目から涙があふれ、こぼれた。

清貴さんの見えないところで、地面に水滴が落ちる。ぽたっ、ぽたっ。

清貴さんにちゃんと受け止めてもらえない私の気持ち、宙ぶらりん。

好きだという想いだけが空回り。

私がどんなに清貴さんのことを想っても、決して、それには気づいてもらえない。これまでがそうだったように、たぶん、これから……

私、空を仰いだ。

今日も青空。五月晴れ。

どこまでも、青くはれた空に、遠く白い雲の筋が長く伸びていく。飛行機雲。

あの飛行機は、どこへ飛んでいくのだろうか？

外国かな？ パパがいるアメリカ？

ねえ、一緒にどこかへ連れて行ってくれない？

アメリカ……

「飛行機雲だね」

「うん」

ともかく、一度、ぎゅっと目をつぶって、何とか涙を切り、満面の笑みを作って、振り返った。

そして、できるだけ明るい声で清貴さんに別れの言葉を告げた。

「私、思うんですけど、待っている人は、近いうちに、きっと現れますよ」

「うん？ ああ、ありがとう」

「ううん、あ、清貴さん、私の予言信じてないな？ 私の予言って、結構当たるんだから」

なんてっ たって、美の女神・神宮寺つかさ様なのだから。

私、気がついてた。

清貴さんと同じ表情でいた人が誰なのか。

たぶん、裏庭のこの場所を、その表情でじっと見つめていた人。

彼女は学校へ来るたびに、期待を抱いて、この場所を見ていた。

もしかしたら、あの人に会えるかもしれないと。

たぶん、学校に着いたら、あそこへ急いでやってきて、目を閉じたまま、ここが見える場所へ近寄り、深呼吸して、祈るように目を開けていたのだろう。

約束した花が満開になる季節がもうすぐ、今度こそは、あの人がそこにいるかも知れないと。

でも、そのたびに、期待は裏切られた。だれもそこにはおらず、

だれも待つてはいなかった。

それでも、あきらめ切れなかった。だから、何度も口実を見つけ
ては、学校へ来た。

だから、あんな風にこの場所を悲しく見つめていたのだろう。
再び出会えなかったことを、残念に思っている今の清貴さんのよ
うに。

私、清貴さんに背を向け、校舎へもどりながら、いろいろ考えて
いた。

なぜ、清貴さんが半年かけて、学校中を探したにもかかわらず、
彼女を見つけることができなかったのか。

彼女が最近になって、なぜ頻繁に学校へあらわれるのか。

彼女は、清貴さんのことをどう思っているのか。

全部、私には分かった。

全部理解したことを、私は悲しく思った。

もしかしたら、私が黙っていたら、二人はこのまま出会わないか
もしれないし、そうすれば、清貴さんもいずれあきらめて、私にち
やんと向き合ってくれるかもしれない。

私が、本気でズルク立ち回れば、それも十分に可能だと思う。

でも、私は、そんなことをしない！

清貴さんや彼女を傷つけない。

二人とも、私には大切な人。私が不幸にはしたくない人。

私、自分でもバカだと思う。

大馬鹿者！！

でも、それでも、大馬鹿者でいいと思う。

私が生まれて初めて好きになった人が、心から幸せだと思ってく
れるのなら。

それが正解なのだと思う。

だから、これから、私、すごくバカなことをすることにした。

私自身が後悔しないために。

前を向いて、歩いていくために。

一歩、踏み出した私、涙はもう乾いていた。

初恋の終わり 3

私、静かに生徒会室へもどった。

勉強会はいつものように、おしゃべりタイムに移行していて、部屋の中は騒々しかった。

「あ、つかさちゃん、おかえり、どこ行ってたの？」

「ちょっと、外の空気、吸いに」

そ、とかなんとか、つぶやいたけど、ひかりん、何か探るように私を見ている。

「ん？ なに？」

「え？ ああ、いえ、なにも……」

ひかりん、なんだかもじもじしちゃって、ヘンなの。

「ええーと、その、なんか、つかさちゃん、今日は綺麗だなんて思ってた」

私、うすく笑みを浮かべて、ひかりんを見る。

たちまち、ひかりん、ドギマギした様子で、

「あ、いや、その。つかさちゃんはいつも綺麗だけど、なんていうか、その、今日は一段と綺麗だなんて、その……」

「ありがと、ひかりん」

「ええっと……ど、どういたしまして」

気の毒なぐらい、赤くなっちゃった。

その後、私、会長に近づいていく。

「会長、お話が……」

何かの書類に視線を落としていた会長、顔を上げて、私を見た。

「ん？ ああ、なに？」

「あの」

帰り道、今日は学君と一緒に。

昨日は空手部の用事とかで、学君と一緒にじゃなかったけど、そん

なときに限って、あんな事件が起こった。

大事なときに、一緒にいなかった学君。

今日は一日、犯人たちを捕まえるのに貢献したありさちゃんを誇らしく思っていた反面、実は、すごく凹んじやっていた。

「つかさ、わるいな、昨日は、一緒に帰ってあげられなくて」

「ううん。大丈夫、気にしなくてもいいよ」

「そ、相手は結構弱かったし。どうってことなかったよ」

「そそ、ありさちゃんがいたから、あの最中でも、全然心配じゃなかったよ。むしろ、あんたがあそこにいたら、かえって、危険になつてたかもね。あんたのことだから、腰抜かして、お漏らししてたかも」

「なにっ！ だれが腰抜かして、小便垂らすって!!」

「あんたよ！ あんた以外にだれがいるのよ！ このヘンタイ・ストーカー男！」

「なにを！ お前の方こそ、変態女のくせに、なに言いやがる！」
相変わらず、学君とひかりんは、寄ると触ると口論がはじまっちゃうんだから……

とにかく、フンツてお互いにそっぽを向き合って、学君とありさちゃんが私たちの前を並んで歩き始めた。

「昨日は、ホント、悪かったな」

「ううん、いいの。気にしないで」

「俺がいたら、あんな危険な目にあわせずに済んだかも知れなかったのに……」

「ありがとう、でも、大丈夫だったから」

「お前を守るのは俺だって決めてたのに。ごめんな、肝心なときにいてあげられなくて」

「学……」

見詰め合うふたり、いつの間にか手をしっかりと握り合い、どんな顔が近づいていく。

って、お二人さん、私たちがすぐ後ろを歩いているのを忘れてい

ませんか？

ひかりん、わざと大きな音を立てて、コホンなんて、咳をして見せてるし。

あらら、二人とも、慌てて跳び離れた。

「あら、私、悪いことをしたかしら」

ちつとも、申し訳なさそうな顔もせず、しらっとそう言う女が私の隣に一人。

ちよっと心の中で拍手したりして。

昨日の交差点。

今日は警察官が一人立って、周囲を厳しい視線でにらみまわし、警戒している。

「あ、ご苦労様です」

「見回りご苦労様です」

「すみませんけど、私たちの安全のために、しっかりと働いてね」

「地域の安全のために、よろしくお願いします」

なんて、私たち口々に声をかけていった。

ついでに、いつものエンジェルスマイルつき。

とたんに、警官さん、日に焼けた顔をどす黒く染めて、私をじっと凝視してくれる。

どう見ても、私にだけ敬礼して、

「はっ、本官、この職務を誠心誠意、勤める所存であります！」

だって。なんか、大げさでヘンなの！

その警官さん、私たちが向こうの角を曲がって、見えなくなるまで、私の方を向いて、敬礼したままだった。

ちようど、おばあさんが『山本』さんのお宅はどこですか？　っ

て、たずねてきてるのに、完全無視だよ。

おまわりさん、大丈夫？

帰り道も、警察が動いた効果があったみたいで、だれも男たちは

現れなかった。

なんといつても、昨日の今日。

昨日と同じようなことが今日もないとは限らない。

私も、学君も、ありさちゃんも、なんとなく周囲に目を光らせ、警戒しながら、帰ってきたのだけど、拍子抜けするほどなにもなかった。

通りを掃いていた本多のおばあちゃんも、『今日はなんだか、静かだねえ〜』なんて、うれしそうにしている。

このところずっと、ヘンな男たちが、ウロウロしていたので、気が抜けずにいたけど、ようやく、問題が解決して、私たちと同じように、近所の人たちも、みんなホッとしているのだらうなあ〜

考えてみたら、私のせいで、近所の人たちにも、いらぬ迷惑をかけていたんだね。

なんか、申し訳ないような気もする。

もつとも、私のせいというより、私のこの美貌がいけないのだけど……

私のような超絶した美貌の持ち主には、平凡な幸せって、望み得ないことなのかもしれないわ！

神にも比肩する美に恵まれた私には、波乱万丈な人生がこれからも待っているのね。

がんばれ、私！ 負けるな、つかさ！ ふぁいとぉ！

初恋の終わり 4

うちに帰り着き、いつものように、4人で私の部屋に集まった。

「なんか、拍子抜けだな」

「うん、そうだね」

「でも、ちよつとホツとしたかも」

「きつと私たちの勝利ね」

なんて、口々に感想を言い合う。

「でも、これで、もう、私が泊り込む必要はなさそうね」

「ああ、そうだな。それに、俺が女装しなくてもよさそう」

「ええ！？ あんた、あの格好、結構似合ってたのに」 うちのクラスでも、何人かあの姿見て、まなピーファンクラブに入会した子いたんだよ」

「ぶつ、ファンクラブって！ なんだよ、それ？」

「決まってるじゃない！ 神宮寺学って変態男がいろいろ、悪趣味でマニアックな頭のおかしな連中のあつまりよ！ どこがいいのかわらないけど、あんた、うちの学校の男子じゃ、結構、人気のある方なのよ」

それ聞いて、学君、ニヤニヤしちゃって、いやらしい。でも、ありさちゃん、そんな学君をすごい目でにらんでる。ちよつと怖い。

「そっか、俺って、結構、もてるんだな」

「そうみたいね。きつと、みんな目がどうかしてるのだね。なぜかわしい」

さもいやそうに首をふつちやって。そんなひかりんをも、物騒な目でありさちゃん見つめてる……

こ、怖い！！

「まあ、うちの学校の男子の中で、今は、あんたのファンが一番多いわね。あと、うちのクラスの竹田がいろいろ子も多いかな」

「へえ」 D組の竹田っていったら、前に、つかさにコクってきた

ヤツじゃん?」

「え? そうだっけ?」

「ほら、4月のはじめ頃に、ナヨナヨとした感じのヤツで、体育倉庫の裏によびだして、付き合ってくれなきゃ、自殺するとかなんとかほざいていたヤツ」

「うくん……. そんな男子いたっけ? 覚えてない」

「あらら、竹田もかわいそうに。あの後、早まったことをしないように、なぐさめたり、励ましたり、大変だったんだぞ」

「そうだったんだあ」

「本当に覚えてない?」

「うん」

がっかりしてる。

学君がこんなにがっかりするなんて、実際に、よっぽど大変だったみたいね。

「あなたの女装姿を見てさ、みんなかわいって騒いでいたわよ」

「うくん……. なんか、それは、微妙にヤだな」

「もうみんな、あの姿に夢中よ」

ひかりん、なにか企んでいるのかしら、うすく口元に笑いを張り付けて、楽しそうにしている。

「毎朝のあの姿が見れなくなったら、みんながっかりして暴動がおこっちゃうかも」

「ははは、まさか」

「うくん、本当よ。それぐらいみんなあの姿、楽しみにしているのよ」

「そ、そっかあ」

学君、照れてるし。

「あなたの女装を見た子たち、みんなあの美少女男子に恋しちゃったって」

「ははは、てれるなあ」

「神宮寺学は俺の嫁！ とかなんとかいっちゃってさ」
「ん？」

学君、動きが止まった。なんか眉根を寄せて、険しい顔。
「ホント、うちの学校の男子たち、男だろうが女だろうが、見境なしなんだから。バカツみたい！」

「・・・・・・・・・・？」

「なにが、『人を愛するのに、性別なんてつまらないことを気にするのかい？』なのよ！ ああ、気持ちワル！ あの変態男どもには、むしずが走るわ」

「つて、俺のファンつてのは、男かい！！」

「当たり前じゃない！ どの世界に、あんたなんか好きになる特別な女子がいると思うのよ！ バカな妄想は捨ててしまいなさい！ 変態男には、変態男がお似合いなのよ！」

「な、なにを！」

つて、また、喧嘩だ。この二人は、いつも、いつも・・・・・・
そもそも、その手の恋愛感情に関しては、ひかり人には、四の五の言う資格がないと思うのですけど。私としては。

まさに、人を愛するのに、性別なんて気にしなかったのではなかったっけ？

で、でも、ありさちゃんのひかりんを見る目に、ますます殺気が・・・・・・

こ、こ、怖すぎる〜！！！！

「それは、そうと、学君」

「え？ なに？」

「日曜日、清貴さん、ヒマかどうかわからない？」

学君、目をぱちくりさせる。

ありさちゃんも、ひかりんも、私の唐突な質問を、なにげとって様子で見守っている。

学君は、すぐに真剣な表情で、私に向き直った。

この中で、多少なりとも事情を知っているのは、学君だけ。可能性がないことを承知の上で、まだ清貴さんを追いかけるつもりか？ 覚悟はついたのか？ って目で訊いてくる。

私も、うんと小さくうなずく。追いかけはしないけど、とうに覚悟は決めてある。

そっか、って小さくつぶやいて、

「たぶん、日曜日の夜なら、空いてると思うよ。大学院休みだし、道場も夕方までだし」

「うん……… そっか、やっぱり夜でないと、ダメかあ」

「あとで、道場行くから、清貴さんに訊いてみようか？」

「え？ うん、お願い。じゃ、メールで教えて」

「ああ、はいよ」

気安く、請け負ってくれた。

他のふたりは、不思議そうにしているけど、なにも説明はしなかった。

その日の夜。

私のケータイに学君からメールが届いた。

『清貴さん、日曜日は、夜7時以降なら、なにも用事がないらしい。どうする？ 清貴さんのケータイの番号か、アドレス、そっちへ送信しようか？ それとも、俺が誘う？』

ホント、学君は気がきく。

でも、私、清貴さんのアドレスなら、既に知っている。

『ありがとう、学君。清貴さんのアドレス知ってるから、直接メールしてみる』

学君に感謝のメールを送信して、ケータイに大事に保管してあったデータを呼び出した。

今まで、何度、このアドレスを眺めて、ため息をついたことだろう。

何度、途中までメール文を書き、完成させることもできず、送信

もできずに、消したことだろう。

生まれて初めて好きになった人に送る、最初で最後のメール。ボタンを押しこむ指が震えた。

なんども書き直し、なんども見直して、メールを書き上げた。

『清貴さん、神宮寺つかさです。会って、お話ししたいことがあります。日曜日の夜7時、今日お会いした学校の裏庭のベンチでお待ちしております』

結局は何の変哲もない文章。無味乾燥なメール。私の気持ちを必死に抑えて、書き上げた。

初めて、清貴さんに送るメールなのだから、もっと感情のこもった感動的な文面になるだろうなって、今まで想像していたけど、書き上げてもなんの感想も湧かなかった。

ただ、淡々と事務的に送信ボタンを押したただけだった。

後は、熊坂会長宛てに、夜の7時になったことを伝えるだけ。

これで、私のできることはすべて、終了。

私は後悔しない。

前を向いてすすむ。決して、後ろを振り返らない！

次の日、目を覚ますと、私のケータイに清貴さんと熊坂会長から了解の返事が来ていた。

初恋の終わり 5

日曜日、私は一人で校舎へと入っていった。

あれ以来、我が家の前で待っている男たちは現れないし、学校への道の途中で待ち伏せる男もいない。

私は安心して、学校へ来ることができる。

今日は日曜日でお休みだけど、明日からもこうだといいな。

今日は朝からだらだとテレビを見て過ごしていた。

いつもの平和な日曜日のスポーツ番組や2時間ドラマの再放送、政府の人たちを茶化すだけの社会派バラエティ。

どれを見ても、なんとも思わない。

ただ、テレビをつけていただけ。中身なんて、どうでもよかった。関心なんてなかった。

日曜日の昼間にテレビをつけて、画面を真剣に見ている人は日本にどれくらいいるのだろうか？

ただ、暇つぶしだけのテレビ観賞。

テレビ局もそれが分かっているのか、番組の質もいい加減。中身がなくて、薄っぺら。

テレビをつけて見ているのではなく、目を開けて眠っていたかのような気分だった。

そして、夕方、21世紀が何年もすぎているのに、いまだに昭和の生活にどっぷりと漬かっている家族たちの日常を、コミカルに描く国民的アニメの主題歌がテレビから流れる頃、私は、着替えて、学校へ向かった。

そう、今日もいい天気、だった。

校舎には夕日が差し、あたりが赤く染まっている。

部活動で出入りする生徒たちのために、開かれていた校門を通り、

玄関から校舎の中へ。

用務員室へよって、カギを借り出し、旧館2階の生徒会室へ向かう。

夕日が差し、赤く染まった階段を上っていると、誰かが上から下りてきた。

踊り場の窓から差し込む夕日の光を背にしているので、真っ黒な人影だけしか分からない。たぶん、男子。

でも、向こうからは、私の姿はよく見えているみたいで。

「やあ、神宮寺さん。どうしたの日曜日なの？」

この声は……

「あ、佐野君か。ちよつと生徒会室に用事があつて」

お互いに2、3段ぐらいまで近寄り、立ち止まった。そこまで近づけば、逆光でも、佐野君の表情ぐらいはみえる。

「それより、佐野君は、なにしてるの？」

「ああ、ちよつと先生の手伝いにな。これでも、副委員長だから……」

「それは、それは……」苦労様

「ああ、ありがとう」

日曜日だというのに、先生の手伝いで登校させられるって、可哀想に。

佐野君、私の背後を盛んにうかがっている。

「なあ？ 今日、斉藤さんや神宮寺は？ 一緒じゃないの？」

ありさちゃんと学君のことを訊いているのだろうな。

「ううん、今日は私一人」

「ええ！ それは、ちよつと危ないよ。こないだ、あんなことがあつたばかりじゃん！」

「う、うん……」

「よし、じゃ、俺、この書類、先生の机に置いてくれば、仕事終わりだから、家まで送っていつてやるよ」

別に下心があるっていうような表情ではない。純粹に、私の身を

案じて、そんなことを言ってくれているみたい。

「ううん、大丈夫。一人でも帰れるから」

「で、でも……」

「大丈夫！」

ちよつと強い口調になった。

たぶん、帰りは私一人の方がいいと思う。だれも近くにいない方が。

これから起こることが起こることだけに。私は一人でいる方がいいのかも。

「そ、そっか？ なら、いいんだけど……もし、一人で帰るのが心細かったら、いつでも俺呼びに来いよ。しばらく教室にいるから」

「うん、ありがとう」

「ああ」

佐野君と別れて、渡り廊下を渡り、旧館にはいって、生徒会室へ廊下を歩いていく。

テレビでは、いたずら小僧の少年がお父さんに大目玉を食らっているころ、私は、生徒会室のドアの前に立った。

目を閉じ、大きく深く深呼吸し、決意の宿った眼を開く。

そして、鍵を回し、中へ。

いよいよだ。

奥の窓の近くに立ち、学校の裏庭を眺めた。

紫の色の満開の花が巻きついた植物棚の下のベンチには、もちろん、まだだれもやってきてはいない。

清貴さんは、柔道部のコーチが7時前に終わるから、それまでは、やってくることはできない。

私は、窓際に一番近い席に座り、約束の人物が戸口に現れるのをじっと待っていた。

戸口のドアは開けっ放しにしてあり、ドアの向こうの窓から見え

る空は、暗く濃い青の世界が広がっていた。

トワイライトの世界。逢魔ガ時。

太陽はいつの間にか沈み、残照だけがあたりを照らす。

やがて、遠くから、かすかにペタペタとスリッパの音が聞こえてきた。

生徒なら上履きを履くので、このような音はしない。

どうやら、待っている人がやってきたみたいだった。

その足音はしだいに、生徒会室へ近づき、はっきりと大きく聞こえるようになった。

ペタペタペタペタ……

そして、戸口に、その足音の主が現れた。

逢魔ガ時にあう人物。

なぜだか、私、身震いした。日が落ちて、少し冷えてきたのかも
しれない。

初恋の終わり 6

「あ、神宮寺さん」

「こんばんは」

戸口に現れたのは、髪の長い女性。端正といってもいい顔立ち、美しい人。

まだ、未成年。少女らしさが、どこかしら残っているけど、でも、私なんかより、はるかに大人びた雰囲気あたりには振りまいている。ゆつくりとした足取りで、私の隣にやってきて、席に着いた。

「瞳から訊いたけど、なにか私に相談したいことがあるんだって？」
ちよつと不思議そうな目の色。口元にかすかな微笑を浮かべて、私を見つめているのは……

梅田美樹。

さくらヶ丘女子高校最後の生徒会長・梅田先輩だった。

「わざわざご足労おかけして、申し訳ございません。早速ですけど、先輩、この春まで、交換留学の制度で留学してらしたんですよね？」

「え？ ええ、そうよ」

「ちよつと、そのことについて、詳しく教えていただきたいなって思つて」

「ああ、そういうこと。いいわ、なんでも訊いて」

「ありがとうございます」

急速にあたりから光が弱まり、暗くなってきた。

「ちよつと暗いですね。明かりのスイッチ入れますね」

私、立ち上がって、入り口の方へ歩いていった。

「ええ、そうね。外、真つ暗……!？」

そのとき、私の背後で、息を飲む気配がした。

私、照明のスイッチを入れた。

振り返ると、ガラスに写る梅田先輩の顔が見えた。

目を大きく開き、呆然と外の一点を見つめていた。
部屋の光が邪魔で、もう暗い外の様子なんて見えないにも関わらず。

「先輩？」

私の呼びかけに、反応がない。ただ、ガラス越しに外の様子をのぞこうと、一生懸命。

私、近づいていき、先輩の肩に手を置いた。

「え？ あ、ああ、神宮寺さん……………」

「やっぱり先輩だったんですね？」

「え？」

「清貴さんが探していた人って」

「……………？ だれ？」

「去年の秋に、裏庭のベンチにいた男の人です」

梅田先輩の目が大きく見開かれた。

私、精一杯の笑顔を浮かべた。得意のエンジェルスマイル。どんなときでも、まわりの人を魅了する必殺の笑顔。私のトレードマーク。

「先輩、行ってあげてください。清貴さん、去年の秋から、ずっと待っていたんです。あのときの少女といつか再び出会えるかもしれないって」

「……………!!」

「先輩も、やっぱり清貴さんのことを探していたのでしょうか？ 待っていたのでしょうか？ だから、裏庭の花が満開になる季節に合わせて、なんだかんだと用事を見つけて、学校へやってきたのでしょうか？」

「ど、どうして……………」

「似たものカップルですね」

軽く笑う。

「清貴さんも、先輩も、お互いに惹かれあい、一目ぼれして、約束を律儀に果たそうとするなんて」

ちよつと奥歯をかみしめた。

「ともかく、行ってあげてください。私のことは、もういいですから」

「で、でも……」

「前を向いて歩きなさい。決して、後ろを振り返るんじゃないわよ！」

私、入り口の方を指差した。

「え？」

「観桜会するとき、そう言っていたの先輩自身ですよ。ほら、立ち上がって、歩いていくの！」

先輩の手をとって、引つ張り、立たせ、そして、背後に回って、入り口の方へ背中を押してあげた。

2、3歩たたらを踏んだけど、踏みとどまって、私の方を振り返った。

私、こぶしを固めて、あげて見せた。

「グッドラック！」

先輩、ようやくうなずいた。そして、前を向いて、小走りにでていった。

廊下へ、外へ。

私、先輩の背中へ向けていた笑顔のまま、近くの椅子に座り込んだ。

気づいたら、頬を暖かいものが流れ落ちていた。慌てて、スカートのポケットを探り、ハンカチを取り出す。そのとき、スカートの裾がシミになっていくのが目に入った。

シミがどんどん広がり、数が増えていく。

なんだろう？

なんで、シミなんて私のスカートについているのだろう？

ぼんやりと頭の中で考えていた。

シミをハンカチで押さえようとした。その途端、手の甲に生暖かい水滴がはじけた。

手が止まった。

そうか、私、泣いているんだ。

こうして、私の初恋は終わった。

どれぐらい、そうして私は泣いていたのだろうか？

静かに、泣き声を上げることもなく、ただただ涙をこぼすだけ。

ハンカチを握り締めた手は、涙でベトベトになっていた。

と、突然、場違いな音が、体の奥から聞こえてきた。

ぐうう~~~~

え？ ウソ！ こんなときなのに……

こんなに悲しんでいるのに、なんでお腹って減るの？

信じられない！！

と同時に、なにか納得するものも感じていた。

夕食をとらずに学校へ来たのだし、すでに、いつもの夕食時間は

とつくにすぎているだろう。

どんなに悲しくても、体は正直に反応するのだ。

「ふっ、ふふふ、ふふふふ、ふふふふ」

私、とうとう笑い出してしまった。

すぐく滑稽なものがそこにはあった。

「あははは、ははははは、ははははははは」

お腹を抱え、足をバタバタさせ、私は一人笑い転げていた。

と、突然……

「お、おい？ 神宮寺、大丈夫か？」

部屋の隅から、遠慮がちに声がかけられた。

「え？」

ビックリした。もしかして、私が泣いている間に先輩がもどって

きていたのかしら？

私が泣いているのを見られたりしたのかしら？

もし、そうなら、私の涙の意味、さとられちゃったのかしら？

そう考えると、その場に固まってしまふ。それから、目尻に涙を

浮かべたまま、首だけで、その声のした方をみた。

先輩ではなかった。

「佐野君!？」

「大丈夫か、神宮寺? 泣きすぎて、頭おかしくなったのか?」
気味悪そうに私を見ている。

「さつきまで、大人しく泣いていたかと思ったら、急にバカ笑いして、わけ分かんね。本当に、大丈夫か?」

「ど、どうして……」

「ん? ああ、そろそろ帰ろうかと思って、念のためここまで様子を見にきたら、お前が泣いていたから、そこに座って、泣き止むのを待ってたんだよ」

部屋の入り口脇の椅子を指差す。

「そしたら、急に大笑いしてさ。気色悪いヤツだな! お前って」
「な、な、なんですって!」

この美の女神・エンジェルつかさちゃんを捕まえて、気色悪いだなんて!

こ、こんな無礼で不愉快な男って、初めてだわ!

絶対、絶対、今の言葉、死ぬまで忘れないからね!

覚えてらっしゃい!

私、佐野君の顔を強くにらんだ。

でも、佐野君、そんな私に、やわらかく微笑みかけて、

「もう立ち直ったみたいだな。そんな顔をできるなら、もう大丈夫。安心したよ」

手を差し伸べてきた。

でも、その手を無視し、立ち上がったのは、ちょっと大人げなかったかしら?

とにかく、私、気取った足取りで、机の上に放り出してあったカギをとって、入り口へ歩いていった。

私の背後で、佐野君、肩を軽くすくめて、ついてきたみたい。

部屋の明かりのスイッチを消し、カギを掛け、廊下を歩きはじめた。

「ほら、神宮寺。そんな顔で学校内を歩いてたら、何事だっと思われから、一旦、顔洗ってこいよ！ ほれ、これ使いな」

そういって、投げて寄越したのは、くしゃくしゃになったハンカチ。

あ、そういえば、私、さっきすごく泣いていたのだけ？

きつと目元を赤く泣きはらして、すごいことになっているかも・

・

きゃあ~~~~

悲鳴を上げながら、近くのトイレに駆け込んだ。それから、洗面台でジャブジャブ顔を洗った。

涙と一緒に、私の想いも洗い流すかのように。

水の冷たさが心地よかった。

天の川を渡って くエピソード

青年はベンチに腰掛けていた。

知り合いの少女に呼び出されたから。

なにか青年に話があるらしかった。

でも、もう陽が山に落ち、あたりは真っ黒になっている。

少女がやってきて、話が済んだら、家まで送ってやらなければ。

それと、先日、彼女は事件に巻き込まれたそうだし、まだ少女なのだから、こんなに暗くなる時間まで、外を出歩いているんじゃないと注意しなければ。

そんなことを考えながら、少女が現れるのを待っていた。

約束の時間はとくに過ぎていくが、少女の呼び出しのメールには、追伸で、他の用事が延びて、30分ぐらい遅刻するかもしれないなどと書いてあったので、大人しく待っていた。

空は満天の星空。

植物棚の天井には、たくさんの紫の花房をつけるツル植物が巻きつき、もう満開に咲き誇って、あたりに甘い匂いを漂わせていた。

その花房の間にも小さく星が瞬いているのが見える。

と、校舎の2階の部屋に明かりがともった。

こんな時間なのに、ここの生徒たちはなにをやっているのだろうか？
見るとはなしに、その明かりに視線をやった。

ガラス窓の低い位置に、女生徒のシルエットが浮かんでいる。

座っているのか？

あの髪型からすると、この青年が待っている少女ではないようだ。
ふっと、鼻先を甘い香りがゆれた。

少し風ができてきたみたいだった。

また、再び天井越しに星を眺めた。

東の空にアルクトゥールス、南にスピカが見える。春の大曲線。

それに、しし座のデネボラを足して、春の大三角。

高校時代に覚えた星の名前が、スラスラと出てきたことに、青年はかすかな満足を覚えた。

もう少ししたら、北東の山の上からベガが昇ってくるはず。

青年は、そちらの方向を祈るように見ていた。

そう、あれから、もう半年。

もうこの植物棚の花は満開に咲き誇り、甘い香りをあたりにふりまいている。

うっとりするような美しさ。

あのときの、秋の星空の下で見た、あの少女に勝るとも劣らない可憐さ。

ぜひとも、あの子に見せたいと思った。

いや、あの子と一緒に眺めてみたいと欲した。

だから、あんな強引な約束を彼女としたのだ。

もしかしたら、彼女は青年との約束をとくに忘れ果てていてい
るのかもしれない。

もしかしたら、彼女は他の男に恋をしていて、彼と花を眺めたい
とは思っていないのかもしれない。

もしかしたら、彼女は、あの強引な約束をした青年を嫌っている
のかもしれない。

いろんな、もしもが、青年の頭の中を駆け回り、渦巻いているの
だった。

そして、今回の満開時に彼女と眺めることができなくても、いつ
か再び会えることを願って、来年も、再来年も、毎年毎年、この場
所へ来ようと、星に誓うのだった。

少女は、黒々と聳え立つ山をにらんでいる青年を遠くから眺めて
いた。

後輩の少女に背中を押されるようにして、裏庭に飛び出してきた
ものの、いざあのときの青年を目の前にして、なんと声をかければ
いいのか分からなかった。

ずっと私のことを待っていてくれたのですね？
うつん、違う。

あの約束を覚えていたのですね？

うつん、それも違う。

少女は迷っていた。

全然、正しい答えを見つけれなかった。去年まで、学業の成績が3年間トップであり続けた自分なのに、なにが正しいのか、なにをすべきか分からないなんて……
ともすれば、このまま何も見なかったことにして、その場からはなれ、逃げ出したいという気持ちになる。

でも、それは絶対に間違いだという確信だけはある。

私は、一人で歩んでいかなければならない。

あのベンチに座り込んでいる青年のもとへ、一步一步と。

少女は胸の前に手を組んだ。

そして、静かに目を閉じた。

どうか、神様、私に勇気を……

脳裏にあの時見上げた4つの星の姿が浮かんだ。

少女のその小さな声が、神様の窓といわれる4つの星に届いたよ
うな気がした。

ゆっくりと目を開いた。

もう、迷いは消えていた。

それから、少女は一步を踏み出した。

「あれがデネボラ、アルクトゥールス、スピカ」

青年は、星をひとつひとつ指差し、自分の記憶を確かめていた。

大丈夫、忘れてなんかいない。

あの星空に夢中になっていた日々がよみがえる。

だれもいないはずの青年だけの空間。

だが……

突然、背後で人の気配が動いた。

かすかな躊躇したような息遣い。

青年は背後を振り返ろうともせず、じっと虚空をにらんでいた。背後に神経を集中して、後ろの人物の息遣いを探る。

やがて、青年の表情がゆるんだ。

「やあ、こんばんわ」

「こ、こんばんは・・・・・・・・」

「やっと来てくれたんだね？」

背後でうなずいたようだ。

「ね、見てよ。すごく素敵なお花だろうか？」

「え、ええ・・・・・・・・」

「この花を、この景色を君に見せたかったんだ」

「・・・・・・・・うん」

頭上の花房が小さく揺れた。

青年は、立ち上がって、ゆっくりと振り返った。

星の光を宿す瞳が、青年を見つめていた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

二人は、静かに見つめあっていた。

そして、微笑を交し合った。

「私、梅田美樹です」

「俺、三木清貴」

風が吹いて、花房が揺れる。

さらに濃い甘い香りが二人を包み込んだ。

二人だけの世界を覆い隠すかのように。

ちようど空の上では、星が流れた。天の川を渡って。

天の川を渡って くエピソード (後書き)

作者の創作意欲を維持するためにも、感想・レビュー・評価等いただけると、ありがたいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2343j/>

さくらヶ丘恋物語2 藤

2010年10月8日15時02分発行